

14.5

14.5-545



5

筑前王塚古墳



始



昭和十年十二月

史蹟名勝天然紀念物調查報告書

第十一輯

(筑前王塚古墳)

發行所寄贈本



前王塚古墳

昭和十年十二月



謹みて王塚古墳に敬虔の意を表す



美門南壁青毛左馬

筑前王塚古墳壁畫

14.5
545

筑前王塚古墳目次

第一	所	在	地	一頁		
第二	景	觀	三			
第三	發	掘	の	事	由	五
第四	古	墳	構	造	七	
		(1) 外	構	七		
			形	狀		
			封	土		
			葺	石		
			埴	輪	筒	
		(2) 内	構			
			玄	室	九	
			女	室		

筑前王塚古墳
目次

複床棺 (ダブルベット型)

石屋形

枕屏風石

燈明臺

周壁

楣石

闕石

力石

天井

石枕

石岩

裏地

目室

美室

石質

石材

第五 裝飾 壁畫
(1) 玄室壁畫……………一九
床棺附近……………一九

(2) 美室壁畫……………三五
燈明臺 (輪寶鏡紋形畫)
壁面……………三五
楣石面……………三五
繪畫に就て……………三五

第六 主 體……………一九
第七 副 葬 品……………三三
(1) 玄室副葬品……………三三

鏡及包布……………三三
玉、環類及鈴……………三三
刀 劍……………三三
直 刀……………三三
刀 子……………三三
毛痕に就て……………三六
上代の刀劍に就て……………三六

槍 鏃

褐鐵鑄に就て……………四

鎧 其他……………

馬 具……………

轡……………

鞍橋金具……………

鐙……………

杏 葉……………

雲 珠 類……………

金銅製品に就て……………四

(2) 齋 器……………四

美室土器……………

葉脈壓痕付土器……………

葉脈壓痕に就て……………五〇

封土内の土器……………

第八 王塚の名稱……………五五

第九 王塚の傳説……………五七

謝 辭……………五九

筑前王塚古墳圖版目次

繪 壁畫美門南壁青毛左馬 (原色)

圖版第一 筑前王塚古墳位置要圖

圖版第二 五萬分一地形圖上ノ位置

圖版第三 景觀要圖

圖版第四 古墳ノ遠望

圖版第五 石室發見當時ノ風景

圖版第六 古墳平面及斷面圖

圖版第七 石室ヲ通シテ斷面圖

圖版第八 古墳ノ外觀

圖版第九 封土ノ成層

圖版第一〇 葺石 (中段南側)

圖版第一一 葺石 (中段北側)

圖版一二 石室內觀見取圖

圖版一三 石室平面圖

圖版一四 玄室東壁面圖

圖版一五 玄室東壁見取圖

圖版第一六	石室南壁面圖
圖版第一七	玄室南壁見取圖
圖版第一八	石室北壁面圖
圖版第一九	玄室北壁見取圖
圖版第二〇	玄室西壁面圖
圖版第二一	玄室西壁見取圖
圖版第二二	美室東北壁見取圖
圖版第二三	美室美門壁面圖
圖版第二四	美室南壁見取圖
圖版第二五	玄室正面床棺及屋形
圖版第二六	燈明臺(南及北)
圖版第二七	玄室奧(東)壁構成觀
圖版第二八	玄室南壁下石枕
圖版第二九	玄室床棺下北壁
圖版第三〇	玄室北壁下西壁ノ隅角及石枕
圖版三一	美門
圖版三二	美門楣石面(玄室側)
圖版三三	美門闕石

圖版第三四	玄室南壁、西壁隅角ノ力石
圖版三五	扉石
圖版三六	美門南壁面(美室側)
圖版三七	美門北壁面(美室側)
圖版三八	美室西壁ノ裏石垣面
圖版三九	美室東北壁粘土目地
圖版四〇	壁畫位置下圖版番號對照圖
圖版四一	玄室奧(東)壁々畫
圖版四二	屋形北支柱石壁々畫
圖版四三	屋形南支柱石壁々畫
圖版四四	北枕屏風石内面畫
圖版四五	南枕屏風石内面畫
圖版四六	屋形屋根石下面及同前縁面畫
圖版四七	床棺仕切面畫
圖版四八	床棺前方段面畫二
圖版四九	北燈明臺ノ畫
圖版五〇	南燈明臺ノ畫
圖版五一	玄室北壁々畫

圖版第 五二	玄室南壁々書…………… (原色)
圖版第 五三	玄室南壁面花紋様
圖版第 五四	同繪具肉盛最高花紋
圖版第 五五	玄室美門北壁々書…………… (原色)
圖版第 五六	玄室美門楣石壁書…………… (原色)
圖版第 五七	玄室美門南壁々書…………… (原色)
圖版第 五八	美室美門南壁々書…………… (原色)
圖版第 五九	美室美門楣石壁書…………… (原色)
圖版第 六〇	美室美門北壁々書…………… (原色)
圖版第 六一	輪寶鏡紋形ノ一例
圖版第 六二	鞍(矢筒)繪ノ一例
圖版第 六三	楯繪ノ一例
圖版第 六四	副葬品所在開取圖
圖版第 六五	青銅鏡(仿製四神四獸鏡)表面
圖版第 六六	同 上 裏面
圖版第 六七	青銅鏡拓本及斷面圖(實物大)
圖版第 六八	鏡ノ包布殘片
圖版第 六九	鏡ノ包布、顯微鏡寫真

圖版第 七〇	玉類
圖版第 七一	銀製小鈴
圖版第 七二	直刀 三振
圖版第 七三	鹿角製刀裝具及直弧紋殘影
圖版第 七四	刀子 一口
圖版第 七五	刀子鞘毛痕顯微鏡寫真
圖版第 七六	刀子 二口
圖版第 七七	刀子鞘拓本(實物大)
圖版第 七八	直刀及槍寸法圖
圖版第 七九	槍穂ト石突
圖版第 八〇	薙刀型、鐵器
圖版第 八一	曲釘形金物
圖版第 八二	鐵鏃
圖版第 八三	矢纖維及褐鐵鏃ノ沈澱被覆物
圖版第 八四	鞍橋金具鞍
圖版第 八五	轡(銚付曲玉型鏡板)(5號)
圖版第 八六	轡(ハト型鏡板)(6號)
圖版第 八七	轡(同)(7號)

圖版第 八八	轡 復原圖 (い號)
圖版第 八九	轡 復原圖 (ろ號)
圖版第 九〇	壺 一掛
圖版第 九一	輪 二掛
圖版第 九二	鎧 (挂甲) 斷片
圖版第 九三	杏葉及雲珠
圖版第 九四	辻金物
圖版第 九五	杏葉
圖版第 九六	辻金物 杏葉組
圖版第 九七	雲珠 杏葉組
圖版第 九八	劍菱型 杏葉拓本 (實物大)
圖版第 九九	美室内ノ齋器
圖版第一〇〇	美室ノ埴、其中ノ沈澱土層
圖版第一〇一	美室内葉脈壓痕付土器 (い號)
圖版第一〇二	古墳出土 土器内面 葉脈壓痕 摸寫圖
圖版第一〇三	ホホノ木ノ葉脈分布圖
圖版第一〇四	美室内葉脈壓痕付土器 (ろ號)
圖版第一〇五	美室内葉脈壓痕付土器 (は號)

圖版第一〇六	封土ヨリ出土ノ土器
圖版第一〇七	埴輪圓筒 (破片)
圖版第一〇八	石劍 (破片)
圖版第一〇九	石砥 (破片)

上つ代秘められし塚に、敬意を手向け、

古墳調査の準備に説明順序をものせんと、調査目次を擇び、之に古墳管理者並に關係者の説明の葉、未參の人への道しるべを考へて、記述を平易に、該塚獨存のものには便宜假稱を呼び、奥都城を吊ひ、遺物の取調内容を挟み、傳説を語る文字を綴りたれど、文字なき古を想ひ、圖版を主目として編輯しました、顧みて古墳に對する禮を欠いでは居ないか、只管古墳の保安を念する次第であります。尙、考古の及ばず、自ら慥らざるものありながら筆を擱けば、古墳の主よりほゞ笑みせらるゝを覺ゆるものがあります。

斯道篤學の方にとりては、記事に冗長の嫌ひあるを、幸に諒恕せらるゝやう希望しておきます。

昭和十年十二月

筆者

(寫眞は何れも筆者の撮影、未熟を謝します)

筑前王塚古墳 (Otsuka Ancient Sepulchre)

福岡縣囑託 川上市 太郎



第一 所在地

東經 百三十度三十九分四十六秒
北緯 三十三度三十五分六秒

福岡縣嘉穂郡桂川村大字壽命字坂元參百九番地ノ一	山林	一九〇・九〇
同	畑	五六・八〇
同	原野(石室)	二七八・六〇
同	畑	二四・四〇
同	墓地	一六八・一〇
同	墓地	一一八・四〇
同		八三七・二〇

を含む小丘地である。

而して前方部は既に以前開拓せられてあるが其所は

筑前王塚古墳 所在地

同縣同郡桂川村大字豆田小字岩ヶ鼻二十九番地ノ一 宅地 三二・〇〇坪

福岡縣廳より東六里七町十二間三尺二十四紵三五〇（直距離）
 國有鐵道筑豊線長尾驛より北四町四百三十六米突三六）
 長尾驛より左記各地の距離

驛名	哩數	紵數	三等乘車賃
東京驛	七五三・六哩	一、一六二・七紵	一〇・〇八錢
門司驛	四〇・八哩	六五・六紵	一・〇三錢
博多驛	二五・六哩	四一・二紵	六六錢
長崎驛	一一七・〇哩	一六一・八紵	二・三二錢
鹿兒島驛	一九九・六哩	三二一・四紵	三・八七錢

（註）斯道研究者ニハ古墳タルヲ認知セラルルモ一般ニハ高臺ノ上ニ更ニ盛土シタルモノニシテ樹木ニ蔽ハレ水田ヨリ相當高ク小丘ト見ユルヲ以テ小丘ト記セリ

第二 筑前王塚古墳景觀

長尾驛より北に歩する數十歩、人家を離るれば、一望濶然

金比羅山塊（五萬分一地形圖、壽命鶴田高地が西南の平地に其の突角を出せる洪積臺地の末端、其處に松の木立と竹林の茂つた小丘がある、この小丘を背にして南の目を受けた臺地に、壽命豆田の兩區に屬する合せて二十三戸の小村落がある。

其の中央の小丘が乃ち王塚古墳である。（水田上凡そ六十尺位）。

今この塚の頂上には樹木なく、數歩の畑地の跡がある。

塚よりの眺めは、誰しも直ぐ南、眼前の長尾停車場、又その南の豆田鑛業所の工場、人家櫛比せる光景が目に入る。

頭を上ぐれば南の彌山嶽（二四七尺）が真正面に聳え立つて居る。

此處より展望するには先づ首を西に向け安い様な地形的配景となつて居る。

西南の大根智山（二一五・一尺）西の三郡山（三〇九・〇尺）の翠巒が雲際に威容を並べ、夫等の溪谷より出て來る穗波川は、西南よりして古墳の西を洗ひ、北に流れ、古墳周囲の美田を灌溉して、

更に北に廻れば龍王山（二〇九七尺）へ蜿蜒として連れる峻峰、其の麓、即ち穗波川が北に流れゆく先きには、飯塚市街の繁榮が窺はれる。

東には古墳の小丘を庇護せるが如き金比羅山（三六〇尺位）が綠樹を冠つて居る。

東南には遠く、英彦山（三九五八尺）、馬見山（三二二七尺）、つゞく古處山（二八四五尺）の峻嶽連峰を眺

め來り、眺め送る、此の王塚の大觀である。
之等山嶽圍繞せる中に、種波の平野は開け、地上に美穀實り、地下に巨萬の寶礦(石炭)を貯へて居る。

王塚古墳の主は、實に此の地域を統治せる地位にあつたものと想像せらるるのである
附近の遺蹟

「出雲百穴」と稱する、砂岩穿鑿の横穴群は、此の王塚古墳の南方八百間に當つて居り、
神功皇后が三韓より凱旋後、東上の際御駐軍あらせられた大分八幡宮は西一里にある。

「甕棺」より多數の貝輪を出したる、飯塚市立岩の遺蹟は此の王塚古墳の北東約二里に當つて居る。

尙此の附近には、金比羅山、祇園山附近、天神山、中屋の山などに無名の古墳推定せらるるものが存在して居る。(圖版第二、第三)

(註) 嘉穂郡は元、嘉麻、種波の二郡なりしを明治二十九年合併して嘉穂郡となれり、而して桂川村は舊種波郡の内なり。

尙桂川村も明治二十二年壽命村、豆田村、中屋村、瀬戸村、土居村、吉良村、土師村、九郎丸村、内山田村の合併したる村名なり。

第三 筑前王塚古墳石室發見

發掘した事由

此の古墳所在地附近は株式会社麻生商店豆田鑛業所の石炭採掘の影響を受け、田地陷落して居るので、陷落地復舊耕地整理組合は其の復舊工事に使用のため、坂元區より鶴田區に亘る臺地小丘古墳の土砂を約二ヶ月間採取運搬して居つたのに、偶然古墳の石室一隅を發掘した。
豆田鑛業所の石炭鑛坑口は古墳を距る南方約五百間にある。

發見年月日及び狀況

昭和九年九月三十日 晴天

豆田鑛業所々員で此の工事監督者樺島梅太郎は、土工夫を督勵し此の小丘の土砂を切り崩し、トロツコにて數町離れた低地の田に運搬して居つた。

小丘は次第に切り取られ、時々土砂中に土器の破片等を認め、たが別に意にも止めず、其の内の大形の土器二三は拾ひ取つて居つた。

此の二三日前より、土砂に數多の石(徑五六寸より大なるは一尺位)が堀出されるので、之等の石は、田の復舊には邪魔物になるので、寧ろ夫等の排除に困却して居つた。然るに此の日午後四時過ぎ、一工夫鶴嘴にて石塊を取除きたる時、偶然一尺二三寸徑位の穴開きたるに驚き、直ちに樺島監督に報告したので、樺島は工夫頭と同伴現場に馳けつけたるに、早くも工夫が穴中に入らうとするので、之を制し、中を覗けば、相當廣き石室で、深さ四五尺もあらんかと思はれ、穴底に圓形の土器

(四個と覺ゆ)配置しあるを見た、そして奥の方に石扉が立つて居る、其の石扉の上に小穴があつて、尙奥にも石室があるものと想はれた、且つ穴底には水が溜つて何があるか分らない。

時既に日没に逼つたので、工事を中止し、今開いた穴を元の如く閉塞し、其の附近の破壊及び入壙を禁止して歸社した。

古墳石室所在地所有者は中島六三郎である。

翌朝、工事開始に當り、現場に臨んだ所、既に地主等は前夜古墳内の石扉を引き倒し、内部の埋藏物を各自に搬出した跡で、樺島監督如何に悔んでも萬事終れりであつた。

其後此處の土砂採取を中止したので、古墳は漸く其の跡を遺した譯である。

(圖版第三及第五)

第四 筑前王塚古墳構造

(1) 外 構

形 狀

塚は前方後圓型の大墳體であつたものが、數年前に其の前方部の一部は拓かれ民家の敷地となり、後圓部が残されて居つたのを、今亦、土砂採取のため其の半ばを切り取られた時に、石室を發見したので、全滅せんとした此の貴重なる古墳が其の死線一步前に蘇つた。

諸其の舊形を考ふるに、前方後圓の長徑凡そ二百七十尺位(八二米突位)後圓部の短徑凡そ百六十五尺位(五〇米突位)高さ凡そ二十九尺位(八八米突位)である。方向は西西南に面して居る。

而して前方部の南大半と、後圓部の西半分が切り取られたので、今ではP字型に残つてをる。

後圓部の殘丘南方には竹林の中に杉が粗立し、前方部の殘臺には松が點在して居る。(圖版第八)

後圓部は三段より成つて居るが、初め此の墳體は平地より一段高き所を土壇として此處に石室を築き、そして封土乃ち盛土したもので、後圓部の下段及前方部は元來の地山であるが、下段の南部上半より、中段、上段は盛土である。今、中段下段の大半、前方部殘部は墓地となつてをる。

此の古墳では、石室と後圓部の中心位置が一致を缺き、従つて石室と前方後圓部の主軸線が一致して居ない。(圖版第七)

封 土 (圖版第九)

この盛土に一種獨特の技工がしてある。

先づ赭色の粘土を凡そ五寸位一面に盛りたる上を地均し固め、次は色の異りたる黒色の粘土を又五寸位一面に積み上げ、之を地均し固め、又次は赭粘土、又次は黒粘土と一層一層必ず交互に入念に色を置き更へ層々積み上げ三間餘の高さに築造したものであらう、而して石室の上八尺位である、今其の各層の厚さを計れば、二寸内外より三寸餘になつて居る。

此の盛土層の横断面を遠望すれば、横縞模様を明瞭に現はし衆目をひくものである、上代に於ける土工術の精巧壯美を極めたものであらう。

葺石 (圖版第一〇、第一一)

次に各段の斜面稜邊に表土の流出防止並に表飾のため葺石を敷き詰めたもので、いま後圓部の断面に於て、中段の北側及び南側の葺石の残りが露出してをる。

尙前方部にも布敷したもので、今前方部西北端に葺石の残存散在してをるを認める。太さは四寸より九寸位の自然の山石である。

埴輪圓筒

埴塚の形成すれば、各段、又は前方部の稜邊に素焼製の埴輪圓筒を樹て並べたものである。

形は圓筒形で、胴に孔が穿たれたものである。謂はゞ玉垣の様なものであらう。之等の圓筒は年久しき間に殆んど破壊せられ流土に埋碎せられ完全なものは少ない。圓筒の破片は多數土砂採取の際、各段の稜邊附近の土壤中から出土した。尙前方部の殘臺には圓筒の在つたと思はるる位置に其の破片が所々堆積してをる。之等を調べれば、圓徑凡一尺二三寸位のものと思ゆる。(圖版第一〇七)

又埴輪には人形、馬等の像形のものもあるが此處では見當らない。(同じ筑前國甘本屯社塚より、リ立派な馬の埴輪出土)

(圖版自第一二、至第三九)

(2) 内構

石槨石室は横穴式で玄室と美室より成り、美門にて境せられてある。

(此の王塚古墳は美道が完全なる一室を形成し、第二室となり、特に壯麗なる壁畫を保有してをる。此の場合第二室とか、後室と云ふより、美室として固有稱にした方が説明に簡便と間違ひないと思ひ、以下「美室」と記號する。)

玄室 (圖版第一二、第一三、第一四、第一五、第二七)

奥行凡東西三尺七寸四、一五米突、横幅凡南北十尺三寸五分三、一三米突、四周壁は下部一枚岩其の上石垣積より成り、内攻めに東壁約八十度、南北壁約七十度、西壁約六十度に積み上げ、高さ十二尺三寸に達し、天井の一枚岩にて掩はる、底部は全面礫石である。

複床棺 (ダブルベット型) (圖版第二五)

玄室正面の地面に全部一枚石に刻成せられた複式寢臺とも云はるる床棺がある、二人分の頭型と胴體型が凹刻陰刻してある。

棺の方向は北より約二十度東に振つて、北北東に近い枕向きである。

其の二つの内の奥床は半頭型彫の圓徑八寸四分位、長方形胴彫の長さ五尺五寸位、幅一尺九寸、前床は半頭型彫の圓徑七寸五分、胴彫長さ五尺一寸位、幅二尺、深さは何れも三寸位、兩床の間に三寸五分の仕切り區劃を付けてある、更に其の前方に三寸四分を下げて一段があり、刀劍が安置してあつた。

棺石の廣さは、間口五尺一寸、奥行五尺七寸三分、奥幅六尺六寸二分で、梯形をなしたるのは注目すべきもので、石の厚み、地上露出三寸より五寸位、床棺の幾分奥の方に傾斜約六度して居るのは地盤の關係のためかも知れぬ。

此の複式床棺は全部磨仕上げしてある。

石屋形

床棺の枕頭に厚一尺二寸、奥行二尺四寸五分、高三尺二寸八分、脚部に厚一尺三寸、奥行二尺一寸、高三尺二寸の板石が兩側に壁枠の様に立てられ、其の上一枚の平石厚四寸、長さ七尺、奥二尺四寸が架せられ、石屋形を形成して、此の上に檜が安置してあつたと、

此の屋根石の兩端支柱石の頭上に粘土が充填してある、向つて右側(南側)粘土層厚三寸五分位、前幅七寸五分位、奥幅四寸位、奥行二尺餘、左側(北側)同厚三寸八分位、前幅六寸、奥幅一尺位、奥行二尺四寸位、以て屋根石の移動を防いである。

枕屏風石

支柱壁枠の前方、床棺の兩側に低い仕切區劃が立つて居る、謂はゞ枕屏風の様なものである、今假りに枕屏風石と記して置く。

枕屏風石の枕頭側(北側)のもの高一尺二寸五分、長二尺七寸、厚さ四寸二分より三寸二分位、脚部側(南側)のもの高一尺一寸五分、長二尺八寸五分、厚さ同様である。

燈明臺 (圖版第二六)

床棺の前即ち枕屏風石の前の左右に、衝立の如き立飾石がある、今假りに之を燈明臺と記しお

く。

北燈明臺の高さ一尺七寸五分、上幅一尺四寸五分、下幅一尺三寸五分、厚さ五寸七分、南燈明臺は南に傾斜してをるので、高さは北側一尺八寸五分、南側一尺七寸三分、厚さ五寸七分となつて、二基とも頂上に徑三寸二分、深さ九分の一見油壺とも見ゆる半球の窪みが刻してある、此の窪みに油を注ぎ、燈心を灯して御燈明にしたのであらうとも想はる、之れ燈明臺の假稱の起因である、左右の距離、脚部五尺二寸五分、

此の左右に立ち並んだ燈明臺は床棺に一段の莊嚴さを加ふるものである。

以上の床棺を圍む奥壁、屋根石の上面、前縁、下面、即ち棺に向ひたる面、枕頭脚部の立壁の面、枕屏風石の各面、燈明臺の上面、前面、内面、左右側面、床石の上面及び階段には全部裝飾畫が書かれてある、實に燦然たる美觀である(壁畫の部に記述)。

周壁

東壁(奥壁) (圖版第一四、第一五、第二七)

玄室床棺の奥壁は下部に幅十尺三寸五分、高さ五尺二寸九分の一枚岩壁を豎て、其の上に石垣積(傾斜約八十度)あり、一尺二寸七分を上りて幅一尺八寸、長約八尺、突出二尺一寸五分の一大巨石の石棚が構架してある、此の強大堅固な石棚は下方の薄き石屋形を保護して居るので、石棚構造の偉觀である。

其の上に更に石垣積三尺九寸四分にて天井岩に達する。

南壁 (圖版第一六、第一七、第二八)

南壁は下部に長さ十三尺七寸、高さ五尺六寸の一枚岩を堅て、其の上に石垣積(傾斜約七十度)を以て天井岩に達する、總高凡十二尺三寸である。

北壁 (圖版第一八、第一九、第二九)

北壁は下部に長さ十三尺七寸、高さ五尺二寸の一枚岩を堅て、其の上を石垣積(傾斜約七十度)を以て天井岩に達してゐる。

西壁(美門側) (圖版第二〇、第二一、第三〇、第三一)

玄室より之を見れば、北側に高さ三尺四寸五分、幅四尺八寸、厚さ一尺九寸の石壁立ち、南側に高さ三尺四寸、幅二尺六寸五分、厚さ二尺三寸の石壁立ち、其の兩壁の間、即ち門の入口の幅二尺四寸、高三尺一寸六分が開いてゐる。兩壁の上に楣石を載せ、其の上に石垣積あり、約八十度の傾斜にて積上げてある。

楣石 (圖版第三二、第二〇)

美門兩壁の上部に楣石(鴨居)厚さ北凡一尺、南凡七寸、長約四尺が載せてあるが、此處に特に注意を引くのは、其の鴨居石の上に窓口とも名づけらるる、幅一尺六寸、縦約七寸の長方形の穴のあることである。

此の窓口(?)の上には巨長なる横石を積載し、其の石の外部は美室の組立天井の受け石を形成してゐる。

闕石 (圖版第三三)

美門口の下部には、闕石が埋設してある、前後二列をなし、中央が溝をなしてゐる。

高さ外四寸、内二寸位、溝幅四寸位、石厚み外三寸、内五寸位。

此の溝に板戸を立てあつたかも知れぬが、それらしい木片遺物もないし、見事な扉石を得たので板戸は設けなかつたかもしれない。

力石 (圖版第三四)

此の四周の石壁に就て殊に工事的に注目するは、石垣の隅角が「イモ」接ぎにならない様に、所々對角に「力石」を組み入れて、内攻めに積み上げゆく、工法に補強を施してある。一例を測れば對角に跨がつた長さ一尺五寸、厚さ八寸位の石である。

天井岩

は下面長徑凡そ八尺、短徑凡そ三尺八寸五分位の一枚岩が載せてある。

平場の底面

玄室内の平場の底面には、徑一寸乃至五寸位の礫石を全面に布きつめてある、川原石である。

石枕 二個 (圖版第二八、第三〇)

玄室の平場に二つの石枕がある、縦一尺一寸五分、横一尺六寸、厚さ六寸五分、之に九寸に八寸の半球面の頭型が凹刻してある。

此の石枕の位置は第一回の入壙者が動かしたので、確實なる位置ではないが、其の入壙者につき聞取つた位置を圖示した次第である。

扉石 壹枚 (圖版第三五)

美門の外側に玄室を閉塞してあつた門扉石は、第一入壙者共の手にて美室内に引き倒されて

ある。

形状は兩端を切つた卵圓形とでも云ふ形で、長徑四尺九寸五分、短徑三尺二寸五分、厚さ四寸、五寸、六寸、七寸と均等を保つた見事な磐石である。

羨室 (圖版第一二、第一三、第三六、第三七、第三八)

奥行(凡東西)六尺三寸、横幅(凡南北)九尺、美門側は前述の巨石にて門壁を造り、其の門壁面及び鴨居石面には燦然たる裝飾畫がある。

他の三方の石垣は稍小形の石材で積み上げ高さ七尺で、天井に達してゐる。

此處に注目するは、羨室の西側の石垣は石垣面が裏石垣を現はしてゐる、且つ北壁、南壁は朱塗りか施してあるのに、此の西面は何の裝飾もない、之は石室に遺骸を納め、祭祀を行つたあと閉塞するとき、此の西側の石垣を外部から築造したことを物語るものである。

羨室の平場の底面は玄室に近い方約半面に礫石が布きつめてあつて、西方半面は地盤のまゝである。

發見當時羨室の西南隅の上方底面より約五尺上方に穴を穿つたのである。

以上の石壁の寸法等は室内から見つたもの即ち視界限りのもので、使用されてをる石の見えざる處は加算してゐない。

目地 (圖版第三九)

此の石櫛構築に付て、石垣の目地に粘土を充填してあることが工事特筆すべきものである。其の粘土の布き方は現今煉瓦工事のモルタル使用の如く、兩石の接續する全面に塗布挿置

したものと、又石垣の間に挾石を加へ其の間に粘土を充填したものとある。

粘土は厚み五分、六分より一寸位、時としては三寸位、の所もある。

或は石の接目の外部を若干塗り塞いだ形の所もある。

殊に玄室の石屋形の屋根石の兩端の粘土層は實に見事に能く加工せられてある。

粘土は黄土色で粘着力最も強靱なるものである。

裏込め

石垣の裏ゴメは見られないが、之も定めて入念の工法を施してあるでせう、之は初め土砂採取工事中、石室發見前になつた頃、徑五六寸より一尺位、の石塊が夥多に出現したことから充分想像せらるるものである。

石材石質

前述各部に使用せられた石材石質に就ては、九州帝國大學工學部地質學教室理學博士木下龜城氏に訊ね、亦福岡師範學校教諭金尾宗平氏に實査を煩はした。

石質調査に當りては、岩面に繪具が施され組織を明視するに困難なると、花崗岩の外は一般に風化を來たし判別に困難であつた。

其の所説を表示すれば、

石材使用箇所	石質	産地
複 ^{ズル} 床 ^{ベット} 棺。 美門楣石上窓口ノ南側。	古第三紀層粗粒砂岩。	古墳所在地及附近ノ桂川村、大分村、稲築村ノ丘陵ニアリ、此ノ地方ニ多シ。
床棺兩側ノ支柱壁。 玄室ノ四周壁ノ大石。 玄室天井岩。美門。楣石。 扉石。美室天井等ノ大石。	閃雲花崗岩。 (此ノ地方俗稱山御影石)	大根智山麓。 彌山嶽一帶ニ多シ。
床棺前兩側ノ枕屏風石。 燈明臺石。 石屋形ノ平屋根石。 玄室内ノ石枕。	安山岩。 (阿蘇熔岩系)。 細工ニ便ナリ。	筑後矢部川上流ノ長野地方。日田盆地。 此ノ地方ヨリ運搬シタルモノナラン。
美室天井下ノ大石。	古生層ニ屬スル變成岩系ノ所謂輝岩。	此ノ地方ノ大將陣山、阿惠山等ニアリ。

石垣ノ小石類。	雲母片岩、(古生層ニ屬、灰色)。 角閃片岩、(同上、青味色)。 珪岩、(同上、褐白色)。 粗粒砂岩、(石英粒多シ)。 閃雲花崗岩、(黒味多シ)。	古墳所在地附近ノ大將陣山、金比羅山、阿惠南方ノ山等ニ多シ。 大根智山地方ニ多シ。
石垣目地其他充填材料。	粘土。 (古第三紀層ノ頁岩 ^{ケツガン} ノ風化土、粘着力強ク、長年月能ク粘着力保持セリ)。	此ノ地方ノ丘陵ニアリ、良質ノモノヲ選擇セリ。
尙 古墳築造地ノ臺地。 封土(盛土) (赭) (黒)	洪積臺地(地山)ナリ。 鐵分ヲ多ク含ム赭土粘土。 腐蝕質黒土粘土。	

第五 筑前王塚古墳裝飾壁畫

筑前王塚古墳の玄室、羨室、巨石壁面は云はずもかな、床棺の各部、石棚、屋形石飾石、石垣に至る、面と云ふ面は、上面、下面、側面、裏面、餘す所なく悉く燦爛たる裝飾畫を以て彩色せられたと云ふも決して過言でない。

(此の石室で壁畫と云ふのは餘り適切に感ぜない様である、石畫又は岩油繪とでも言ひ度いものである。)

彩色は泥繪具(顏料)を使用し、赤、黄、青、白、黒の五色が其の原色と思はるるが、夫等の混合より生じた配色の多様なると、又墳内湿度の關係で、視る度びに濃淡變幻一定せないため、彩色の表示に困難である。

が亦一面此の濕潤は、顏料繪具に常に適度の湿度を含ましめる、従つて若し乾燥すれば繪具の肉盛の高き所はポロ／＼落つるのを、濕つてをれば粘着性を帯び來て其の剝落を自然に防止した結果となり、裝飾石畫即ち岩油繪の永久保存に最も缺ぐべからざる役目をなしたものと想はるる。

(1) 玄室 壁畫

床棺附近

奥 壁

床棺の奥即ち奥壁(東壁)の巨石全面に赤朱に近し黄青藍に近きと綠に近きありの三角形集結

紋様三角の一辺の長さ凡そ三寸五分より四寸位(一〇五より一二種位)が幾何學的に連結描出しである、その一部に靱(ナキ)矢筒形の殘影らしきものがある、此の東壁摸寫畫面の全幅八尺六寸餘、總高さ五尺二寸餘、(圖版第四一)

支柱壁

床棺の頭部と脚部に立てる屋形の支柱石壁の前方の面、内面更に奥壁との間の挟石の面にも同様赤、青、黄、黒、紫、黒の三角形集結紋様が一面に書かれてある、三角形の一辺の長さ凡そ三寸五分位、支柱壁の裏面即ち外面は朱が塗飾してある。

此の支柱石壁摸寫畫面は前面、内面を續けて頭部三尺七寸餘、脚部三尺八寸位、高さ各二尺八寸位。(圖版第四二、第四三)

枕屏風石

此の支柱石壁の前方、棺床の兩側にある低い區劃石之を枕屏風石と假名すの枕頭側のものには赤(朱)、黄、青、黒、味(紫)の三角紋様、脚部側のものには同じ色で、藏(カ)手紋様がある。

此の枕屏風石の上面にも外面にも紋繪があるが不明瞭で摸寫に困難であるので内部だけを摸寫した、その畫面長さ頭部のもの二尺六寸餘、脚部のもの二尺七寸餘、高さ八寸位。(圖版第四四、第四五)

石屋形屋根

屋形の平屋根板石の下面即ち棺に向つた内面、亦其の石の縁にも全部赤(朱)、黄、青、紫、黒の三角紋様が滿飾してある、三角紋様の配圖構成は此の平屋根下面が其の極致である、之は主人が床に寢

ながら天井を仰いで眺めらるるやう殊に意を注いだものであらう。

上面にも紋繪があるが不明瞭のため摸寫せなかつた。

下面の摸寫畫面幅六尺三寸位、奥行二尺四寸餘、三角形の一辺は凡そ三寸五分位。(圖版第四六)

床棺

床棺の表面にも書かれたと思はるるが踏み消されて不明である。

凹床の中及び頭型即ち枕下の所には朱粉があつたのを掃除のとき洗ひ落されてをる。

兩凹床の間の仕切壁の前方に各色の三角紋様のあるを摸寫した、畫面幅三寸位、長さ五尺二寸位。(圖版第四七)

更に床棺の前方の段面及び階段面共に、赤、青、黄の三色で渦形が書かれてある、摸寫畫面第一段、長さ五尺七寸餘、高さ三寸六分位、第二段長さ五尺一寸、高さ二寸五分餘。(圖版第四八)

燈明臺

(輪寶鏡紋形畫あり)

棺前左右の飾石(燈明臺と假名す)に至りては、前面、上面、左右側面、裏面、即ち立方體の五面共に紋畫がある。

南燈明臺には前面中央に靱(ナキ)矢筒の外貌が窺はれ、其の向つて左に輪寶鏡紋形同心圓に十稜の突起あり、且つ二條の垂紐とも見ゆる二脚らしきを有す、適當の名稱なきため、輪寶鏡紋と假名す、以下同じ、が赤、黄、緑の同心内に外部に緑青の十稜鋒を鮮明に現はし、其の稜圓より内圓にヒアシが繋がつてる、稜徑凡そ五寸二分位、高さ脚共七寸位。

(輪寶鏡紋と假稱したことに就て)

此の王塚古墳の石畫の「ソレ」を表示の便に假稱するに當り、或は輪寶形に似たるとも想ひ、或は多稜鏡形を想つたが、古墳から多稜鏡の出土を見ない様で、又は内弧花紋鏡紋様の摸擬かとも想像したが、何れとも首肯に至らず、別に名案も浮ばないので結局、近似形をとり「輪寶」と鏡紋とを折衷して「輪寶鏡紋」と假稱した譯である。

偕て「輪寶」とは印度の轉輪聖王宿福によつて之を感得し、帝王の標識として用ひられる寶器で、八方に銳鋒を出したる車輪型のもの、王遊行の際は必ず之が前進して地を平坦ならしめ諸民を制伏すと云はれてゐる。

實例を見んには、筑前國筑紫郡觀世音寺の國寶馬頭觀世音菩薩の左第一手に捧げられたる車輪型の器が輪寶である。

永年印度に在住した、目賀田龜之助氏より、印度の「佛」に就て聞けば、初め「佛」を人體像示せざる以前は、法輪輪寶形、樹木菩提樹、又は足跡型を畫いて以て信仰を表現して居り、其の後漸く像示するに至りて「ギリシヤ」風の髭のある佛像（ガンダラ）が出現した由とのこと。

就ては「輪寶圖案」は相當古代よりあつたものと思はる、従つて之が世界の各地に「文教」以前に傳播して居つたかも知れないとの想像も浮ばないでもない。

同じく上部、右部に青、黄、青、赤の複式四重巖手紋様が艶麗に畫かれてある。

内側面にも、上面にも三角紋様がある、外方側面及裏面は不明瞭で摸寫困難である、摸寫畫面高さ一尺七寸五分、幅一尺三寸五分、上部幅五寸七分。（圖版第五〇）

北燈明臺には前面、左に靱矢筒が黒味を帯びて現はれ、右に輪寶鏡紋が浮んでゐる、其の上下に巖

手がある、その輪寶鏡紋の上の横の字型の巖手紋様は珍らしい。

上面に同心圓紋様及び三角紋様がある、之も外方側面及び裏面は摸寫に困難である。

摸寫畫面高さ一尺六寸、幅一尺四寸位。（圖版第四九）

此の棺前右左に並立せる一對の燈明臺は、此の王塚古墳に獨特のもので、石棺の構築に一機軸を成し、實に華麗莊嚴を極めたものである。

之れで棺に横はれる主の身邊は悉く燦爛たる裝飾畫にて抱擁せられてゐる。

美しき堂殿に、この麗はしき奥都城に、永劫慰安の夢を結ばれたのである。

奥壁の上部大石柵の前面には更に大形の輪寶鏡紋徑一尺一寸位が淡く影の様に浮び、其の下面にも紋様が微かに認めらるるが、長年月の間に雨水の浸潤のため畫面黒蝕不明となり表示し難いを恨みとする。

壁面

北壁の巨石面には黄色の楯が上下二列に畫かれてあるが、黒蝕して不明瞭である、適度の濕潤の場合其の形態が認知せらるる其の間に白い數條の横線が豪放に引かれたるが浮び出て目につく、摸寫畫面幅五尺餘、高さ三尺六寸餘。（圖版第五一）

巨石の上方石垣面は全面朱を以て塗飾せられた上に所々に丸形花紋様一見牡丹花に似たるものが畫かれてある。

南壁の巨石面には三角紋様を全面に畫いた上に、靱矢筒形を並べて畫いてあるが其の下部は判別し難くなつてゐる、此の面の矢筒は上部に圓弧を現はしたる筆法で筒形を知る資料となる。

奥の端に四瓣花と思はるる一輪が鮮かに浮んでる。(圖版第五二)
上方の石垣面は全面朱にて塗飾せられた上に花紋牡丹か^カが數多、黄色繪具で書かれてある。
此の花紋に最も注目するは、其の花の肉盛り^ニが隆々突起し實に雄渾である。

今底面より高さ七尺、西壁(美門壁)より一尺六寸五分にある一花をとり、其の花肉繪具を調査するに、花徑凡二寸二分位、花瓣の肉盛り高さ三分(九耗)あり、二分三厘(七耗)あり、一分五厘(五耗)ある、如く瓣々起伏し筆勢躍如たり、現今の油繪を凌ぐ筆致である。(圖版第五三、第五四)

尙此の花紋牡丹形^ニは、東壁、北壁、南壁、西壁の小石垣面及び天井裏に至るまで全面朱塗の上に點綴描出せられてある。

西壁 (美門側)

美門(玄室側)北側(玄室より美門を見て右)の巨石面には、赤、青、黄、白其の混合色より成る靱(矢筒形)が全面に二列に書かれ、此の肉盛りも相當高く、其の靱の間隙に各色の三角紋様^ニが挿まれ、壁面全部が實に壯美である、摸寫畫面幅四尺六寸餘、高さ三尺二寸餘。(圖版第五五)

美門の中央楣石(鴨居)には、三角紋様の大形三角の一邊の長さ七寸位、二一(種位)が赤、黄、青、黒紫の三色にて書かれてある、三角形が六角形を形成するので、見様では六角にも現はれ、三角形にも浮び出沒反映して美しい、摸寫畫面幅一尺、長さ三尺五寸餘。(圖版第五六)

同じく南側の巨石面には上方に靱(矢筒)が三基並び下方には右端に複式完全藏手紋様が二つ最も鮮明に色彩を發揮し、左に靱が淡く残つて、之等の間隙を三角紋様が埋めつくして、摸寫畫面幅二尺八寸位、高さ三尺二寸餘。(圖版第五七)

上方の石垣面は朱で彩飾せられ之に丸形花紋がある。

平場にある二つの石枕には紋書は認め難いが、其の枕下には朱粉が入つてをつたを掃除のとき洗ひ出されてをる。

(2) 美室 壁畫

美室美門の壁面に至りては、岩面壁畫の極致を遺し、古墳石畫の王座を占むるものではあるまいか。

壁 馬

美門南壁面(玄室に向つて右)此處には左姿勢の青毛黒の駿馬が鞍を裝し、尾繫をはめ、大勒^カを食み、弛みなく靜定せる赤い靱^カに、和かに銜^カを味ひ、頂^カを屈撓し、後肢を踏み込み、主人に最も從順の狀を表はし、渦巻ける五色の瑞雲に天馬の如く浮び出てる。

あの耳の聰明さ、あの眼の伶俐さ、四肢の整調、何たる周密雄渾の筆勢だらう。

此の繪、此の馬、此の姿勢を詳細に觀察すれば、上代馬術の進歩發達が、此の無名の畫家の圓熟せる筆端に窺知せられ、考古の啓示を今更深く感謝せらるる。やゝともすれば馬術を體驗せず、馬を畫く輩の取つて以て學ぶべきことではあるまいか。

馬側に佇めば、自づと脾肉に湧き來る愛馬の快感は、獨り馬術家のみが恣に物語るものではあるまい、誰しも同じ愛着でせう。

馬體黒色、眼は黄に、眸は緑、馬具朱、身長一尺八寸五分位、五六一耗、高さ一尺二分三三一耗位。

此の黒駒の下方に同じく左姿勢の裝具せる栗毛(赤)駒が書かれてあるが、永く水浸した爲めで

せう、全貌を明示せられないで、背筋より尾端、脚部は認めらるる。

馬の頭の前に二つの輪寶鏡紋が上下に並んで書かれたのは崇高の感がある。

馬の上方には、青、黄、青、黄、青、黄、赤と幾重に巻き込める渦貝紋様が立ち並び、右下方、左下方にも其の渦貝紋様が右手前、左手前、右巻き、左巻きに渦巻いて譬へば、五色の瑞雲の渦巻ける感じがある。其の間隙には三角紋様が挿入してある。摸寫畫面幅三尺一寸、高さ三尺。(圖版第五八、第三六)

尙、此の石面は發見當時「タワシ」にて洗ひたるため原圖を磨損し遺憾である。其の黒駒の背に騎乗者らしき幻影のあるかとも感じ、或は三角紋様の剝落の殘影とも思はれ、判断に昏惑して居る。

(附) 「ウシ馬」

又、此の石畫の馬體を見れば鬣毛なく、或は黒毛の鬣甲に赤毛の鬣か、とも見えるが之も不調和である。且つ尻尾が棒狀に書かれて居るので、或は鹿兒島縣種子ヶ島に僅かに數頭存在する、天然紀念物「ウシ馬」を聯想して、九州帝國大學農學部江崎悌三博士を尋ねた……

偕て「ウシ馬」の特徴は、體軀全部としては馬と少しも變らないが、唯鬣毛がなく、尾が長毛を缺き棒狀をなして居る。普通馬より小形である。

「ウシ馬」の原産地は蒙古系統ならんと唱へらるるが記録はない。

種子ヶ島への來歴は、太閤秀吉の朝鮮役に從軍した島津義弘が明軍より八頭分捕し鹿兒島に持ち歸つたのが、其後蕃殖し、廢藩後減少し、一時滅せんとしたのを亦蕃殖させて今日に及んだもので、之は現今では世界的の珍獸である。

右の「ウシ馬」を考へ、或は上代に支那奥地から日本九州に傳來したことなきにしもあらざるかと想像して見た。

が更に唐の土偶の馬は尻が棒狀になつて居ると聞き、亦慶州出土の土偶馬に、尾袋がはめられ尾が太き棒狀になつて居るので、之に準つた筆意かとも思はれたので、この追究を後日にした。(附記) 森爲三氏「馬の進化と朝鮮馬」には朝鮮驂馬は支那四川驂馬からの系統をひき、九州を経て進入したもので、山地性馬である。が蒙古馬は草原性馬で、別である」と。さてウシ馬は山のものか、原のものかと考へさせられる。

美門北壁面には、上に右姿勢の青毛、黒の駒、其の下に同じく右姿勢の栗毛、赤の駒、更に其の下に右姿勢の青毛、黒の駒が、何れも馬具を裝、杏葉などを省略し、四肢を揃え、不動の姿勢を保つて、仕へし主人を守るかの様に整列して居る。

其の上の二頭の頭部附近は雨水の浸潤に色彩褪耗したのは遺憾である。下の馬の頭部は稍認めらるるが脚部は泥土に混濁されて居る。

之等の馬體の長さ一尺八寸位、高さ九寸位。

上の黒馬の鼻先さと、後方に同心圓紋様があるのは大日輪の様で南壁の輪寶鏡紋と對照し崇高である。鼻先さの外が朱で、青、黄、青と圓を書き、後方のは外が朱で、黄、青、朱、紫、黒となつて居る。

上の黒馬の脚下、赤馬の脚下周囲は各彩色の渦貝紋が自由自在の方向に浮び出て、壁面を滿飾して居る。摸寫畫面幅二尺六寸五分、高さ三尺三寸五分。(圖版第六〇、第三七)

此の兩壁の馬體を熟考すれば、軍馬が軍裝して整列儀仗したる隊形を想像せられ、古墳の主人が在りし日の、如何に乘馬兵法に鍛熟し、且つ兵馬の實權を掌握せしかを想ひやらるる。

古墳出土の馬具は多くは飾馬式の品であつたらうと稱せられてある様に、誰しも、あの重き轡、杏葉類の非實用的の品を見ては其の感をなすものであるが、此の壁畫の馬相を熟視し馬列を窺ふとき、此の壁畫をも同様に單なる裝飾式の空想畫と想像するには餘りに其の周到緻密の表現に驚かざるるものである。

視よ、壁畫には、重き轡も食ませず、杏葉も申さず、判然たる用兵式の輕裝である、よもや此の優劣なる壁畫を構圖する程の畫家が理由も根據もなく轡や杏葉を省略するものとも想はれない。

之れ全く、古墳の主が武將等を従へ、輕裝せる駿馬に跨り兵馬を練りし日を物語る寫生大記念畫でせう。

楣石 (鴨居石)

兩壁石の上に渡された楣石(鴨居)には、一面に藏手紋が極彩色に而も上下に腹合せに畫かれ、其の南端に輪寶鏡紋一つ殊に鮮明に現出して、摸寫畫面幅一尺、長さ三尺六寸餘。

その輪寶鏡紋は稜徑五寸三分、内側徑三寸六分、内圓徑二寸七分、脚張三寸一分、總高六寸五分である。(圖版第五九)

美室の鴨居の上方及び北面と南面の石垣には朱が塗飾してある、而して西面の石垣は裏石垣面となつて何の塗色も認めない。

參考圖

前述の説明を補足するため壁畫の内、殊特のものを參考要圖として示しおく。

輪寶鏡紋形の例 (圖版第六一)

稜徑五寸三分、總高六寸九分位、美室美門南壁にある一例。

靱 (矢筒)の例 (圖版第六二)

總高一尺三寸五分、頭幅八寸五分、底幅六寸三分位、玄室美門北壁にあるもの。

楯の例 (圖版第六三)

高一尺三寸七分、中幅六寸一分、底幅八寸六分位、玄室北壁にあるもの。

以上略述せる裝飾石畫を靜觀すれば、是等天然石の畫面に、千幾年變色せざる貴重なる繪具顏料を惜氣もなく大膽に當代美術の濫與、特に馬術の妙諦を遺憾なく雄渾に描出したる非凡の畫才に感嘆久ふすると共に、當時に於ける、如何に美術眼の優越に、如何に思想感の高尙に、如何に愛馬心の旺盛なるかを窺はれ、凝視すればする程、在りし古の偲ばれて、座る敬慕の情を深くし、唯々神秘の感にうたるるのみである。

繪畫に就て

此の壁畫の畫法に關しては、畫家の間に研究問題となつて居るが、綜合するに、

岩面に陶土様のものにて下塗りを施し、其の上に礦物性顏料(繪具)にて各種紋様を描く、此の紋様は肉持ちありて、強き筆跡(ブラッシュ様)のある所よりすれば、顏料に陶土或は油を混じたるものに非ずやとも思料せらる。

とのことである。

(註) 此の裝飾石畫の摸寫は東京美術學校卒業生構造社同人伊勢幸平氏が主任となり、同卒業生藤野不二男氏を助手

とし、昭和九年一月より二月に亘り穴居し、晝夜熱心從事完成したる實物大の色彩畫である。

第六 筑前王塚古墳主體

周到堅密なる石槨構築完成し、絢爛たる壁畫滿飾せられたる此の奥都城ウツツキ、あの複床棺フタツツキに主夫妻遺骸は靜かに安置せられたのでせう……

(註) 四床中より裝身具出づ、次章に記す。

そして永遠幾年月。

偶然と云へ、いま此處に其の靈柩を拜し、一片の遺骨も、一掬の灰粉も残さず、有無を超越して淨化し去り、唯在りし日の文化を追想する尊き史蹟と遺物の數々に接し、謹みて、其の郷黨先人の靈に敬虔の意を捧ぐるものであります。

(註) 乾燥したる石室にては、遺骨が灰化のまま遺り、かすかに形狀を認示せられるが、一度婆娑の風に吹かれるば消え亡せる例があれど、此處は水溜りのため、それすら認められなかつた。

又、平場にある二個の石枕は、家族か又は殉死者の遺骸を葬つたものかとも思はるれど、周邊の狀況及び遺物より考へてそれらしきものとも首肯し難く、或は單なる「陪枕」又は「殉枕」と假稱する程度の据物ではなかつたでせうかとも想はるる。何れにせよ、考古の謎である。

第七 筑前王塚古墳副葬品

(1) 玄室 副葬品

鏡、玉、劍と云へば、日本國民の腦裡には精神的に、傳統的に、強く響く、自然感のあるものがある。そして發見せらるゝ相當整へる古墳には、殆んど之を藏して居るに視ても、如何に古代から、此の觀念が國民一般に普遍して居つたか、窺はれる。

その最も尊き寶物當時之を手に入るさへ容易でなかつた品物を、何の惜氣もなく葬送と同時に、永久に地中に埋めやる、祖先に對する尊敬の念、生ける人に對すると同じ崇敬、想ふさへ、其の至純に眼險の熱きを覺ゆるものである。

其他、武器、武具も多く發見せらるるものである。

此の筑前王塚古墳でも秘められた夫等の品々が再び世に出た、就中、馬具の立派なもの、珍らしきものが出たのは、美門の壁馬と共に、其の時代の熱烈なる愛馬心、旺盛なる尙武魂が、想ひやられて奥床しさを感ずるものである。

副葬品は古墳石室發見の夜、土地住民により無關心に持ち出されたので、其の排列位置を確知するを得ず、關係者に聞取り、其の所在の略圖を作つたのである。(圖版第六四)

副葬品の所在を記して居るのは、皆聞取りに依るものである。尙數量も調査當時のものである。

鏡

青銅鏡 (仿製) 壹面

(圖版第六五、第六六、第六七、第六八)

古墳から出る鏡は凸面鏡である、之も亦凸面で反りが一分ある完全なるもの。表面は全面綠色を呈し幽美である。鏡鍔が錆び付いてをるのは面白い。(『福鉄鏡沈澱作用』ヨル四二頁参照)

裏面、四神四獸浮出し、周縁鋸齒紋彫刻鮮明である。床棺の前方、南燈明臺の前にあつた。と、直徑七寸六厘(二一四耗)重量二百五十二匁(九四五瓦)一部に包布の残片が膠着してをる。

(註) 仿製鏡とは支那鏡(形式、圖案紋様を日本にて模造したるものである。仿製を三種に分くる。

(1) 支那鏡の踏返し(原形其の儘を鑄造する)、(2) 支那の趣味を多分にもち日本趣味が加はる、(3) 日本趣味が多分に加はる。而して此の王塚のものは(2)に入るものであらう。

包布

此の鏡を包んだ布の残片で殆んど腐蝕してズタ／＼になつてをつたのを福岡工業試験場にて調査の結果、

證

一、古代裂布(嘉穂郡桂川村王塚古墳發掘品)

右ハ當場ニ於テ顯微鏡試験ノ結果麻ナルコトヲ認ム

福岡縣福岡工業試験場

右により麻布で包んであつたことが知られた。(圖版第六八)

尙九州帝國大學農學部植物學教室小島均氏撮影顯微鏡寫眞を添えおく。(圖版第六九)

管玉

玉 二個 青瑪瑙製中央に貫孔あり。



棗玉 三個 琥珀製中央に貫孔あり。

賽目型丸玉 九個 粘土製瓦質にして中央に貫孔あり、周縁に賽ノ目の如き小孔あり、孔數十四、十六、十八、二十一等。

切子玉 六個 埋木製中央に貫孔あり。

此の切子玉の破片を九州帝國大學農學部植物學教室にて比重測定玉井農學士、灰分含有量測定藤田農學士、顯微鏡試験花田助手により調査の結果、

比重 一、三〇二 灰分 四、五七八%

顯微鏡にて細胞膜が明瞭に見え植物組織の本來の形が充分現はれてをる等より、埋木であることを證せられた。

尙同大學工學部地質學教室木下教授にて其の顯微鏡用標本を作製して頂いた。玉の寸法、及び徑、重量、次の表の如し。

重 サ(瓦)	管玉			切子玉(埋木)					琥珀			
	一號	二號	三號	一號	二號	三號	四號	五號	六號	一號	二號	三號
長 (耗)	一、九	一、九	一、九	一、九	一、九	一、九	一、九	一、九	一、九	一、九	一、九	一、九
徑 (耗)	七	六	六	七	六	六	七	六	六	七	六	六

重 サ(瓦)	丸粘土玉(賽目型)								
	一號	二號	三號	四號	五號	六號	七號	八號	九號
縱 徑	一、三	一、三	一、三	一、三	一、三	一、三	一、三	一、三	一、三
橫 徑	一、三	一、三	一、三	一、三	一、三	一、三	一、三	一、三	一、三

小玉 多數あつたと聞くが散逸して居る、綠色及青色石製徑一分六厘(五耗貫孔あり。

銀環 一個 線徑一分三耗環徑六分六厘(二二耗)重量〇、八五(三、二瓦)。

金環 一個 線徑八厘五環徑四分八厘(一六耗)重量〇、七二(二、七瓦)。

之等の玉類は床棺の奥の寢床の首の附近にあつたと。(圖版第七〇)

こゝに曲玉の出土を見ないのは、聊か淋しさを感ずる。

鈴 一個 小鈴純銀製。

長徑八分六厘短徑八分重量四匁鈴音良し。(圖版第七一)

刀 劍

直長刀三振と刀子三口長刀は床棺前方の下段に安置してあつた。

直 刀 (い)號

鐵製、殆んど完全である。唯柄の末端が幾分破失してをる。柄長三寸五分、刀身長二尺四寸二分五厘、幅一寸四分五厘、厚三分六厘、重量二百七十六匁。

直 刀 (ろ)號

鐵製、之も殆んど完全である。刀尖の一部折れて居るが其の破片あるので復元せらるる。柄長三寸四分、尙末端ありしならん。刀身長三尺九分、幅一寸二分、厚三分九厘、重量四百二十匁、所謂十東の長刀健在なりし日の鋭鋒が偲ばるる。

直 刀 (は)號

鐵製、刀尖折失せり、柄長七寸(此の柄は完全の長さでせう、前記の(い)(ろ)も此の長さあつたと思はるる)刀身長(殘部だけ)二尺五寸七分、重量三百四十二匁。

之等の直刀に鞘の木質部の殘滓が附着してをる。

又、鯉口附近に、刀裝具鹿角の殘片が附着し、更に直孤紋の跡が讀まるる。(圖版第七二、第七三、第七八)

(註) 直孤紋とは鹿角製刀裝具に直線と孤線を組合せたる文様が彫刻してあるもので、之を「直孤紋」と呼んでをる。此の直孤紋は上代人の好んで用ひたものである。

刀 子 (に)號

薄き鐵板の鞘と其の内部の木質部が殆んど完全に殘つてをるのは珍らしい、更に珍らしいのは、鞘の外部に鹿毛の附着してをること、之は鹿皮の袋鞘に入れて、腰刀としてをつたものらしう。

柄は破折してをるが、鹿角の殘片が附着してをる刀身は腐蝕してをつたのを取出しの際、散失してをる。

鞘の長さ六寸七分、幅八分位、厚み六分餘、柄の長さ二寸二分五厘、重量、鞘十六匁、柄五匁一分。

(圖版第七四、第七七)

刀 子 (ほ)號

鐵製、長さ柄共(柄は末端缺失か)六寸五分、刀身幅八分四厘、厚み三分七厘、重量二十三匁三分。

刀 子 (へ)號

鐵製、長さ柄共(柄末端缺失か)四寸一分五厘、刀身幅五分五厘、厚み二分、重量五匁六分七分。柄に鹿角の残り附着せり。(圖版第七六)

毛 痕 (Impression) に就て

此の鞘の外部に膠着してをる獸皮毛を、九州帝國大學農學部動物學教室江崎悌三博士に就て、顯微鏡検査を遂げ、同教室藤野政雄氏に顯微鏡寫眞を撮つて頂いた。

獸毛は既に炭化し膠着して居るのが點々あるが、手荒き取扱ひのため多くは離脱して其の痕跡が明瞭に認められる。

寫眞に見ゆる筋溝がそれである。(圖版第七五)

上代の刀劍に就て

古墳時代の刀劍に就き、九州帝國大學本部前田稔靖氏に訊く。

日本の刀劍の始めと言へば……日本では石器時代から其の次は武器としては鐵器になつて居るでせう、銅鋒などあるが實用武器とも見えなない。

道程は初めは刀子(短刀)から劍となり、之も諸刃のもので、神社などに能く見る神劍の型である、それが製作が實用的に進歩して諸刃を縦に二等分した形ち、即ち片刃の直刀となつたものである。

文献では推古紀に「馬ならば日向の駒、太刀ならば吳の眞さび」とある様に、彼地からも相當輸入せられたものであらう、其の頃朝鮮から刀匠が輸入せられ、日本でも其の製法を眞似て居る、其の朝鮮の刀匠を「韓鍛冶」と云ふに對し、日本在來の刀匠を「大和鍛冶」と云つて居るに考ふれば、日本は古來、日本刀の鍛鍊法があつたものと想はるる。

古事記の日本武尊の歌に「八雲立つ出雲島が佩ける太刀葛多纏き眞刀なしに哀れ」とあるに

見ても想像せらるる譯である。

上代は鞘など立派なものなく、葛などを纏きつけたもので、鏢もないのが多く合口になつて居つたものである。

文武天皇の大寶元年に刀劍に刀匠の銘を刻む詔が定められて、刀の工法も直刀が彎刀になる、即ち反りがついた形となつて居るが、あの武將阪上田村麿の佩刀は直刀の片刃で、刀身に銀の象眼さへある見事なものである(九段遊就館藏)

爾來日本人特獨の技術に彼の長所を取り入れて、鍛刀術は進歩に進歩し、後には支那に逆輸入して居るので、彼の宋の詩人歐陽脩の日本刀の詩に

寶刀近出日本國、越賈得之滄海東

の句がある様になつたのである。

福岡縣宗像郡官幣大社宗像神社境畔、日本刀鍛鍊宗像道場に斯道に潔齋精進せる櫻井正幸氏に日本刀鍛鍊を訊く。

上古日本民族の日本刀鍛鍊を考ふるには、先づ其の原料たる鐵に付て考ふる必要があるでせう、其の鐵を考ふるには更に鐵が如何に使用せられたかを考へて見ませう。

何れの國、何れの時代に於ても、其の時代工藝の精巧は必ず先づ其の武器に表現して居るものと思はるる。

つらく、我が國建國の始めを追想すれば、日本民族が此の大和島根の島國を根據として海の四方に雄飛せし状態が、鬚髯として浮ぶのである。

然も其の舟たるや、丸木舟の如き原始的の域を脱して既に造船時代、小型兵船とも云ふべきものを創造したのであつて、即ち上古日本民族の船は交通機關たると同時に兵器であつたと謂はるるでせう。

夫等日本民族が佩用せし武器は勿論、兵船の船具、装釘に至るまで皆鐵材を使用したるは想像に餘りあるものである。海國たる我が國に於ては鐵材の使用は或は武器よりも寧ろ船具の方が多かつたかも知れぬ。

然らば、次ぎに斯くの如き鐵材が我が國土に於て産出の状態を考ふるに、先づ出雲に於て最も優良質の鐵原料砂鐵が産出して居る、而も其の産量は充分豊裕なるものである。此の出雲の砂鐵は熔け易き特性を有ち、之を製鐵するには、日本古來の「野踏」と云へる方法で、耐火粘土製の爐長凡三尺、幅凡一尺五寸、高凡三尺位に、鞆をつけ、雜木の木炭を使用し、至つて簡易なる設備にて、其の工程には長時間を費やし、且つ少量づゝとは雖も砂鐵から良質の鐵材が得られたものである。

此の鐵材を以て鍛鍊したる日本刀は、其の質は炭素の量比較的少く、硬度低きも、ヤキは入るのである。古墳刀に双紋のかすかに窺はるるのがある。

大古はいざ知らず、上古古墳時代の日本刀は此の大和島根の國土産鐵を以て、吾々の祖先が一心不亂百鍊鍛工したる貴き結晶である。

あの古墳出土の三尺無反りの長刀、之を手にして凝視するとき、遠き昔、在りし日の祖先の大努力と刀工術の精進に敬畏と感謝を捧ぐるものである。

斯くの如く、容易に良質鐵材の採收により、島國日本の刀劍鍛鍊は一般文化の渡來に先んじて獨專的に進歩し優秀なる武器を製作してをつたものである。

其後、朝鮮支那より刀匠の渡來となり、我が國在來の刀法に進歩の助けをなしたものは云へ、全くを同化し、益々技能熟達し、我が國土産の良鐵と之を百鍊する民族精神は凝つて、日本魂の日本刀と成り、世界に其の比を視ざるものとなつて居る。

更に銅銼とか、青銅鏡とか銅製品の出土すのがあるが、支那朝鮮に於ては銅器と鐵器とは混用せられてあつたであらうが、我が國に於ては、銅と鐵とは何れが先きに活用せられたかと云へば、先づ上古に於ける、銅鐵の需要事情と其の兩鑛の製造法の難易を考へねばならぬ。

倭て、其の鐵と銅との工業的精練法から考へて原料の單純に目につく砂鐵且つ其の精練法の銅に比し遙かに簡易なる點よりして、特に我が國に於ては遠き古へ、先づ鐵の活用に取り、海國日本民族特技の船釘又は小双物などの簡易工作より始まり、武器、刀劍と進みゆきて、更に銅の製法を修得し、銅の利用せらるるに至つたものと考へらるるのである。

槍と石突 各壹個

中世には槍一筋と云つた程で、上代でも槍は大切にしたものでせう。此の槍は屋形の平石の上にあつた、即ち棺の上を保護する魔拂ひとして置いたものでせう。

袋槍で穂の長さ一尺一寸二分三四〇耗、袋部八角、穂先の断面は菱形を成し、其の尖銳、物凄いに計りである。重量百十六匁八四三八瓦、石突長さ四寸一分、徑一寸、重量二十七匁一〇一瓦。(圖版第七九)

鏃

(圖版第八二)

全部鐵鏃である、矢の根は尖根式で、刀身形のもの二十二個、劍身形のもの七十二箇合計九十四箇を數へた。尙鏃(鏃身鏃)及矢鏃と根の接續根多卷部其他の破片等三百三十個を數へた。

矢の纖維の殘存してをるのは、調査により竹であることを確にした(九州帝國大學農學部植物學教室調査)。(圖版第八三)

此處に面白き現象は、矢鏃又は鏃竹の表面周圍に、金屬性鏃物(?)が膠着し、一見恰かも矢鏃を薄き鐵板にて卷きたる如き状態に化けて居る。

此の現象は此の矢鏃だけでなく、古墳内の他の品物武器類にも、一見シジミ貝の化石かと疑はるる形態のもの(圖版第八二)の鐵鏃及鏃の面に鏃物の如き怪物の凸坊が附着してをるもそれである。又は多種雜様の形狀の金屬性鏃物(?)が膠着し、考査の疑點となるものである。

この矢の遺物の一部にも櫻の樹皮の葛纏せられたかと思ゆるものがあつて迷はさる。之等の金屬性鏃物は褐鐵鏃の分解沈澱堆積被覆膠着したもので其の作用の妙は千差萬別の變形に化けるものである。(圖版第八三)

褐鐵鏃に就て

この出土したる褐鐵鏃沈澱物を、九州帝國大學工學部地質學教室木下龜城博士に就き、調査並に顯微鏡標本を製作して頂き、且つ褐鐵鏃の性状を訊く。

之等の沈澱堆積物は褐鐵鏃(Limonite)と稱し、 $2\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot 3\text{H}_2\text{O}$ なる組成を有する水酸化鐵であ

るが一部針鐵鏃(Goethite) $\text{Fe}_2\text{O}_3 \cdot \text{H}_2\text{O}$ を混ゆるやとも思はるる然し廣き意味にては褐鐵鏃と呼びて何等差支えあるまじ。

天然にも褐鐵鏃の棒狀體は屢々産出し俗に高師小僧と稱し學界にても其名稱を採用してをる。これ高師ヶ原より多くこの種の褐鐵鏃を産する故にて明和年間木内重曉によつて著されし雲根志前編第二卷には「土股鏃」なる名のもとに次の如く記載してある。

土股鏃は十中に産す。其形山芋或は蕨の如く、亦直にして長きものあり、中空なるあり、實滿なるあり、其色黄赤く竹の筒の如く大根午房の形なるもあり、予數ヶ所より取集め見るに少し異なりといへども同色同物也。産所多し山城國稻荷山、攝州箕尾山、江州栗太郡野路山日川村の東、龜山、同國甲賀郡越前村提田山、同國石部郡の近山、播州須磨明石の間垂水村、紀州高野山の麓、武藏國飛鳥山王子、伊勢國一志郡小森村等の産同品也、尾張國日間鹿嶋の鈴川氏子に恵む所の土股鏃石中をつらぬき生けり、又一種枝ありて葉の如き實を生じたるを恵めり奇品なり予石鏃と名づく是皆日間鹿嶋の産也、亦山城國三鈴寺山の麓に柳谷村の土民時々山中に掘出す俗に傳ふ弘法大師封じ給ふ石大根なりと三鈴寺の什寶とす則ち土股鏃也、又伊勢國安濃郡納取川に俗に狐の小枕といふ物あり、形葉のごとく或は枝あり管あり上品の土股鏃なり、志州シメの浦に産する物花のごとく實のごとくなる物あり。

右の如く天然物にても棒狀體の外板狀體、團塊、不規則塊等あり、棒狀線は常に垂直に立ち、ヨシ(Phragmites communis Trin.)を又不規則塊は菱の實(Trapa sp.)オケラ(Attractylis ovata Thunb.)サルトリイバラ(Smalax china L.)の地下莖等を水酸化鐵にて置換沈澱せるものと稱されておる。

偕て古墳中の褐鐵鏃の棒狀體も恐らく天然産の高師小僧と略同一成因によつて出來たるものならんと考へらるる。

(-)古墳附近に存在した動植物體有機物の分解により可成多量の炭酸が生成され

(二) 上述の炭酸が地下水に溶けそれが古墳中にあつた鐵製器具例へば刀劍の如きに作用して溶解性の重炭酸鐵となり地中に浸潤したる後更らに

(三) この重炭酸鐵溶液が植物體の分解生成物たるアムモニウム・ヒュウメイトの作用により植物體の周圍に沈澱堆積せり

と解釋され、この有機體の分解と共に浸潤せる重炭酸を含む地下水よりアムモニウム・ヒュウメイトの作用に依り、褐鐵鏽を品出交代する作用は植物體の外圍より逐次内部に及び、地下水中の鐵分が時に濃度を異にする時は(即ち重炭酸鐵の多寡により)褐鐵鏽は同心圓的の構造を示す様になる。該し鐵分多き時は交代作用を行ふも、少き時は休止し數次に亘つて交代作用の行はるる結果によるものである。尙この交代作用が充分に行はるれば、植物質は全部褐鐵鏽にて置換さるゝも作用不充分の時は、褐鐵鏽が薄く植物質の表面を被覆するに過ぎざるものである。

鐵 (斷片七九八個)

挂甲鐵片を綴し合せ製作したるもので、屈伸自由即ち動作が自在なるものである。が何分其の鐵片が片々に分解破損して原形に復すること困難である。

斷片總數七百九拾八個となつてゐる。所々に布の殘片が腐着してゐる。(圖版第九二)

(註) 古墳出土の甲冑に就て、鐵には「短甲」と「挂甲」の二種がある。短甲は巾廣い鐵板を削いて造り、謂はゞ胸板背板が一枚に成つてをり、挂甲は小札鐵板を綴ち合せたものである。背は金屬製鉢型が多いが、此所では見當らない。夫れとも皮革製のもので全部腐蝕したかも知れない。(短甲及冑は筑前國朝倉郡、筑後國浮羽郡より略んど完全なもの出土)

薙刀型鐵器(?) 壹個

鐵製、幅一寸五分、厚み二分位、長さ八寸二分、夫れ以上不明、之に長さ二寸二分に二分×五分角の柄をつけたる薙刀型の鐵器、重量五十匁。(圖版第八〇)

曲釘型金物(?) 貳個

二分五厘丸鐵を一寸五分に五寸位に曲げたるもの、重量二十六匁と二十二匁四分。(圖版第八一)

馬具 (い) 號

緒附曲玉型か鴛鴦型か又は乙字型かとも見ゆる鏡板の周邊に八個の菱形の飾付き云はゞ、緒付曲玉形か全面金銅製周邊鍔絞めの燦爛たる鏡板(大半剝落)之に銜身、銜柄、完備せるものである。

銜鑲の中に手綱の布が腐着してゐる。

鏡板の長徑六寸一分、短徑二寸位、銜身有効四寸九分位、重量四百〇七匁。(圖版第八五、第八八)

善 (ろ) 號

ハート型鏡板の面に唐草紋様圖案裝飾、金銅製(痕跡)周邊鍔絞め、銜身、銜柄付きのものである。鏡板の長徑三寸五分、短徑二寸六分位、銜身有効四寸七分位、重量百八十八匁。(圖版第八六、第八九)

善 (は) 號

ハート型鏡板付金銅製(痕跡)周縁鋳鉸め、銜柄破損せり、此の轡は殆んど水中にあつたもので、鏡板の裏面銜身附近に沈澱泥土密着して寸法測り難い。

鏡板の長径三寸五分位、短径二寸六分位、銜身の半分鏡板より穴心まで二寸三分、銜柄三分丸鐵、環二分五厘丸鐵、重量百九十七匁、沈澱物附共、(圖版第八七)

鞍橋金具

鞍橋

鞍金具の一部で、美女付き金銅製、周縁鋳鉸めである。(圖版第八四)

壺

鐵板製鋳鉸め、内部木造、其の口金具と背筋の一部と木質の残片がある、美女付き二分丸鐵製、鎖で吊したものの壺蓋として珍らしいものである、口徑縦四寸、横五寸位、深六寸見込、遺物重量二百一十一匁五分。(圖版第九〇)

輪

鐵製輪蓋、踏板は二條に分岐し滑止め付きである。

杏葉

劍菱形圭頭狀? 杏葉 五個

ハート型杏葉

四個

雲珠

銅徑三寸、高七分七厘、金銅製。(圖版第九三)

辻金物

何れも金銅製、其の四又の接續部裏内面に革紐鉸めした残滓が認めらる。(圖版第九四)

雲珠杏葉組

壹個

辻金物劍菱形杏葉組

壹個

雲珠

銅徑三寸、高七分七厘、金銅製。(圖版第九三)

辻金物

何れも金銅製、其の四又の接續部裏内面に革紐鉸めした残滓が認めらる。(圖版第九四)

雲珠杏葉組

壹個

辻金物劍菱形杏葉組

壹個

雲珠

銅徑三寸、高七分七厘、金銅製。(圖版第九三)

辻金物

何れも金銅製、其の四又の接續部裏内面に革紐鉸めした残滓が認めらる。(圖版第九四)

雲珠杏葉組

壹個

辻金物劍菱形杏葉組

壹個

雲珠

銅徑三寸、高七分七厘、金銅製。(圖版第九三)

辻金物

何れも金銅製、其の四又の接續部裏内面に革紐鉸めした残滓が認めらる。(圖版第九四)

雲珠杏葉組

壹個

辻金物劍菱形杏葉組

壹個

雲珠

銅徑三寸、高七分七厘、金銅製。(圖版第九三)

辻金物

何れも金銅製、其の四又の接續部裏内面に革紐鉸めした残滓が認めらる。(圖版第九四)

雲珠杏葉組

壹個

辻金物劍菱形杏葉組

壹個

雲珠

銅徑三寸、高七分七厘、金銅製。(圖版第九三)

辻金物

何れも金銅製、其の四又の接續部裏内面に革紐鉸めした残滓が認めらる。(圖版第九四)

雲珠杏葉組

壹個

辻金物劍菱形杏葉組

壹個

雲珠

銅徑三寸、高七分七厘、金銅製。(圖版第九三)

辻金物

何れも金銅製、其の四又の接續部裏内面に革紐鉸めした残滓が認めらる。(圖版第九四)

雲珠杏葉組

壹個

辻金物劍菱形杏葉組

壹個

雲珠

銅徑三寸、高七分七厘、金銅製。(圖版第九三)

辻金物

何れも金銅製、其の四又の接續部裏内面に革紐鉸めした残滓が認めらる。(圖版第九四)

雲珠杏葉組

壹個

辻金物劍菱形杏葉組

壹個

雲珠

銅徑三寸、高七分七厘、金銅製。(圖版第九三)

辻金物

何れも金銅製、其の四又の接續部裏内面に革紐鉸めした残滓が認めらる。(圖版第九四)

雲珠杏葉組

壹個

辻金物劍菱形杏葉組

壹個

雲珠

銅徑三寸、高七分七厘、金銅製。(圖版第九三)

辻金物

何れも金銅製、其の四又の接續部裏内面に革紐鉸めした残滓が認めらる。(圖版第九四)

雲珠杏葉組

壹個

以上が玄室にあつた副葬品である。

金銅製に就て

鐔、杏葉、雲珠、辻金具、鞍金具等皆黄金鍍金の燦然たる美術工藝品である。上代に於ては金の焼付法が熟達したもので、此の方法は水銀のアマルガム黄金を水銀に解くを造り、之を鍍面銅面又は真鍮面に塗布し、熱を加へて水銀を蒸發せしむれば、金が其の面に鍍金せらるるので、之を繰り返すことによつて其の金の幕が厚さを増す譯である。更に進んで黄金の薄板を同法により目的の金屬物に密着せしめる鍍金術がある。之等の工法が實に精巧に施されたものであると。

② 齋器

美室土器

美室の出土品は土器ばかりである。之は副葬品と云ふより、齋器としておきませう。初め石室発見のとき、中を覗いた樺島氏の談では、前方に四ヶ位、水から出たのが並んで居つたと記憶するが、底部にも高低あつて、土器も水に沈んだものもあれば、露出したのもあつたらしい。尚水が溜つて居つたので、餘り注意もせなかつた。翌日、既に副葬品取出した跡に這入つた時も、尚水の深い所は五寸位あつた。

美室にあつた土器は左の如し。

坏クハ 拾參個 (圖版第九九)

素焼硬質赤褐色煉瓦色のもの 八個

同 硬質、灰色のもの 五個

徑四寸七分より五寸位迄

(註) 皿坏埴形土器を區別するに其の深さと内徑を計り、深さを内徑にて除したる比が

〇、一 近似ノトキ

〇、三 内外ノトキ

〇、五 近クカ以上ノトキ

皿(サラ) 又ハ盤(サラ)

坏(ツキ)

埴(マリ)

と稱せられてある。

埴ツキ 壹個 (圖版第一〇〇)

素焼硬質赤褐色煉瓦色の高さ四寸六分、口徑三寸三分、胴徑四寸四分、首徑二寸六分、底徑二寸、厚み一分五厘。

葉脈壓痕付土器

杯ハ (イ) (圖版第一〇一)

杯ハ (ロ) (圖版第一〇四)

杯ハ (ハ) (圖版第一〇五) 破損

此處に最も注目することは、美室にあつた土器には皆蓋の無かつたこと、蓋の形のものも之を仰向けにしてあつたことは、其の中の沈澱層にて判断せらるると、其の坏の内、三個には明らかに皿内の沈澱泥土が離脱した跡に、木葉の莖脈壓痕 (Impression) の存在が遺つて居ることである。そして其の三つの杯は皆赤褐色煉瓦色焼であつた。尚此の外に内部の泥土を洗ひ落したのがある。或は、夫れにも葉脈壓痕が?と尋ねれば、あつたか?も知れないとの話。

又、埴の中には、沈澱泥土が堆積して、厚さ五分位の堅き一種の水成岩の様に凝結してをるこ

とである。(圖版第一〇〇)

之等の坏や埴は、永年水中に静座して居つて、雨水の浸下に伴ふ、微粉泥土が此の中に沈積して、斯る層をなし、其の初め坏の底に敷かれてあつた木ノ葉を其の儘壓搾して遂に葉脈痕を遺したものである。

葉脈痕 (Impression) に就て (圖版第一〇一)

此の土器に遺つた葉脈痕に就て、九州帝國大學農學部教授理學博士額理一郎氏の談を聞けば、

是は明瞭に「葉脈痕」であるが、お話の今より千年乃至二千年前所謂上代の植物も、二千年後の現今の植物も、植物學の年代としては、人間生活様式の如く變化あるものでなく、千年二千年位の間は、今日も上代も同じ植物である、ので今日の植物の中で此の壓痕葉脈に近似のものを索ひれば、先づ「ホホノキ」であらう。

昔から「ホホ」の葉餅を能く作つたものです。

就ては此の葉脈痕を圖解しておきませう。(圖版第一〇二)

尙比較のため、現在の「ホホノキ」の葉の葉脈裏から見たものの分布圖を示しておきませう。

(圖版第一〇三)

何故木ノ葉が腐朽せないか？

と問へば

物(有機物)が腐朽せないのは、細菌(バクテリア)が湧かないため、之が爲めには酸性であるこ

とが必要である。

閉塞せられた域内では、空氣の流通悪く、酸素の供給不充分で、有機物の不充分なる分解の結果として酸が出来て酸性となる、其の酸が細菌の繁殖を防げる。

而して水のあることは、有機物の分解を不充分ならしむる水中の植物が朽ちないのは、之が爲である。

温度の低いことも分解を防げる一因であらう。

こんな理由を聞いて、前述の玄室の副葬品の事を想ふた。

あの鏡を包んだ麻布、刀劍の鞘の木質部、矢の筥竹の殘存したのも、之れが爲めませう。

次に考ふることは、

古墳埋葬の祭祀に關しての考察である。

玄室には一ヶの土器、齋器さへなく、美門外の美室(此の場合に、齋器を並べ、之に献饌して祭祀したる際に、土器に盛りたる品には全部蓋をせず、且つ其の内の幾皿には土器の内面に先づ木ノ葉を布き、其の上に食物、供物の類を盛つたものと思はるる(品物の質により土器に粘着するが如きを防ぎたるか、其の實証が此の葉脈痕となつて現はれた譯である。是れ「木ノ葉」を清淨なるものとして使用する古風を如實に物語る遺物に接したことを喜ぶのである。

此の古風は其の後文化の進みたる萬葉時代にも遺つたものと窺はれ、

家所有者筒爾盛飯乎草枕

旅爾之所有者椎之葉爾盛

とある歌の心も偲びやられて、在りし昔が目の前に浮び来る。

封土内の土器 (圖版第一〇六)

石室外の土器は土砂採取中の土層より時々出土したるものの中で、稍形状の備つたものを工事監督者が拾ひ置いたものである。

高 坏 二個 (何れも破損)

灰色素焼硬質塔形臺に長方形窓穴及び三角窓穴あり、内一ヶの破損少き方の寸法、高さ一尺一寸四分、脚底徑八寸一分、首部徑三寸二分五厘、厚み四分。

高 坏 壹個 (破損)

灰色素焼硬質臺に縦目の長窓穴あり、高さ四寸三分、口徑三寸四分、脚底徑二寸七分。

環耳一ヶ付提瓶 壹個

灰色素焼硬質、胴徑三寸五分、厚二寸八分五厘。

坏 貳個

灰色素焼硬質、徑四寸八分五厘、高一寸五分。

拾得者の談に

之等の土器は前方部の中央附近の土中より點在(一ヶ所)になく出土したものと。

之に就て考ふるに、埋葬後若干封土盛土を施したる後、更に外部にて祭祀を行ひたるものと想はれ、其の際の器物であらうと想像する。

埴輪圓筒破片 多數 (圖版第一〇七)

之も土砂採取中、塚の中段の稜邊附近より多く出土したものである。

厚六分、内徑一尺二寸五分(復元)、高さ不明、赤褐色煉瓦色素焼粗質。

向前方部西北隅の殘臺の藪の中には埴輪圓筒の破片が所々散在してをる。

其他土器破片類あつたが、大部分は破棄したものである。

其他

次ぎの品は副葬品には屬せないが、古墳の土壤中より出でたので附記する。

石劍破片 壹個 (圖版第一〇八)

石劍尖端の破片、土壤中より出でたもの。

長さ三寸五分、幅九分五厘、厚み一分三厘、重量六匁〇八、工作精巧。

石質は中生層に屬する粘板岩硬質、此の流域の笠置山、六ヶ岳に産する石材。

石 砥 壹個 (圖版第一〇九)

盛土の中より採取したもの。

長さ約四寸、幅一寸八分、厚さ七分、重量三十九匁。

石質は古第三紀に屬する頁岩、此の地方の諸丘陵に産す。

是等は何れも、石器時代の遺物で、此の土地が其の時代から要地であつたことを推測する一證となるものである。

第八 筑前王塚の名稱

(註) 「名稱」は目次の順としては第二におくべきを、此の古墳にては、石室發見、壁畫、副葬品の出現に、初めて永年閉却せられた舊稱が復活した次第で、乃ち發見當時の状況を記念する意味にて、此所に列した。

誰しも訊ねらるるは

「此の古墳は昔から「王塚」と稱して居りますか、
然り、

と返事するは、純朴なる古老の生きた言質を借りるのである。

此の古塚を、古來「王塚」と稱呼して居つたに、近來殆んど閉却せられて居つた、今の土工工事に従事して居る青年男女等の出生前、既に忘却せられて居つた従つて要もなき土塊とのみ見捨てられて居つたのが、此回の古墳石室の發見あるや、地元古老の口から

「昔から「王塚、王塚」と呼んで居つたが、失張り、王塚だね、立派なものだ、鎮守の塚だ」と傳へ來た其の舊稱を喚起して、感慨無量の面持ちである。

第九 筑前王塚の傳説

古墳の前方部の突角を地均したる跡(發見前の工事)に此の區の公會堂がある。旅人村の老若打ち集ひ鐵七輪の炭火を圍んで冬の夜話し。

〔此處から、あの東南に當る杉の茂つた小山(距離三百八十間)、あれが天神様の山です。〕

あの山にも、此の王塚の山と同じ様な、赭土、黒土を横縞に盛り上げた大きな塚があります。昔から、あの山と、此の山から、真夜中に「火ノ玉」が飛び出して、その邊の大空で出で合ひ、戯るのか、争ふのか、何をしてをるか解らないが、遇ふたり、離れたり、抱くが様にも見え、踊るが様にも見え、上になり、下になり、はては二つの火ノ玉が渦を巻き、巻く渦は火の尾を長く引いてやまない物凄さに、初めは面白う、そうに見たものが今更怖ろしくなつて、しばし眼を閉ぢ………再び開ければ、早や、何時、何處ともなく消え亡せて、東の空が白んで居つたと語り傳へがあるのです。

聞いてる人も、語つた人も、石の様に黙して居ます、夜は更けます。

「火の尾を長く引いた、それで、長尾の地名が出たのではないでせうか。」

「そうかも知れませんが………昔から「王塚の火」として有名であります。」

話は、更に、幕が替ります。

「又此の村で赤兒の産れた夜に、女が二人連れて大川穂波川に洗濯に行きました。不思議や、今頃、真夜中に、

立派な武士が、美しい白い馬に乗られ、此の川を西から東に渡つて、あの、それ、その王塚目がけて馳け登られました。

美しい白馬と見えたのは、馬の金銀の飾りが光るのでした。

馬の通つた空は白布を引いた様に暫く明るくありましたが、其の塚に登つた跡は見えもせねば、行き先きも分りませんでした。

と土地の古老は語りました。

「何時頃でせう。

「ずつと昔のこととせう。

「いや先年も見たと云ふ人がありました。

と初老が口を入れました。

「若しや、あの古墳の駒が、遠乗りに馳け出したのではないでせうか。

と申しますと、如何にも我が意を得たりと計りに。

「そうかと想はれます、馬は二頭と云ふことで、そして私共の産れない昔の昔から、塚の西の川の彼方と塚の東に放駒（ハナコ）と云ふ土地の名があります。

と意味深げにつけ加へました。

（昭和十年十二月稿 川上市 太郎）

謝 辭

此の調査に當り

桂川村長穂坂重吉氏、村役場員諸氏、村會議員西村二馬氏、地主中島六次郎氏、豆田鑛業所榑島梅太郎氏、其他地元各位の御親切なる御援助を謝す。

調査委員島田寅次郎氏の御助言、九州帝國大學法文學部鏡山猛氏の御助力を謝す。

東京帝國大學黑板勝美博士の御援助を謝す。

東京帝國大學博物館後藤守一氏の御助言を謝す。

京都帝國大學濱田耕作博士の御助言、同大學考古學教室梅原末治氏の御助言並に御指導を謝す。

九州帝國大學農學部植物學教室理學博士瀨瀬理一郎氏の御援助、同教室小島均博士、玉井虎太郎氏、藤田光氏、花田主計氏の御助力を謝す。

九州帝國大學農學部動物學教室江崎悌三博士の御援助、同教室藤野政雄氏の御助力を謝す。

九州帝國大學農學部鑄木外岐雄博士の御助言を謝す。

東京帝國大學農學部鑄木外岐雄博士の御助言を謝す。

福岡高等學校玉泉大梁氏の御助言を謝す。

福岡師範學校金尾宗平氏の御助力を謝す。

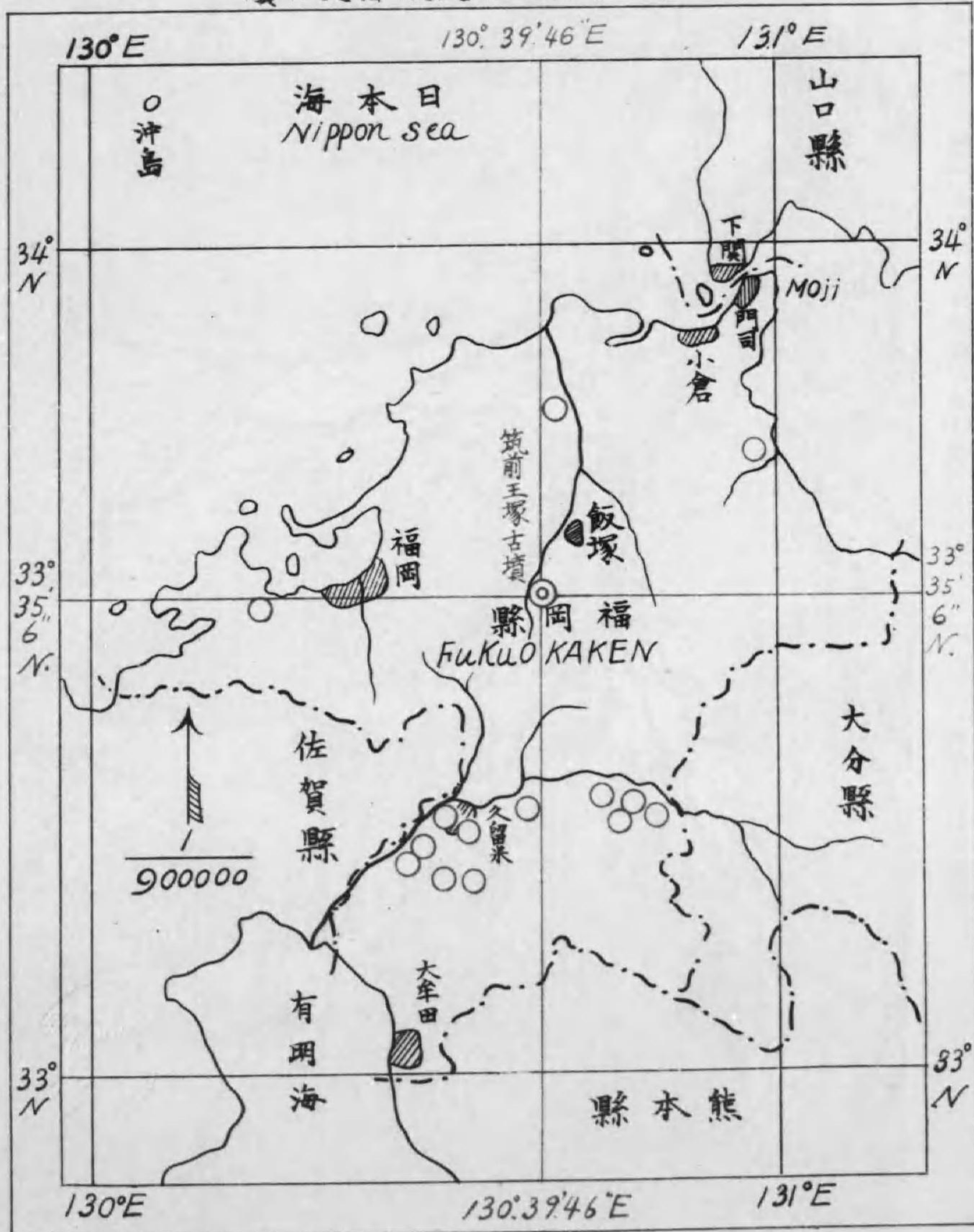
福岡縣商工課技師須藤雅路氏の御助力を謝す。

圖要置位墳古塚王前筑

墳古塚王前筑 ◎
 墳古定指 飯定指内縣岡福 ○

圖版第一

所在地



◎ Otsuka Ancient Sepulchre
 ○ Designated Ancient Sepulchre,
 at Fukuokaken in Nippon.

筑前王塚古墳 謝辭

九州帝國大學本部前田稔靖氏の御助言、日本刀鍛錬宗像道場櫻井正幸氏の御助言を謝す。
 目賀田龜之助氏の御助言を謝す。
 畫家伊勢幸平氏並に藤野不二男氏の御助力を謝す。

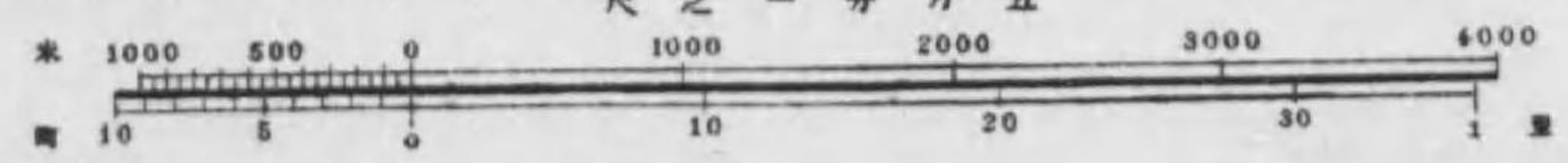
昭和十年十二月

東京府古蹟分布圖
 東京府古蹟分布圖
 東京府古蹟分布圖



太宰府(ノ一部) 五万分一地形圖小倉七號共十六面

▲無名古墳(推測)



圖版第二 五万分一地形圖上ノ古墳位置

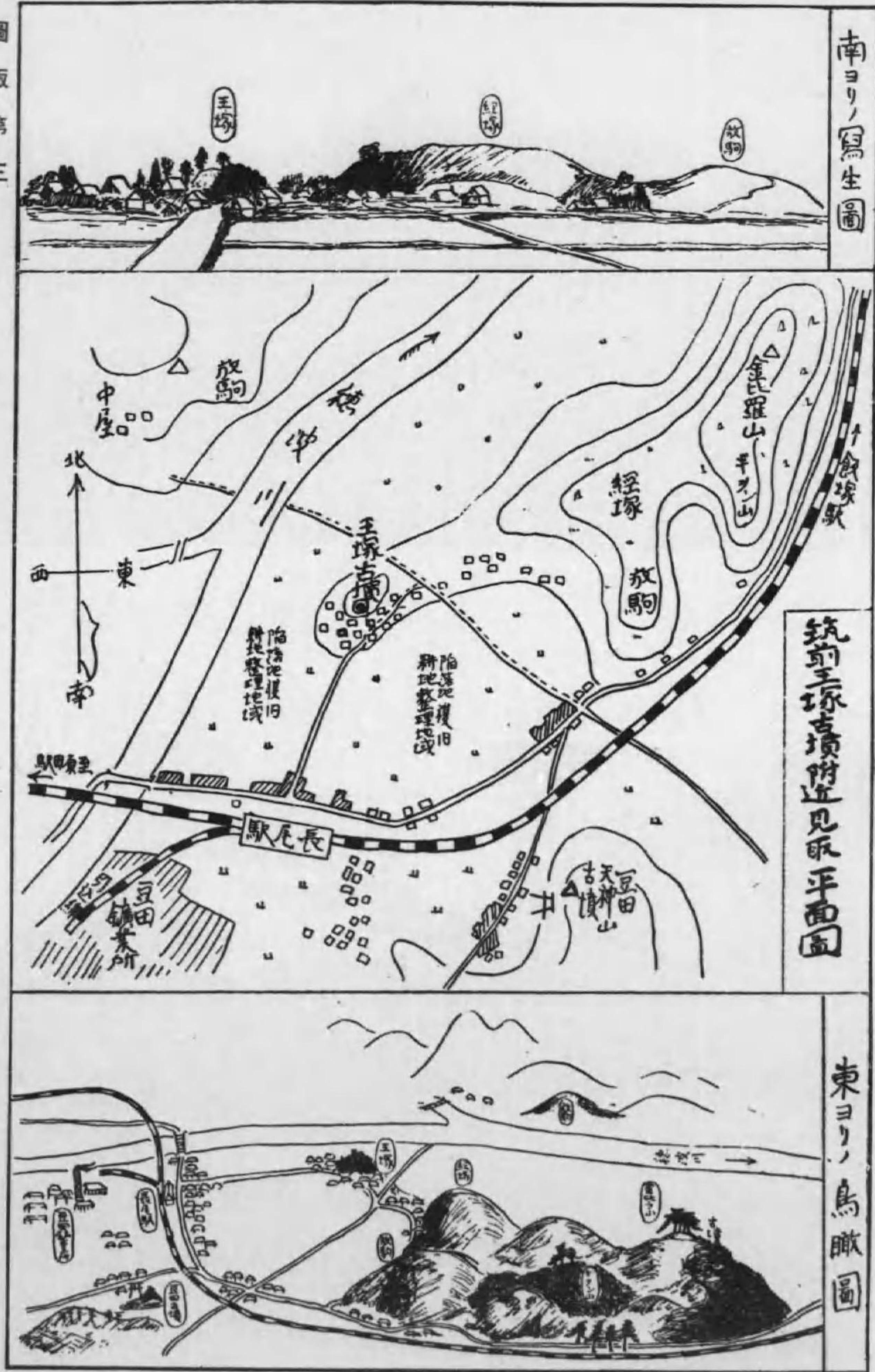
筑前王塚古墳 所在地

圖 要 觀 景

圖 版 第 三

筑前王塚古墳

景 觀



南ヨリノ寫生圖

筑前王塚古墳附近見取平面圖

東ヨリノ鳥瞰圖

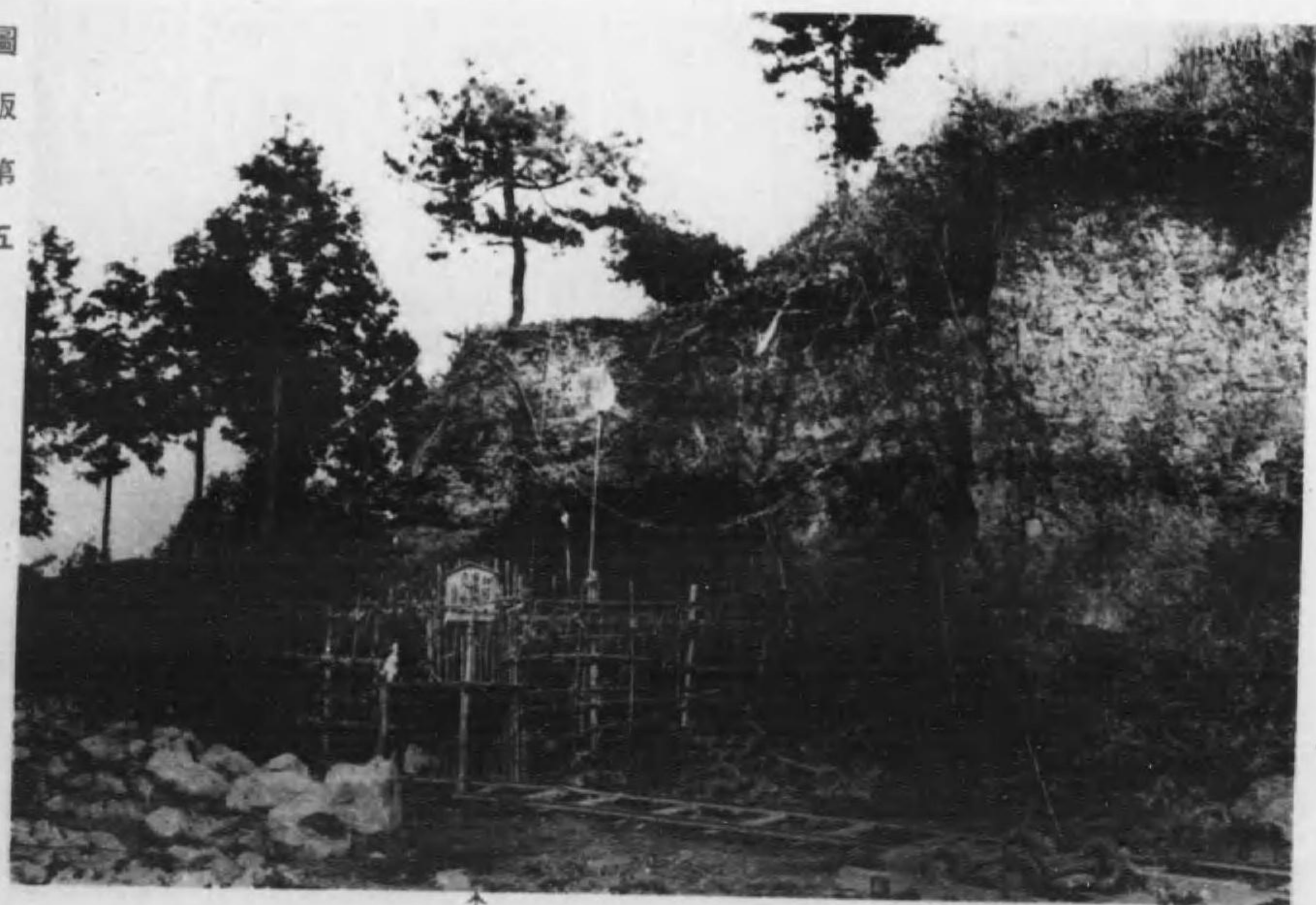
圖版第四
筑前王塚古墳
發見



古墳ノ遠望

墳古塚王○

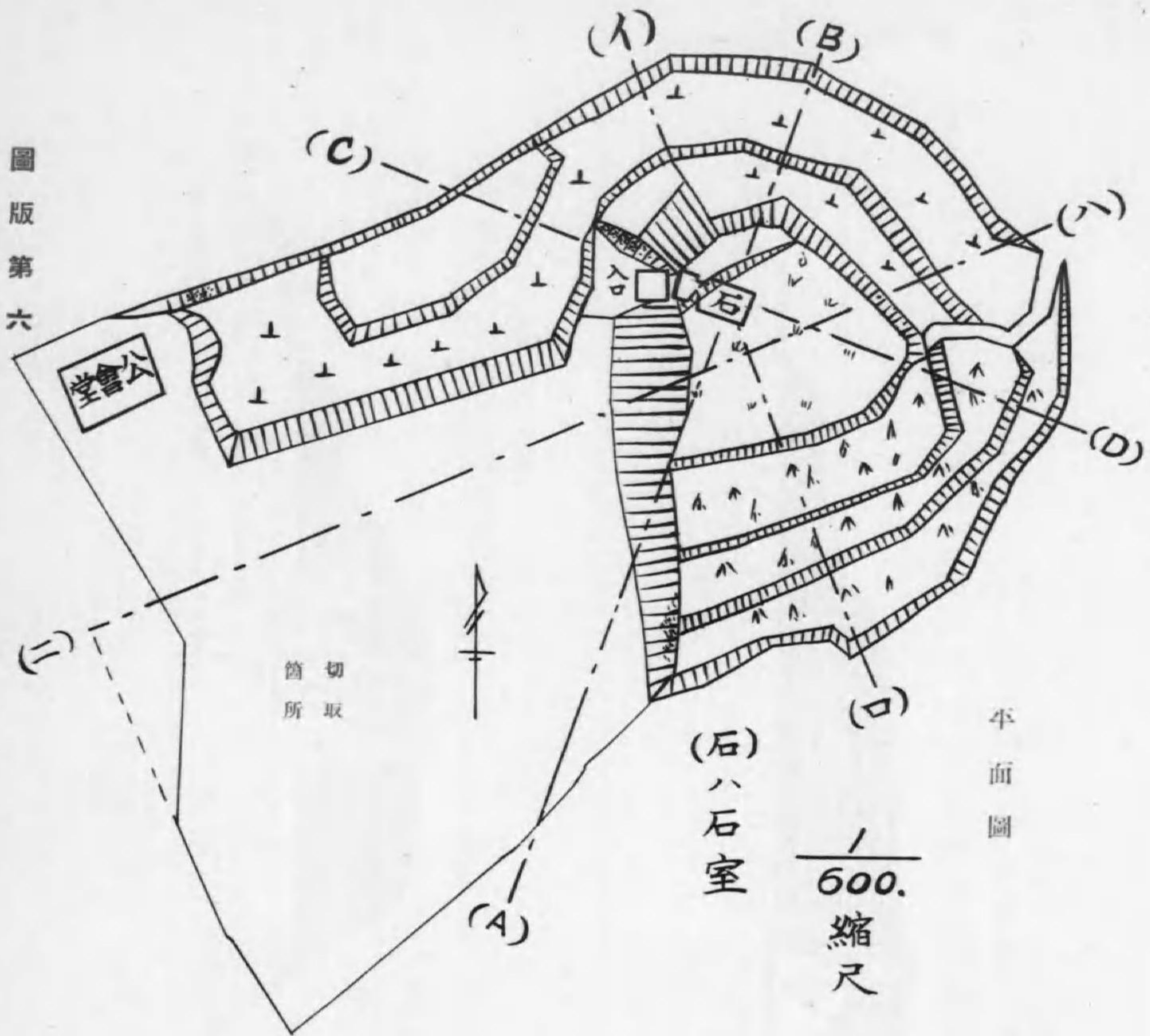
圖版第五



石室發見當時ノ風景

↑
口入室石内柵

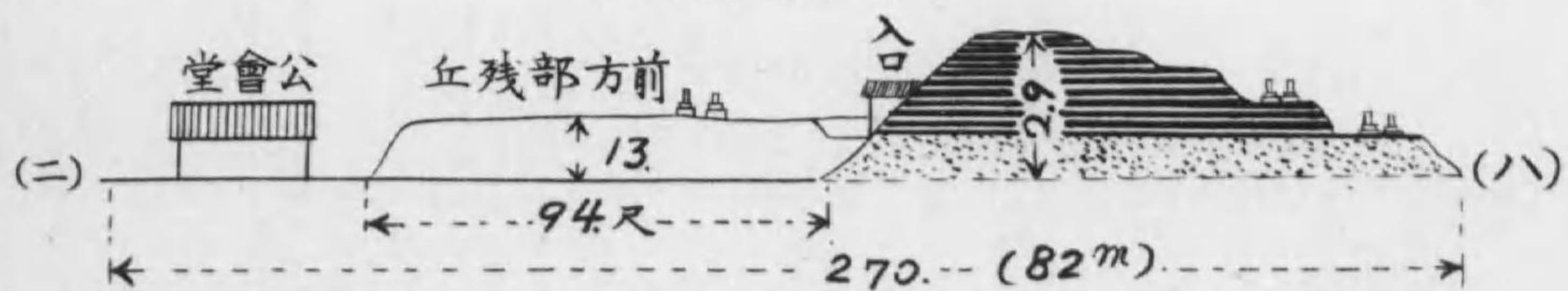




面斷(橫)線(口)(イ)



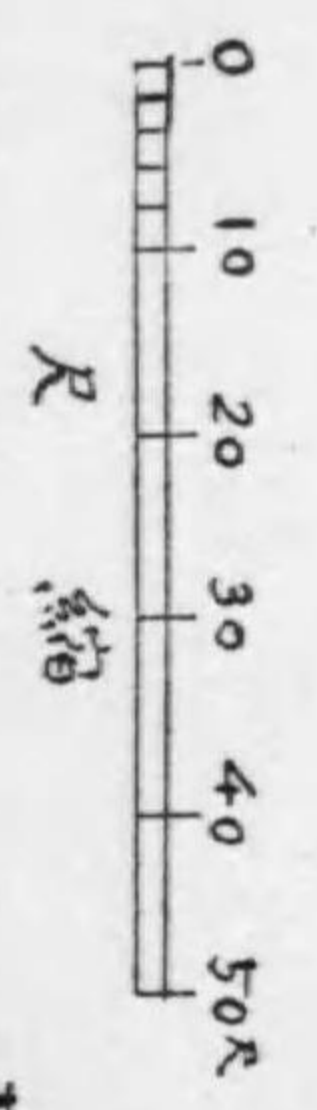
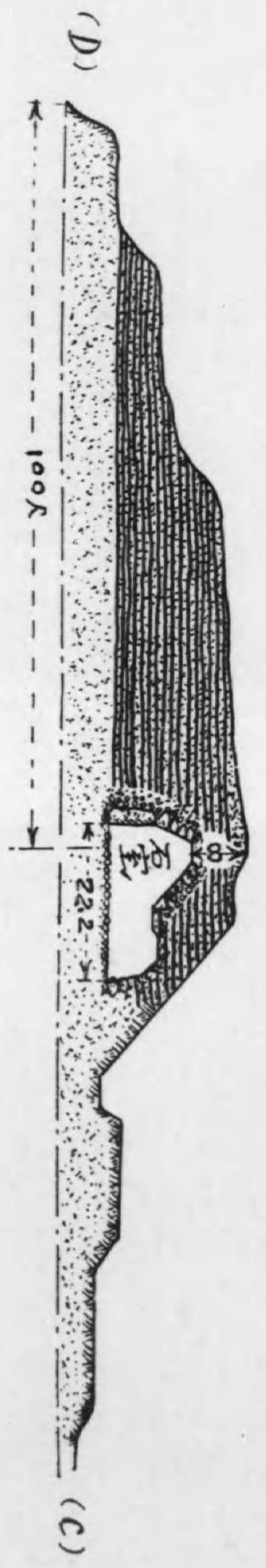
面斷(縱)線(二)(ハ)



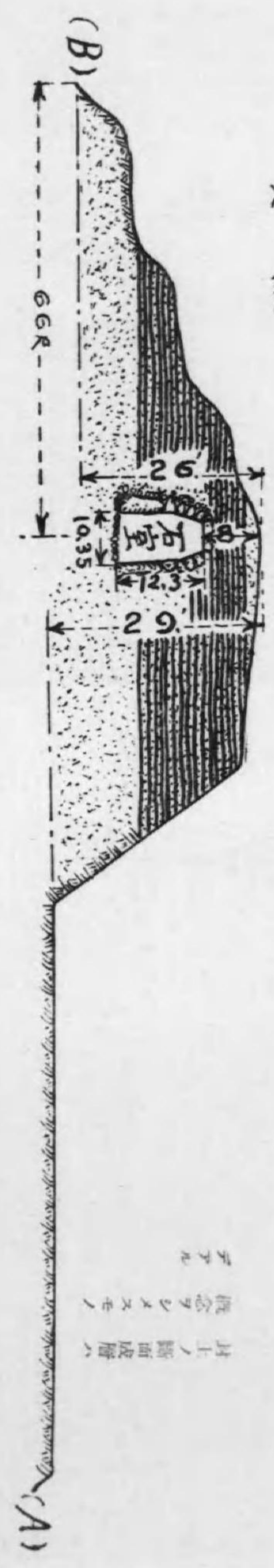


(照參圖面平六第取圖) 圖面斷ノラシ通ヲ室石

圖面斷(縱)線D—C



圖面斷(横)線B—A



(xハ概ニ尺節ヲニ取取具ハ層上)

片上ノ跡面成層ハ
 洗念ヲシマスモノ
 チアル

圖版第八

筑前王塚古墳

佛造



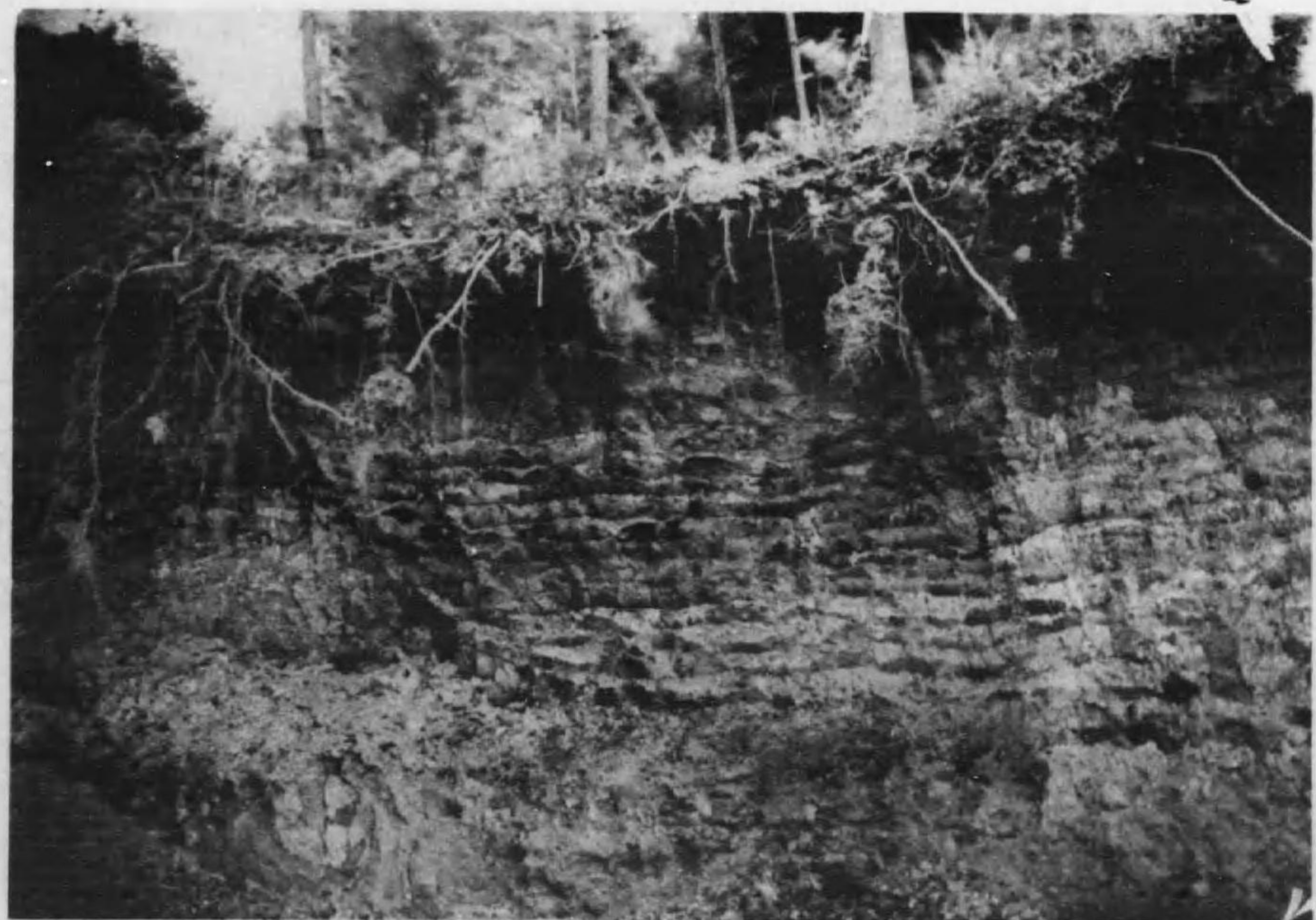
古墳ノ外觀

↑前方部ノ殘部

↑建物入口

後圓部ノ切取面

圖版第九



封土ノ成層

Section of Burial-mound

圖版第一〇
筑前王塚古墳



葺石(中段南側)

構造

圖版第一一



葺石(中段北側)

石室内観見取圖
Sketch View of the Arrangement of Stone-chamber.

筑前王塚古墳
圖版第一二
構造

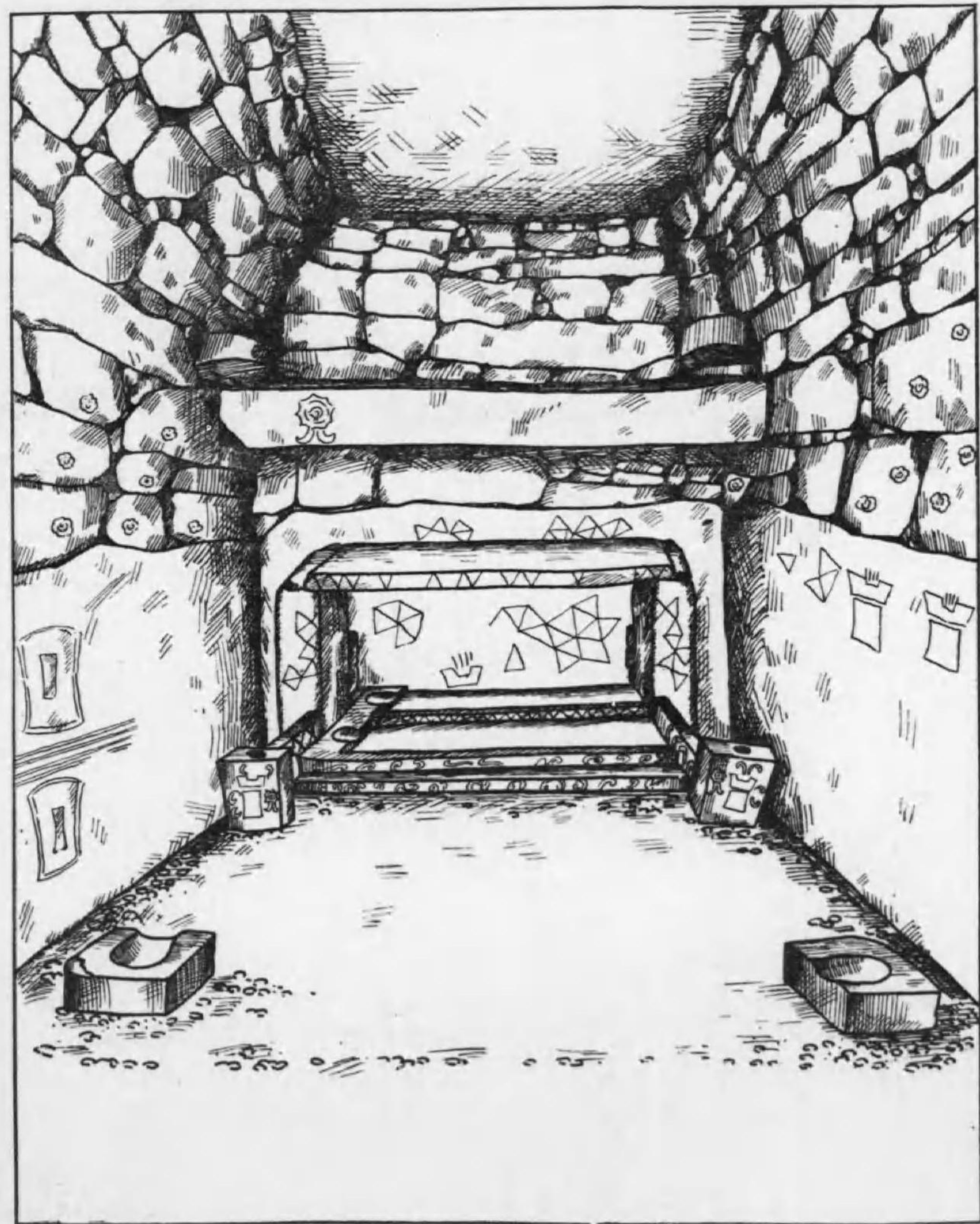


此の美門原書を開き裏面を見れば

Please turn over, and see the rear side.

石室內觀見取圖
 Sketch View of the Arrangement of Stone-chamber.

流前王塚古墳
 圖版第一二
 構造

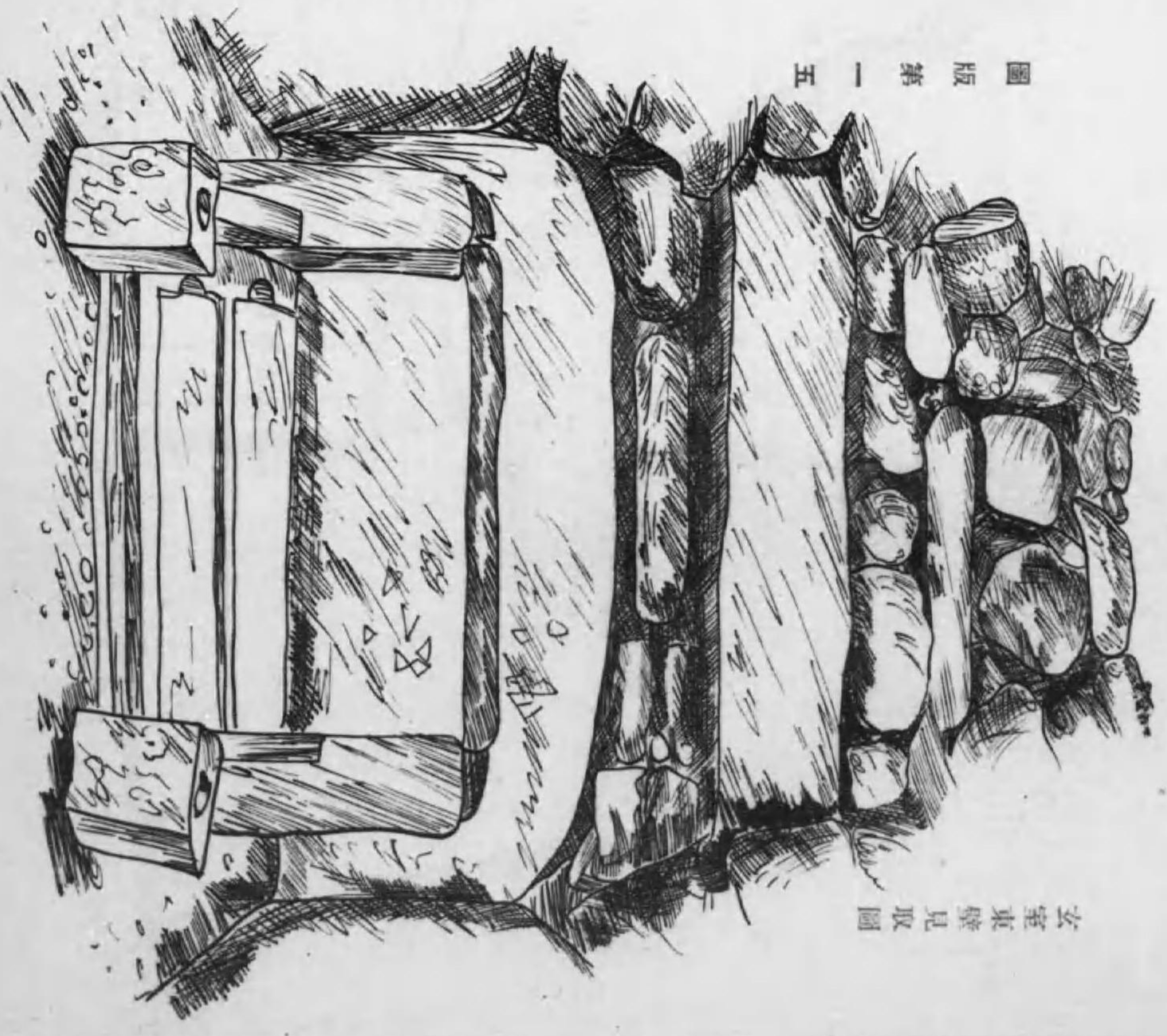


見發掘發然偶日十三月九年九和昭
 Excavated on 30th, Sept., 1934.



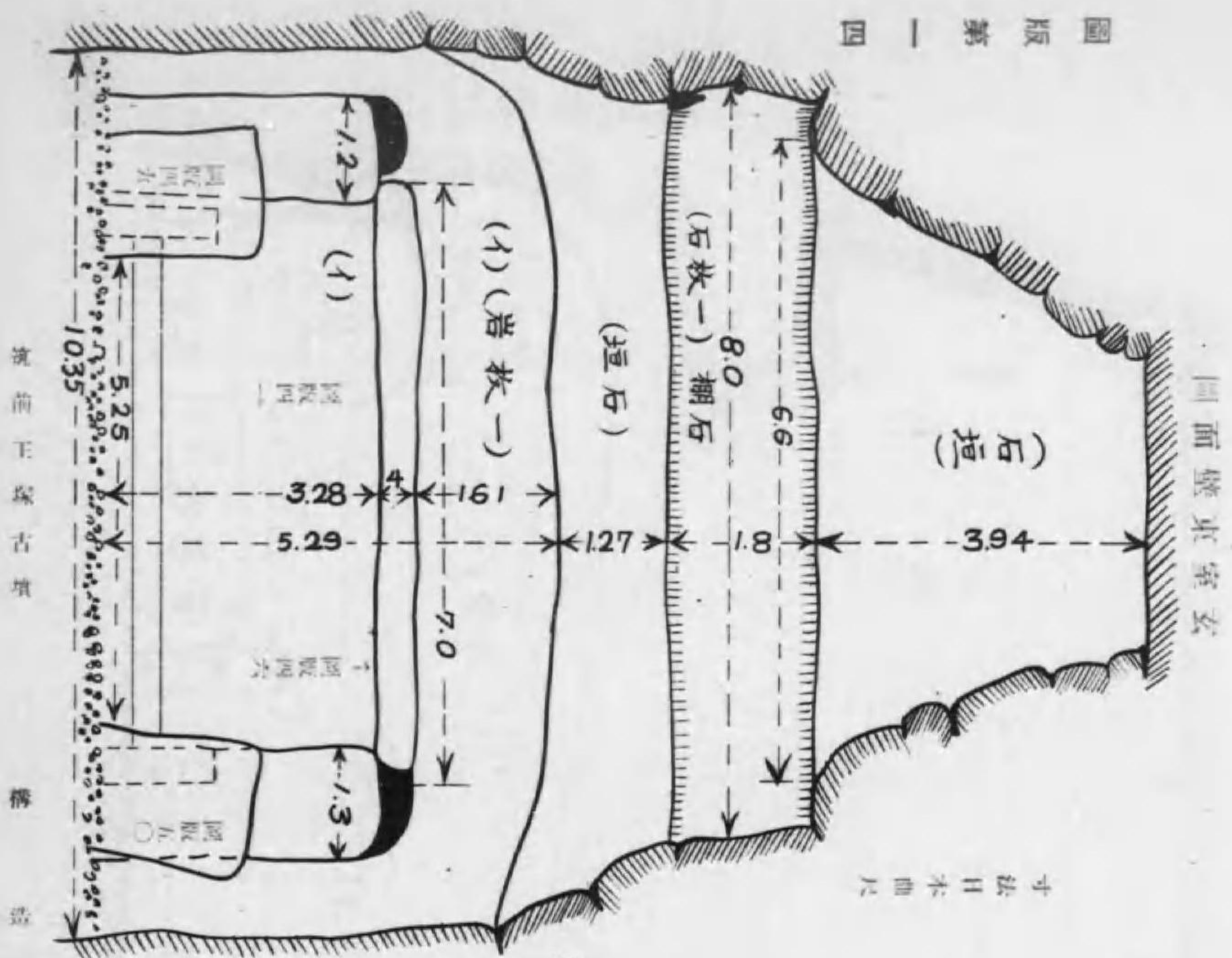


玄室東壁見取圖



圖版第一五

(1) 六圓石



圖版第一四

圖面壁東室玄

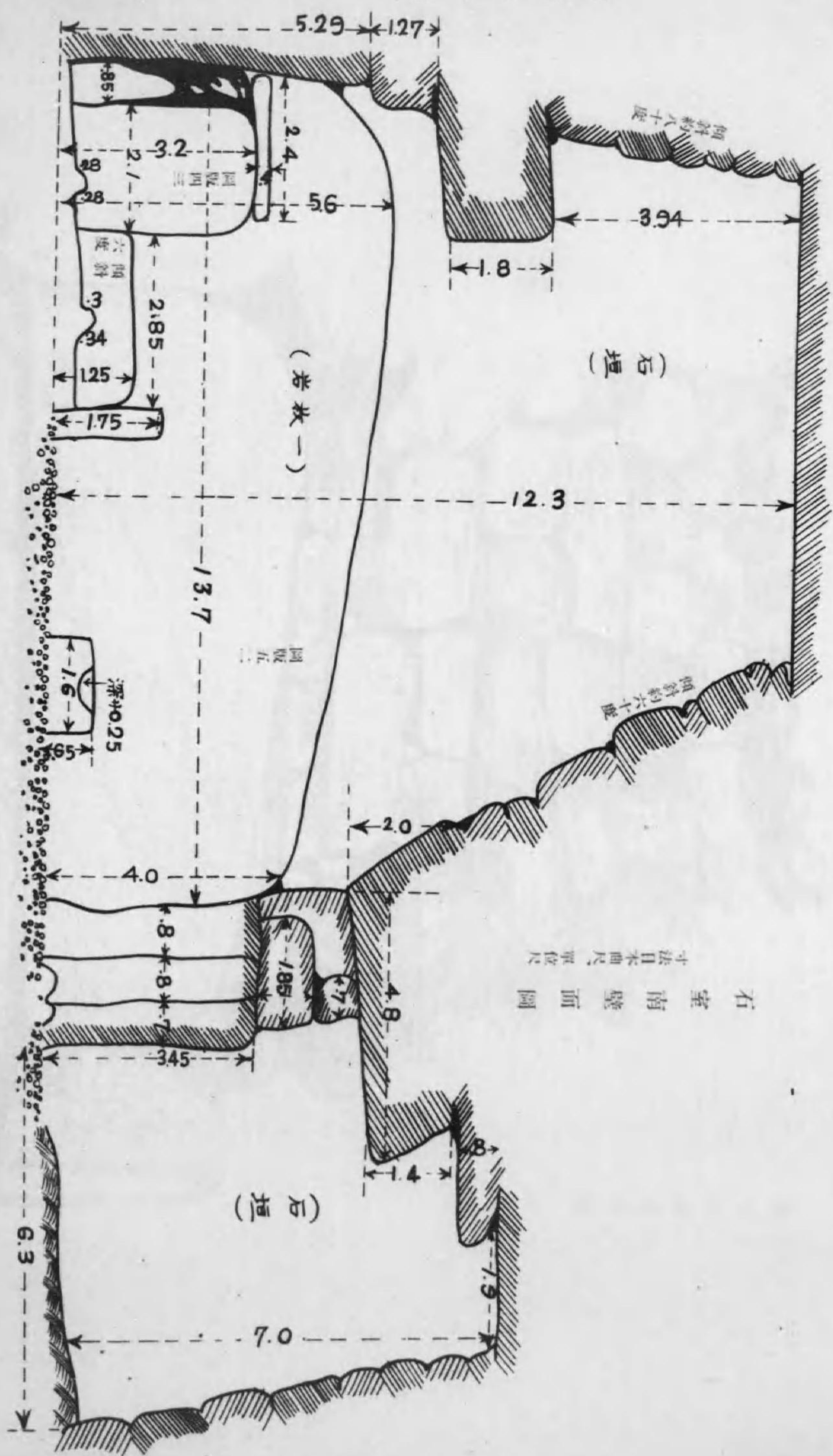
寸法日本曲尺

築前王塚古墳

壁

景

圖版第一六



石室南壁面圖
 寸法日本曲尺、單位尺





1 2 3 4

女室南壁見取圖

圖版第一七



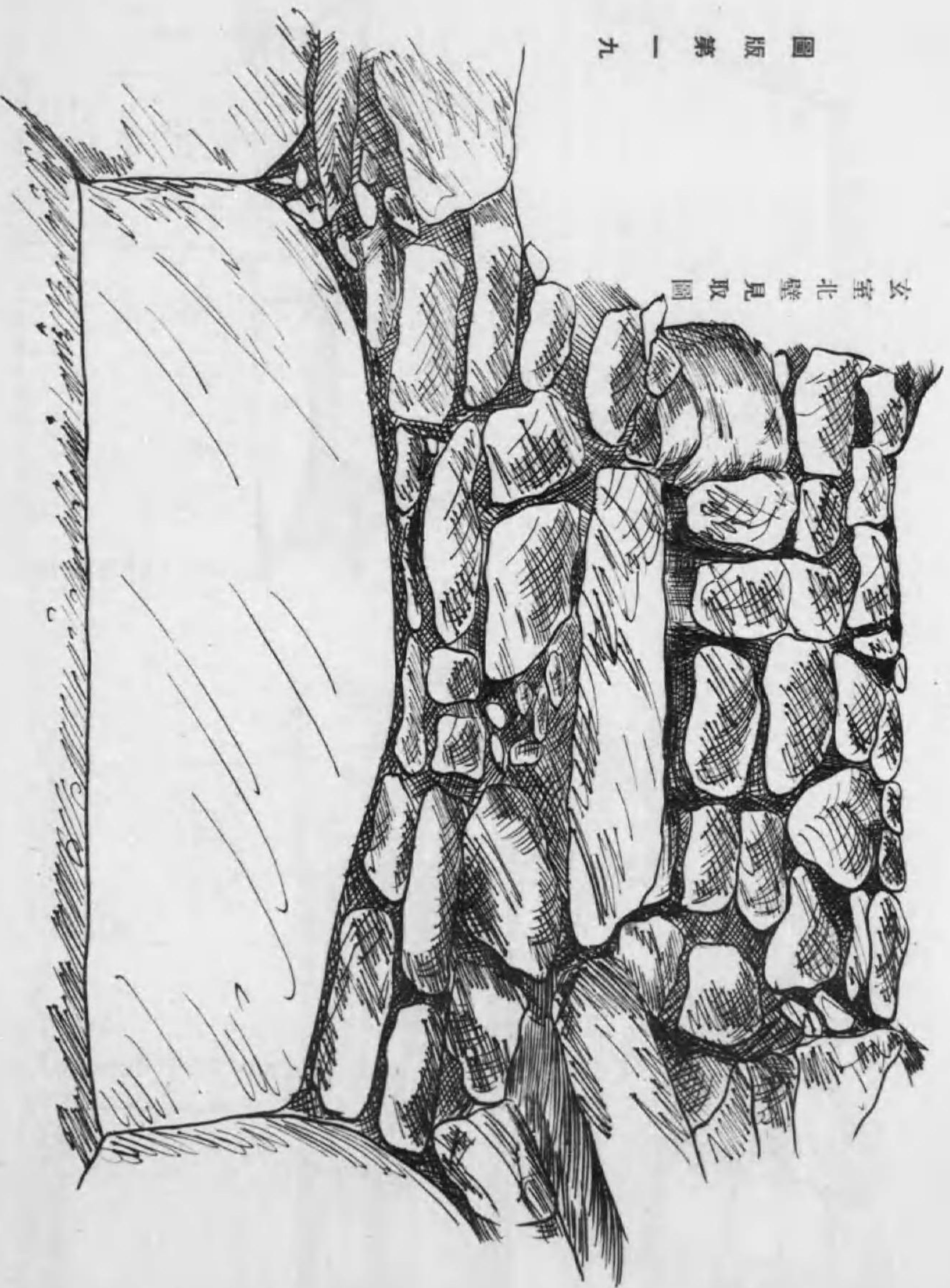
筑前王塚古墳

構造



圖版第一九

玄室北壁見取圖

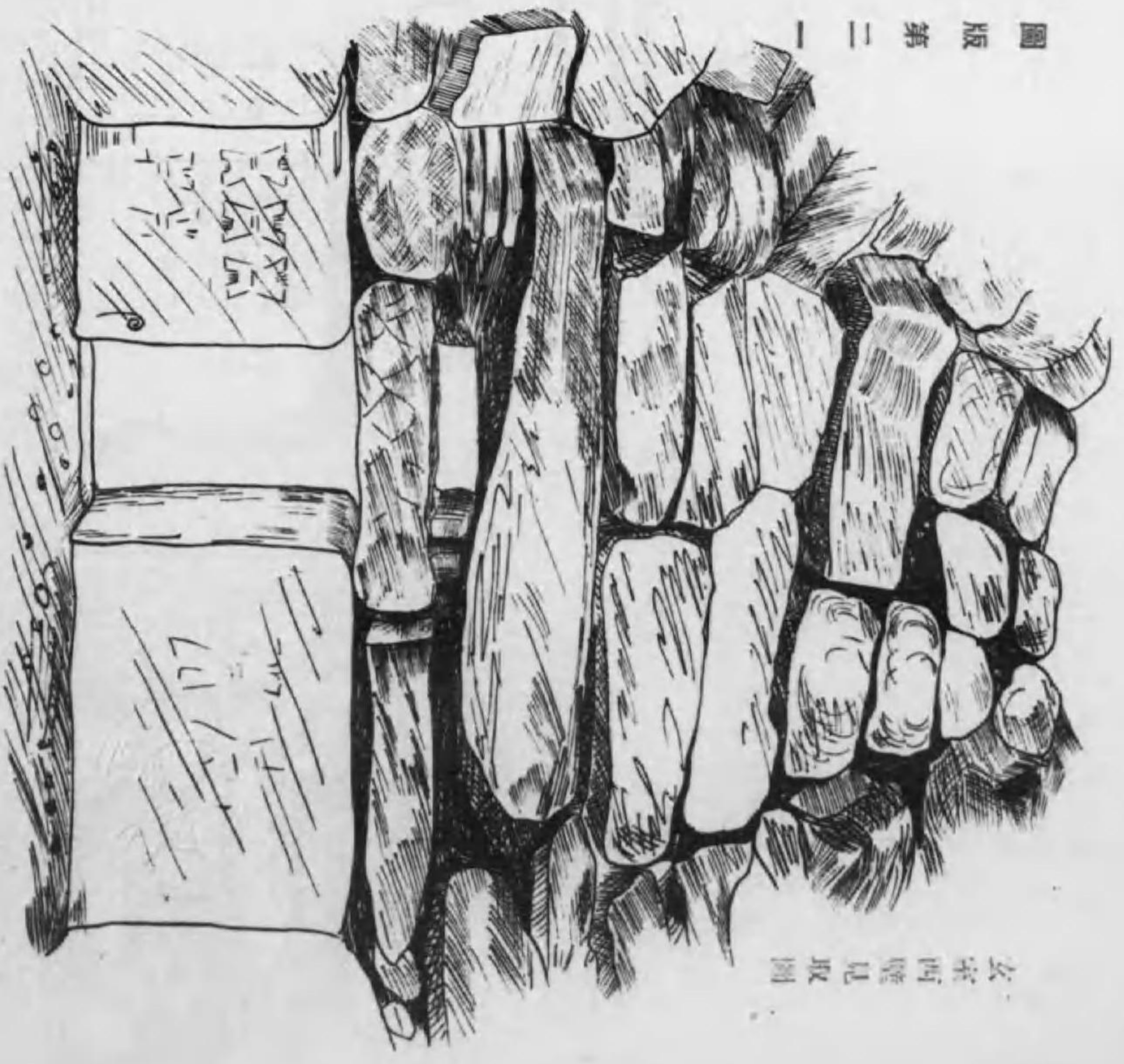


筑前王塚古墳

構造

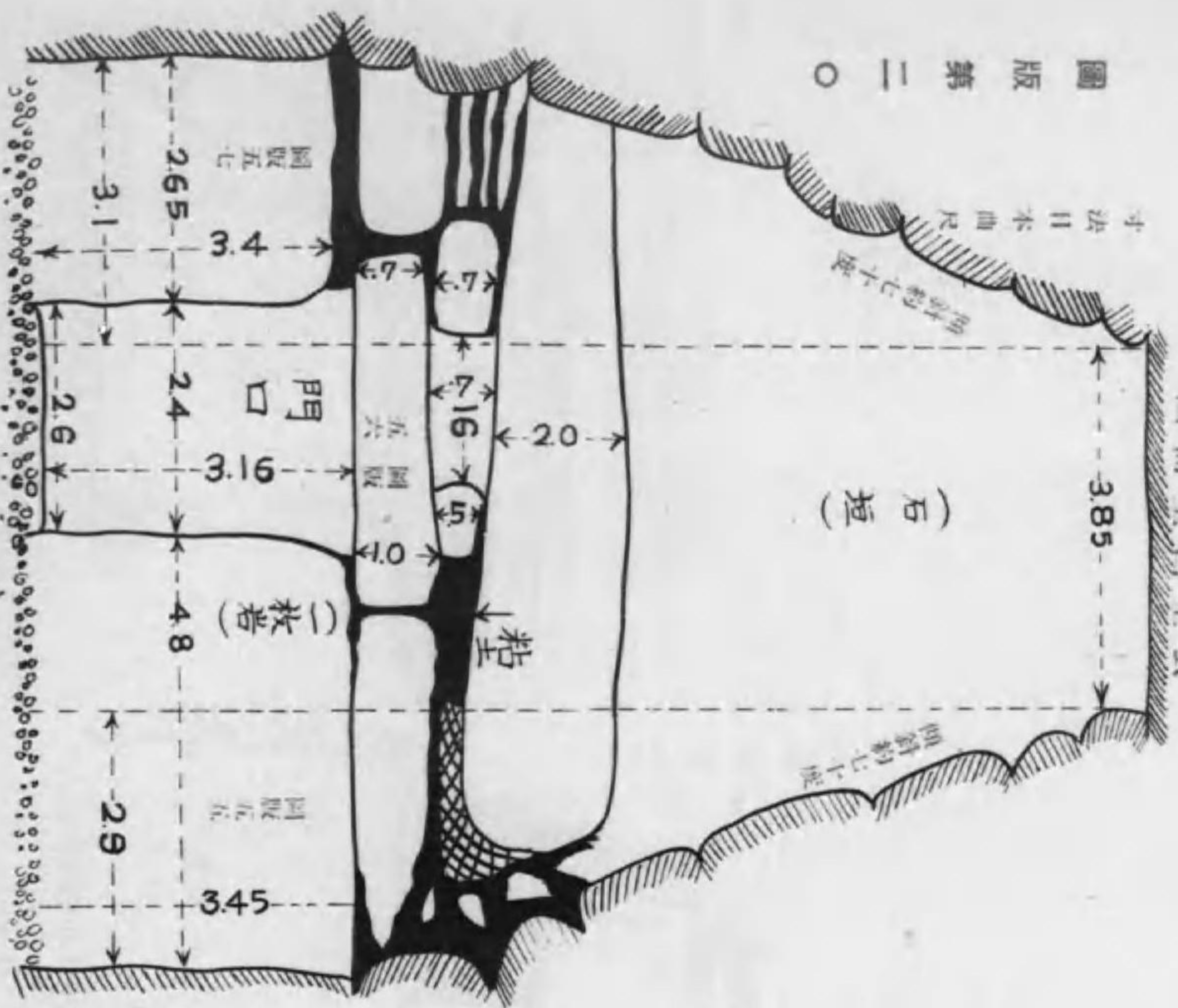


玄室西壁見取圖



圖版第二一

圖面壁西室玄



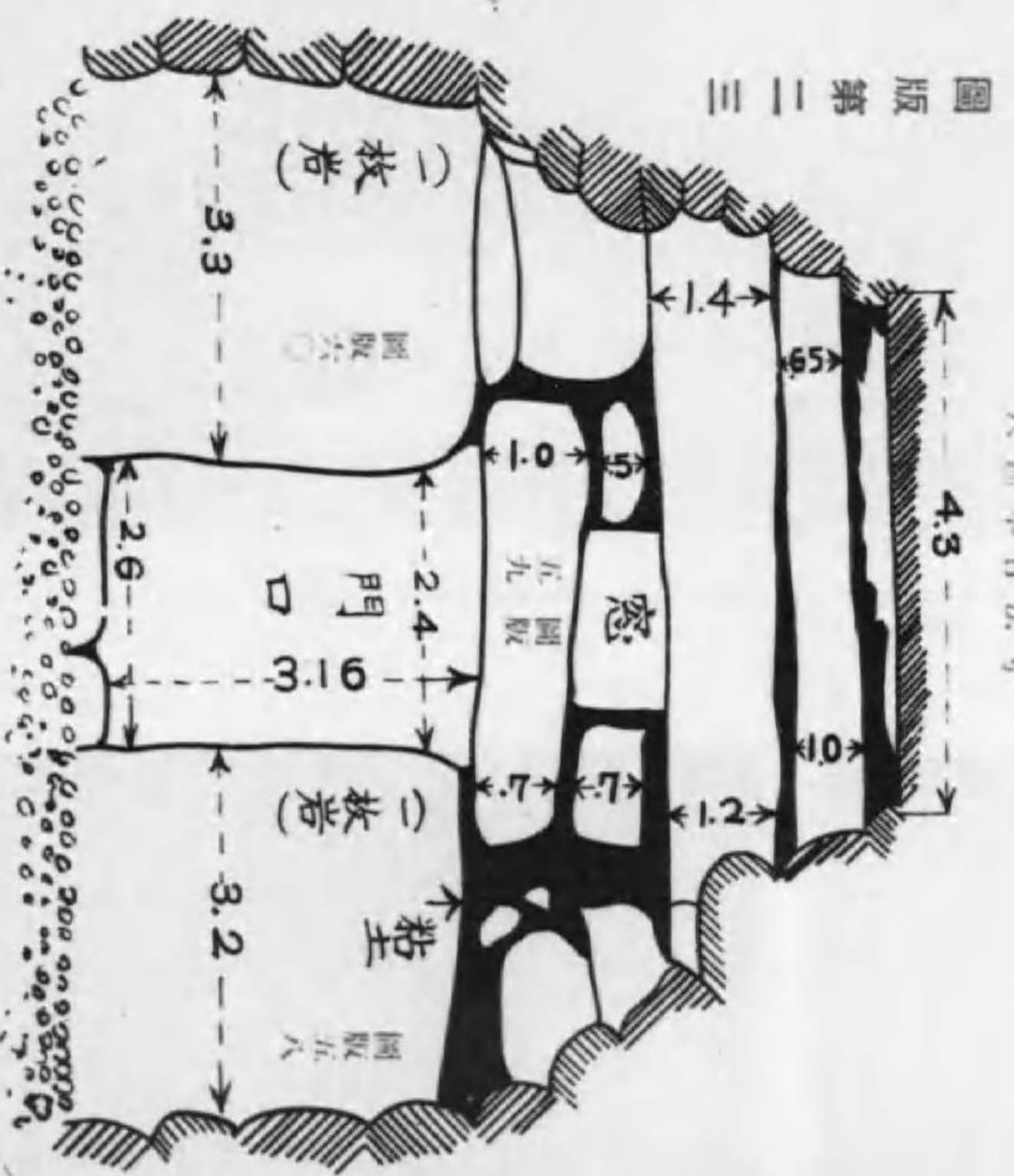


圖取見壁北東室美



圖版第二二

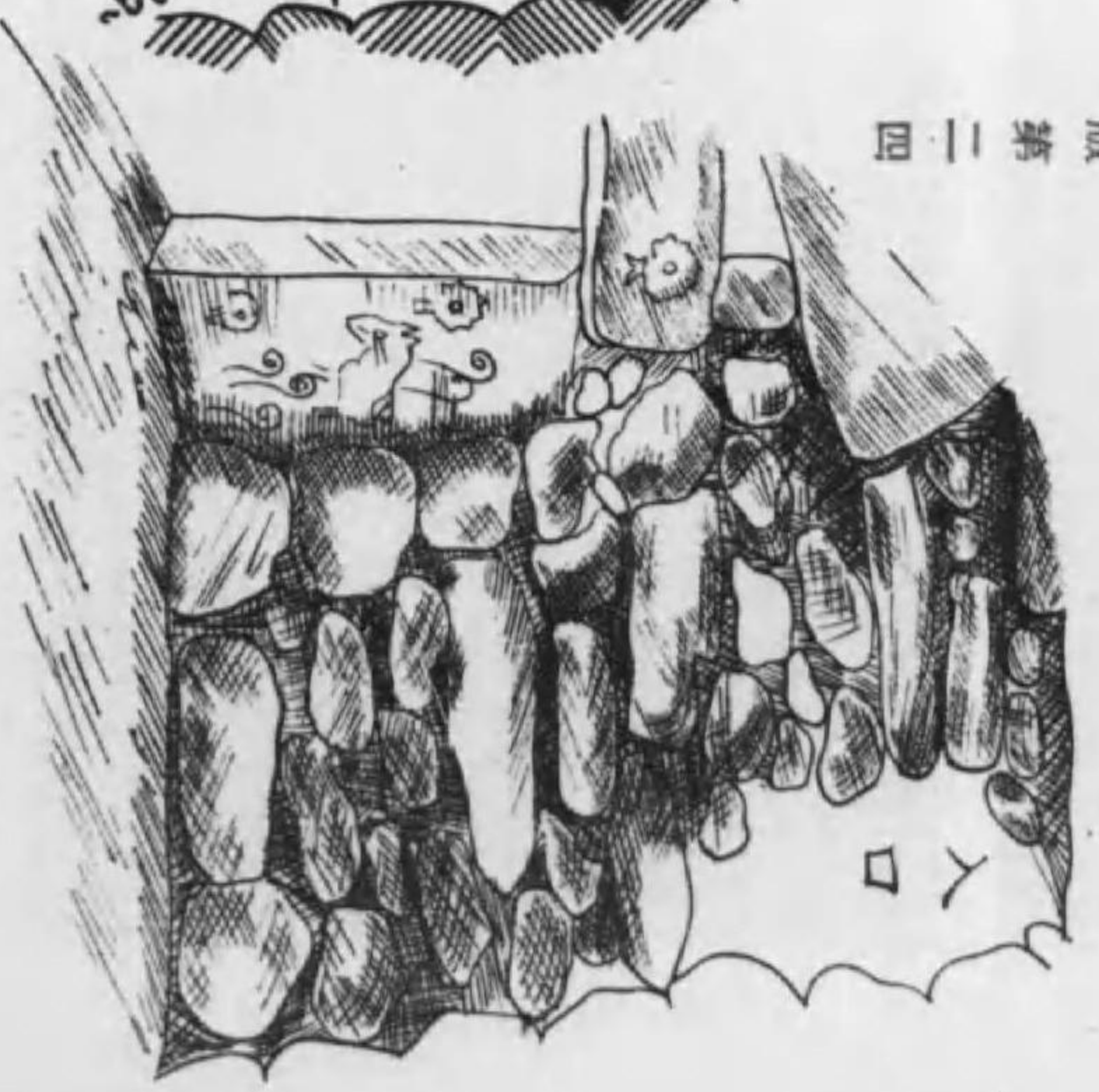
圖面壁門美室美
尺前本目法寸



圖版第二三

圖版第二四

圖取見壁南室美





玄室正面棺床、及屋形

Stone-Sarcophagus. (Double Bed Type)

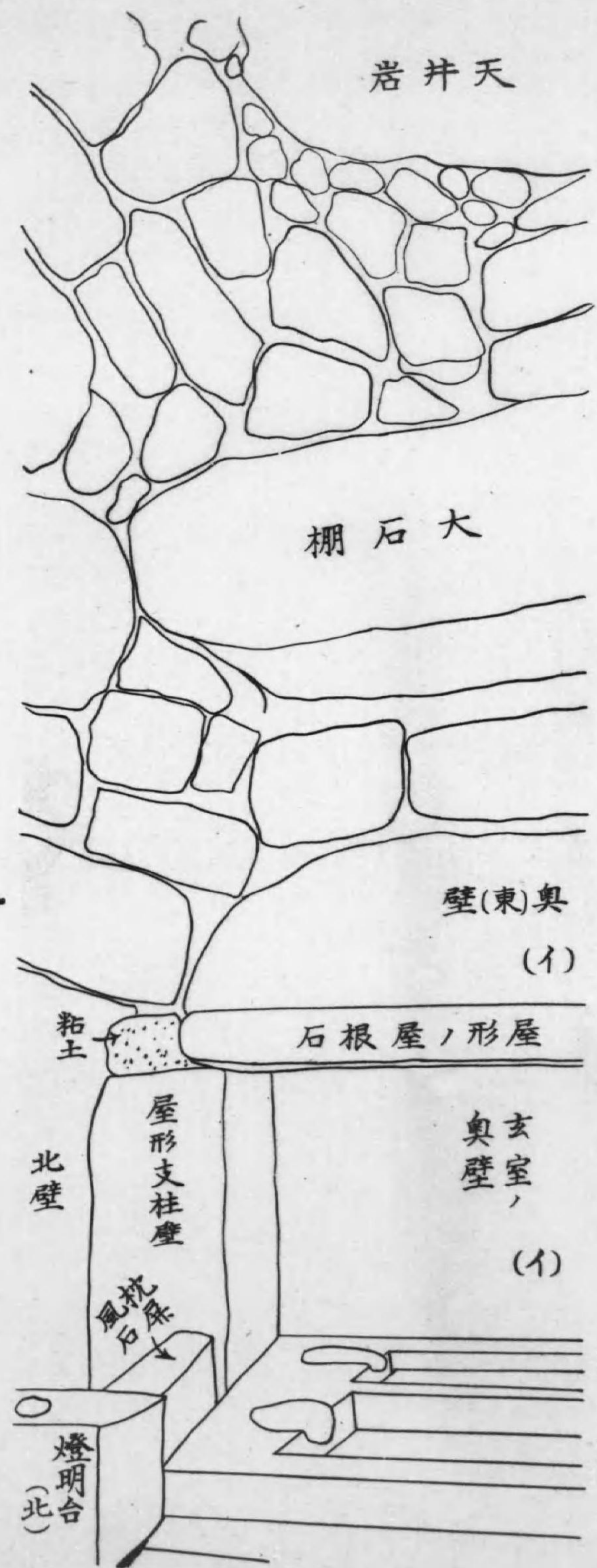


台明燈北



台明燈南





岩井天

大石棚

壁(東奥)

(1)

粘土

石根屋ノ形屋

北壁

屋形支柱塵

奥室

(1)

枕石

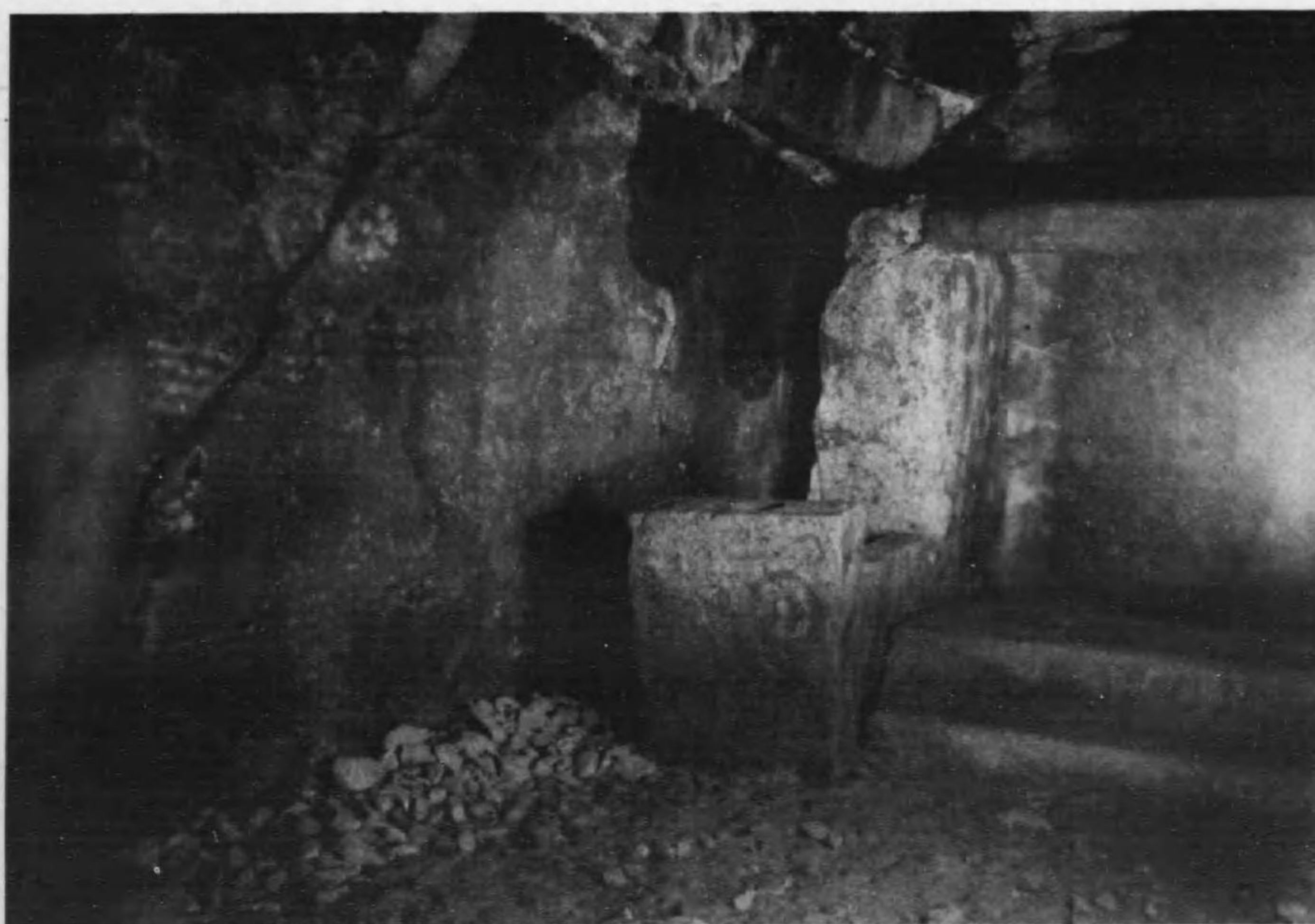
燈明台
(北)

複床棺

(1)
(1) 八同一石ナリ、



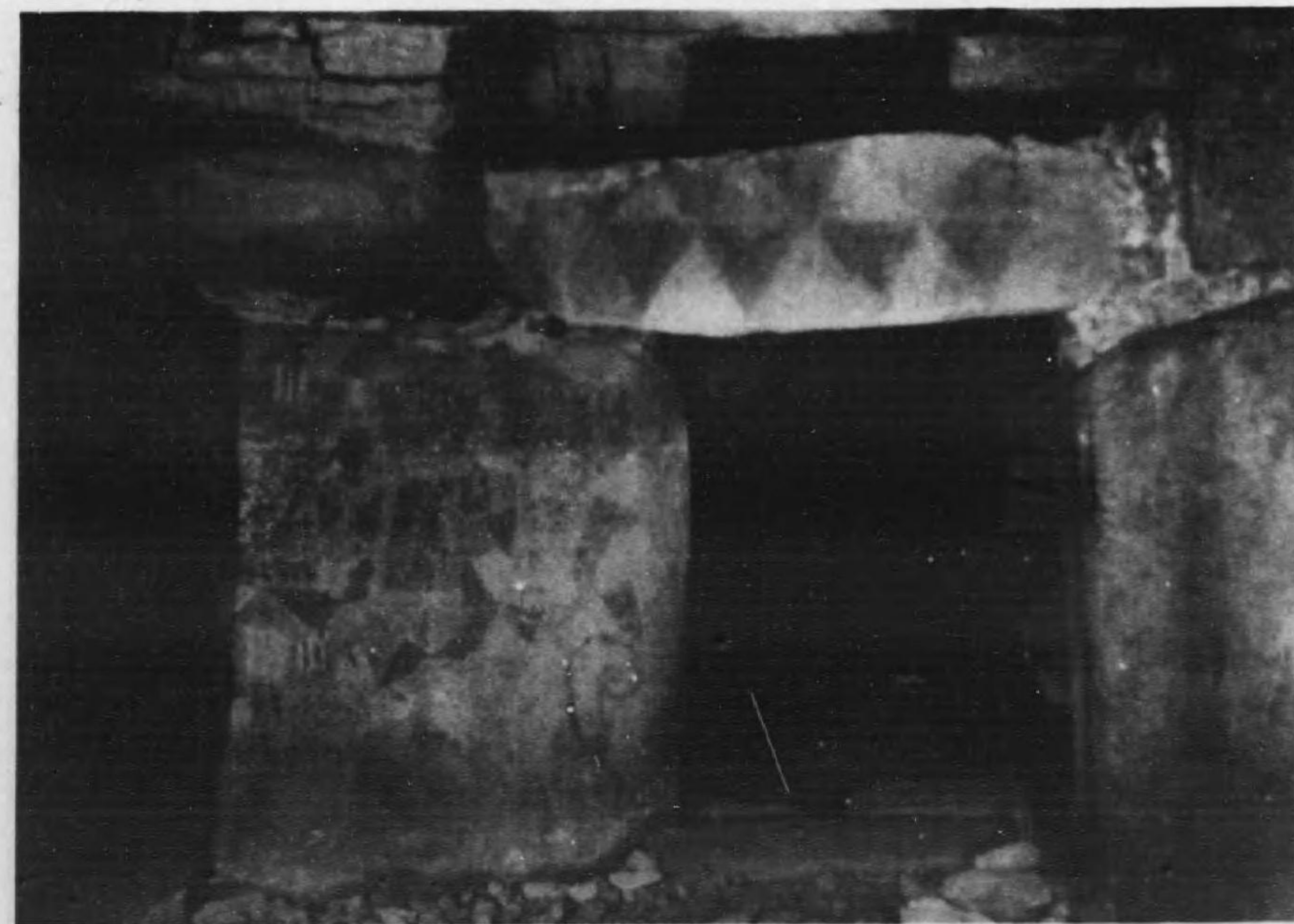
玄室南壁下石枕



玄室床棺下北壁

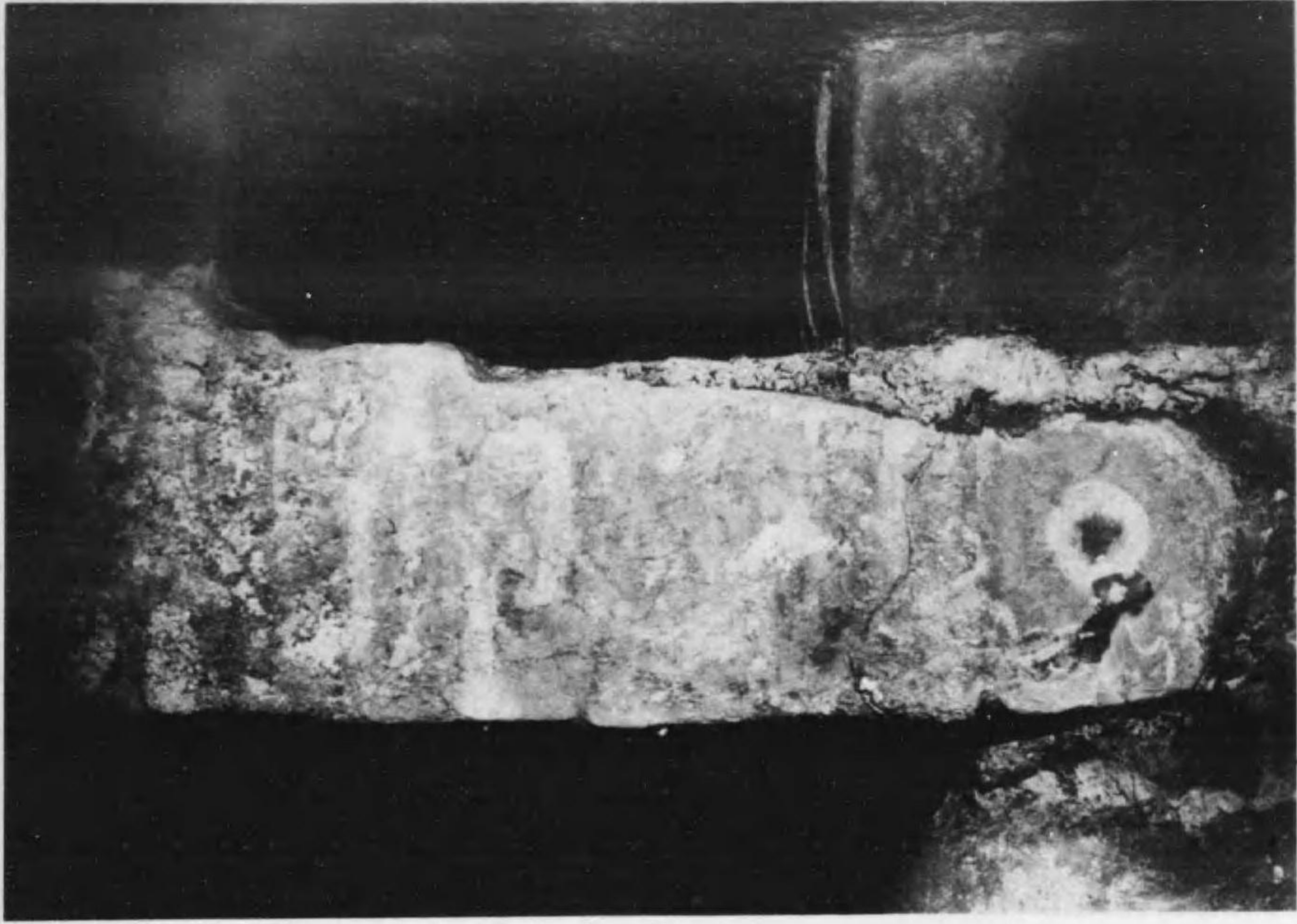


玄室北壁ト西壁ノ隅角及石枕



美門(玄室側)

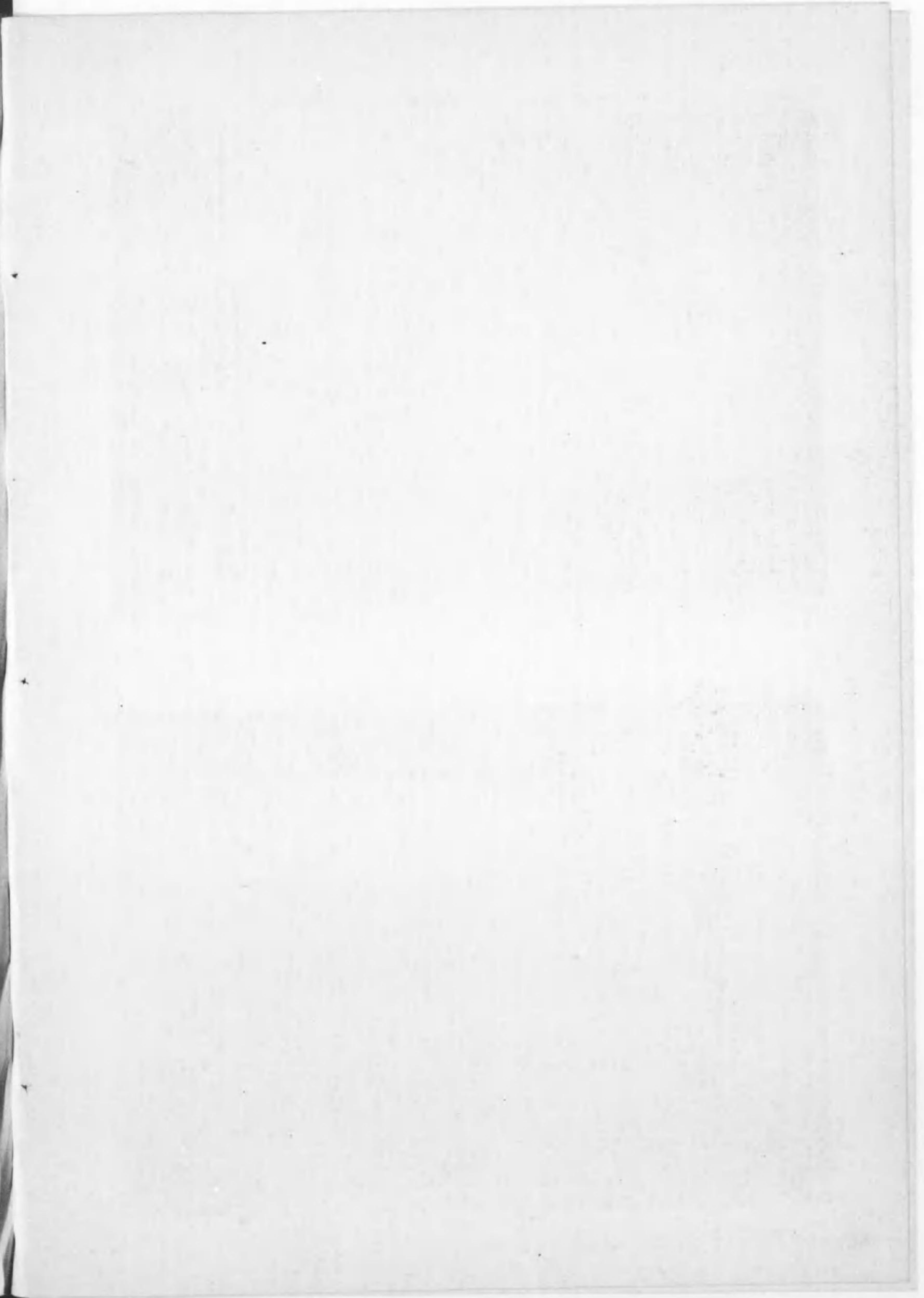




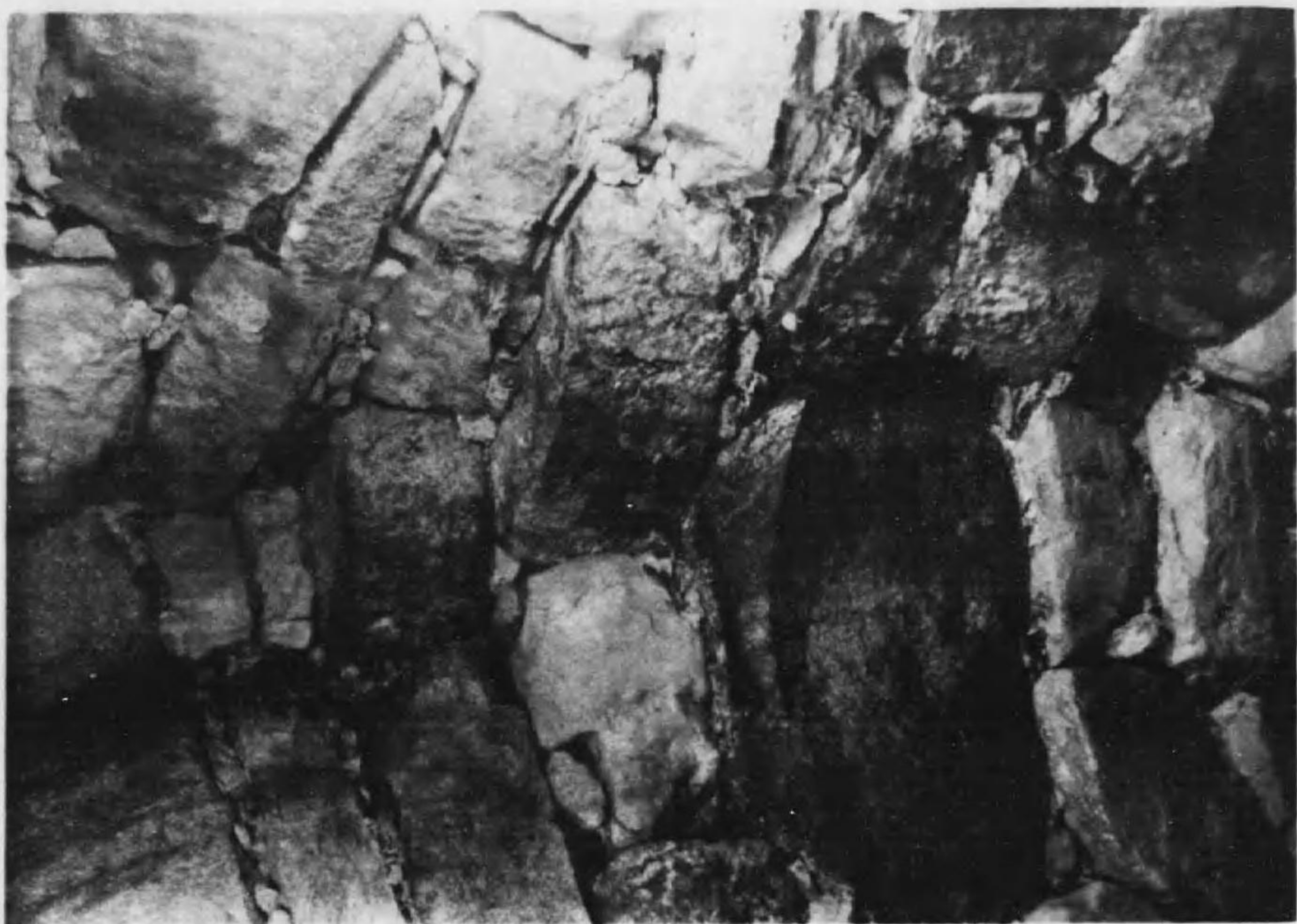
美門楣石(美室側)



美門闕石



圖版第三四 玄室南壁、西壁隅ノ石×



筑前王塚古墳

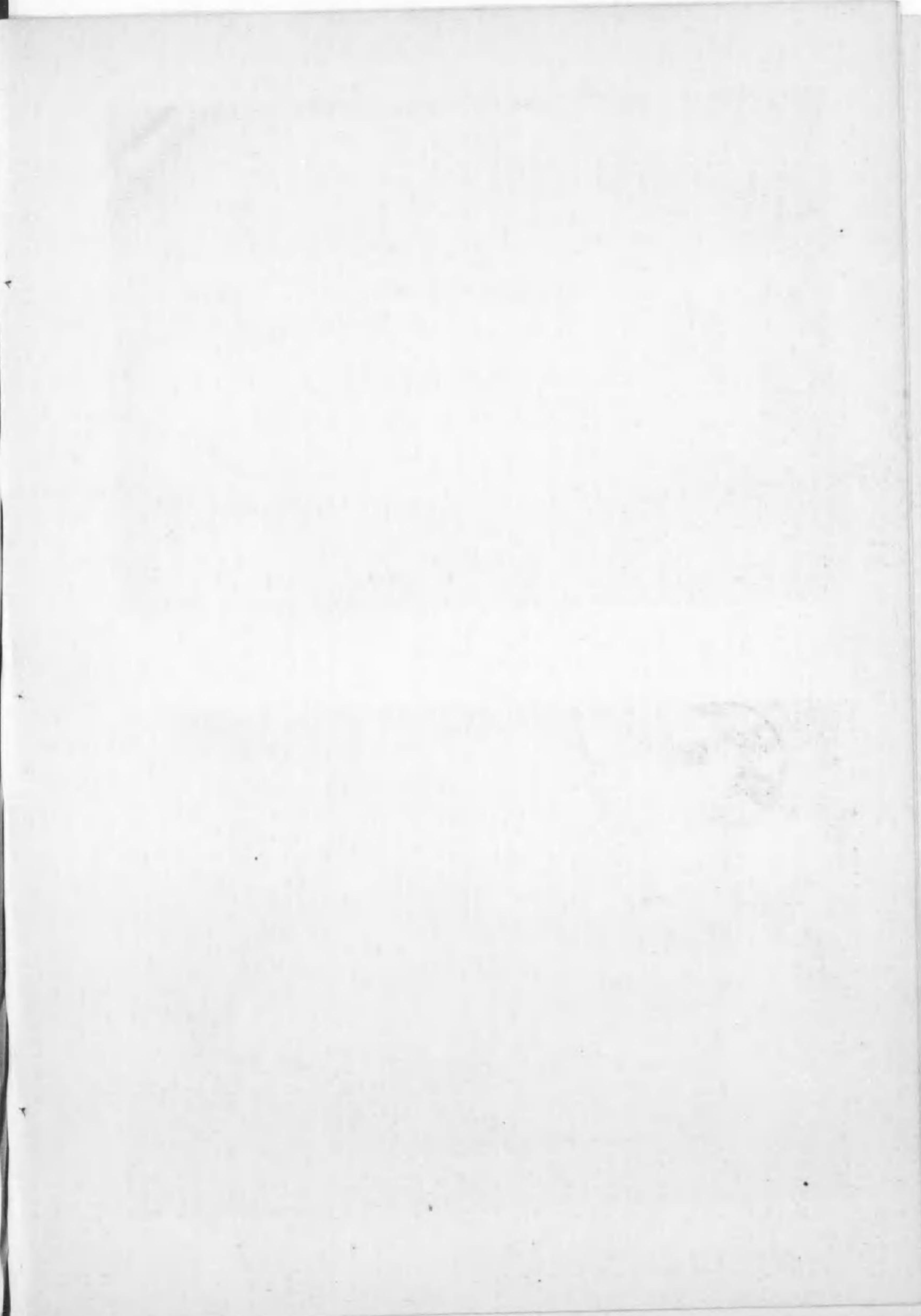
構造

圖版三五



扉石

コノ面上ガ玄室ニ向ヒタル面



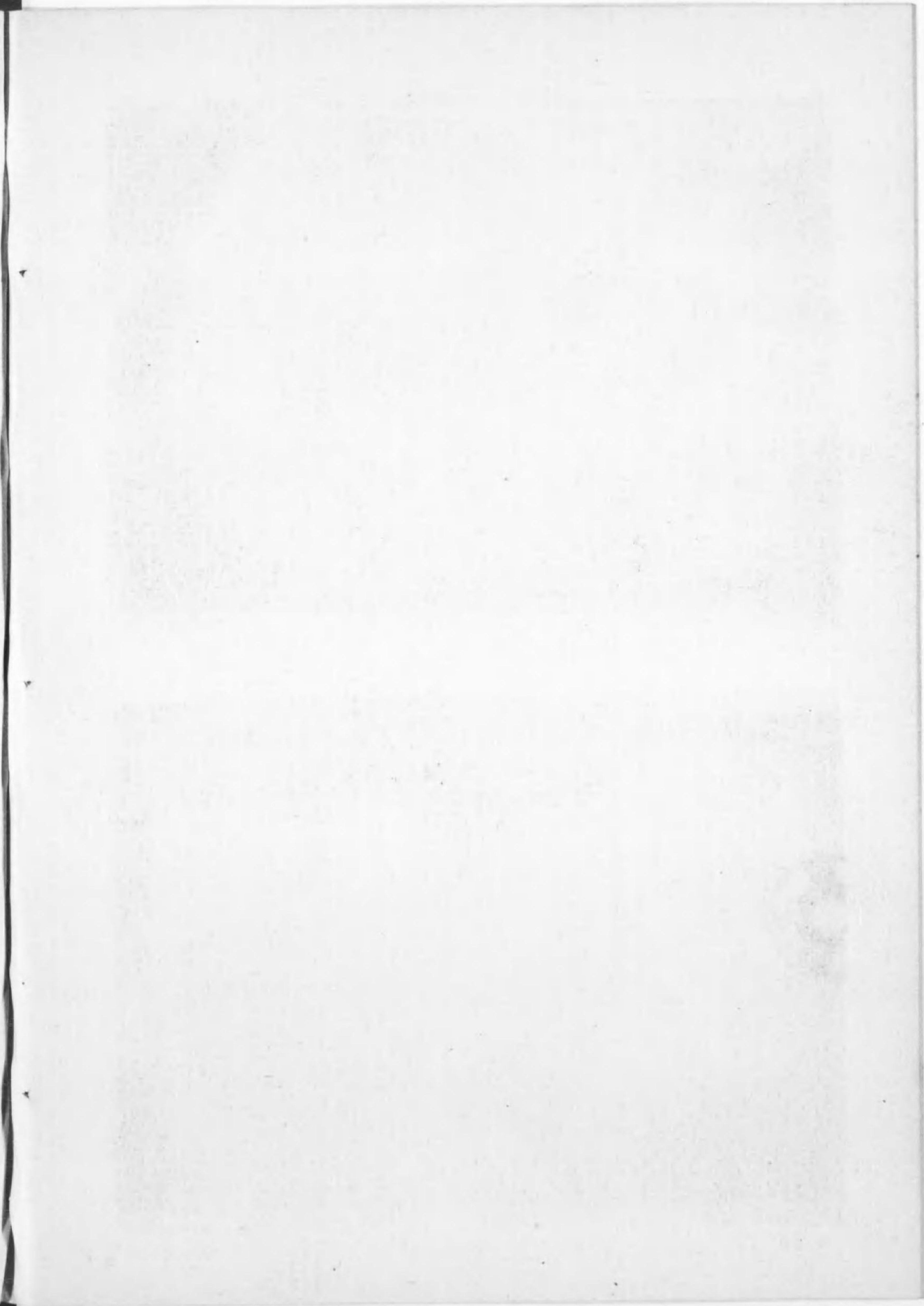


美門南壁面(美室側)



美門北壁面(美室側)





圖版第三八

美室西壁裏石垣面



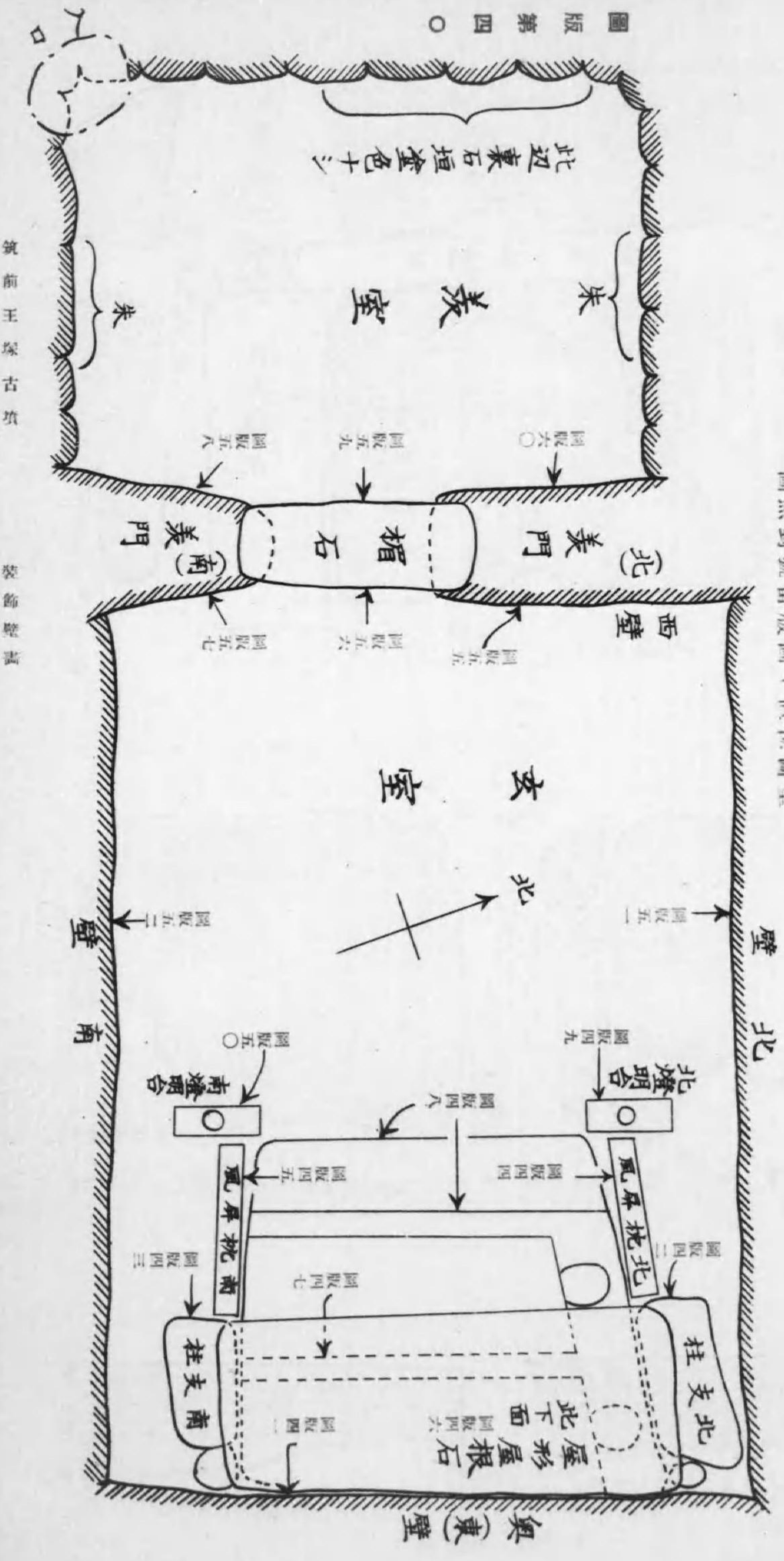
流前王塚古墳

構造

圖版第三九

美室東北壁 粘土目地





圖照對號番版圖+置位畫壁

與(東)壁

屋形屋根石
此下面圖版四六

北燈
北風屏
北柱
南風屏
南柱

玄室

羨門
羨石

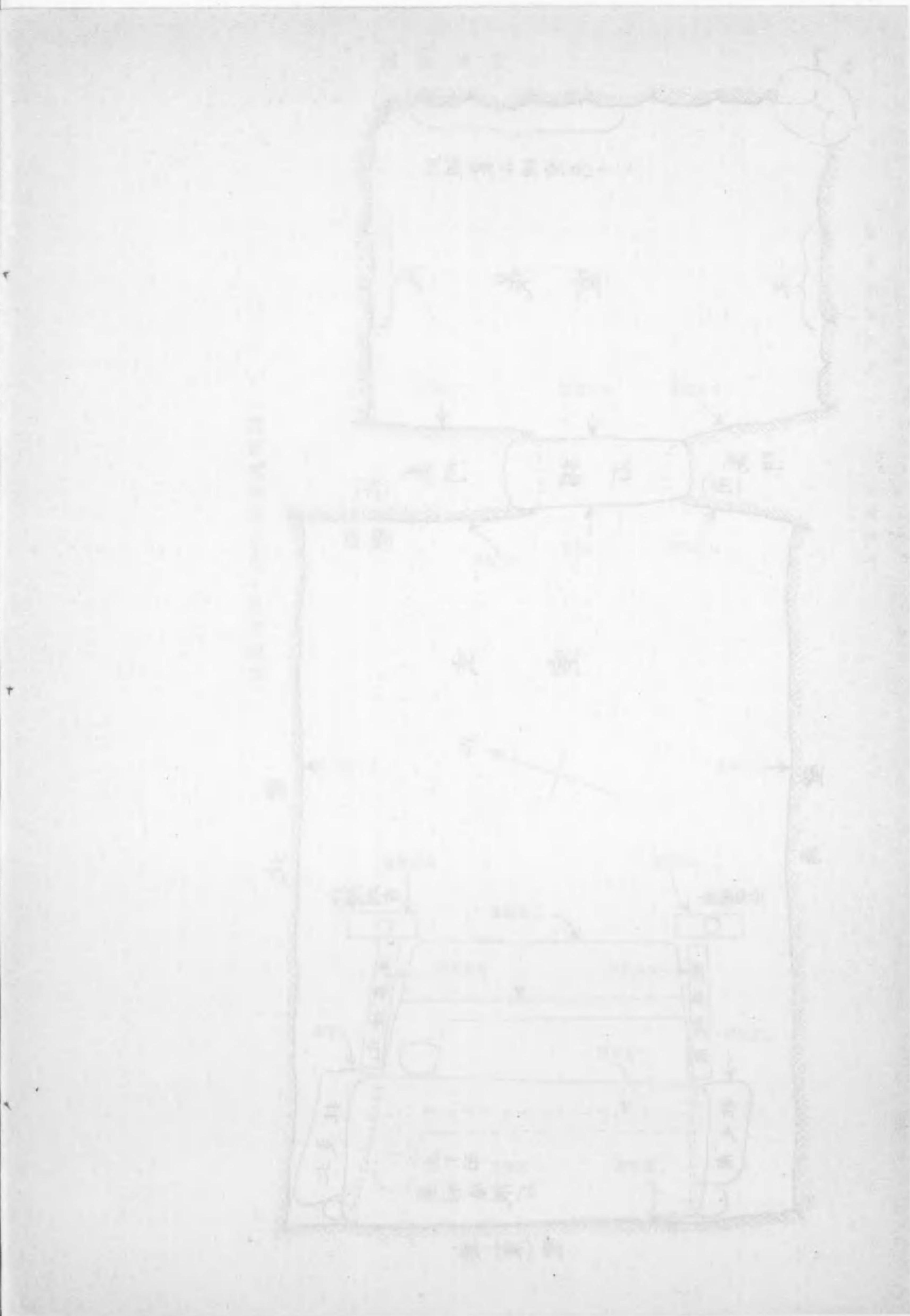
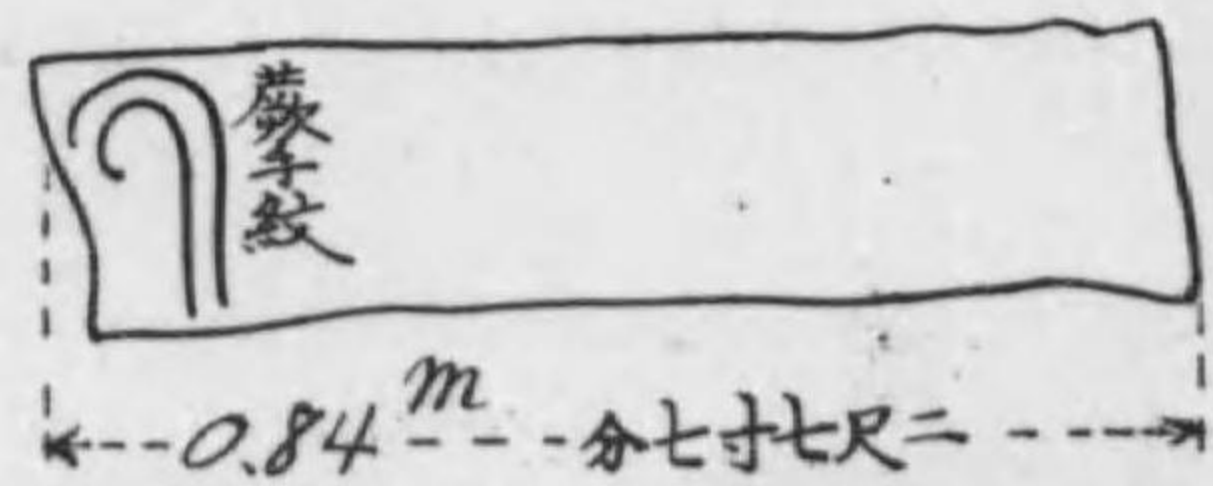
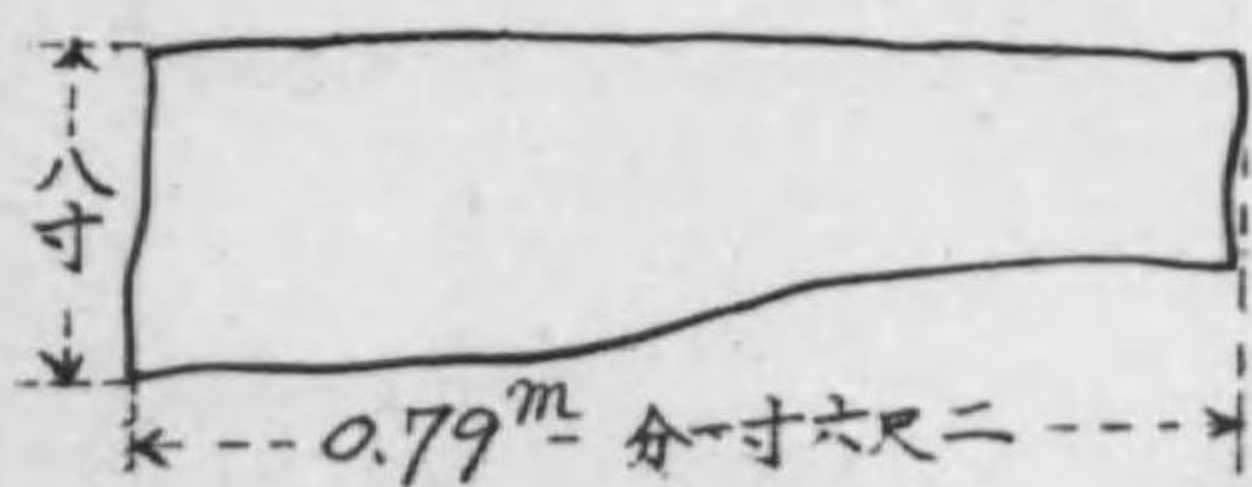
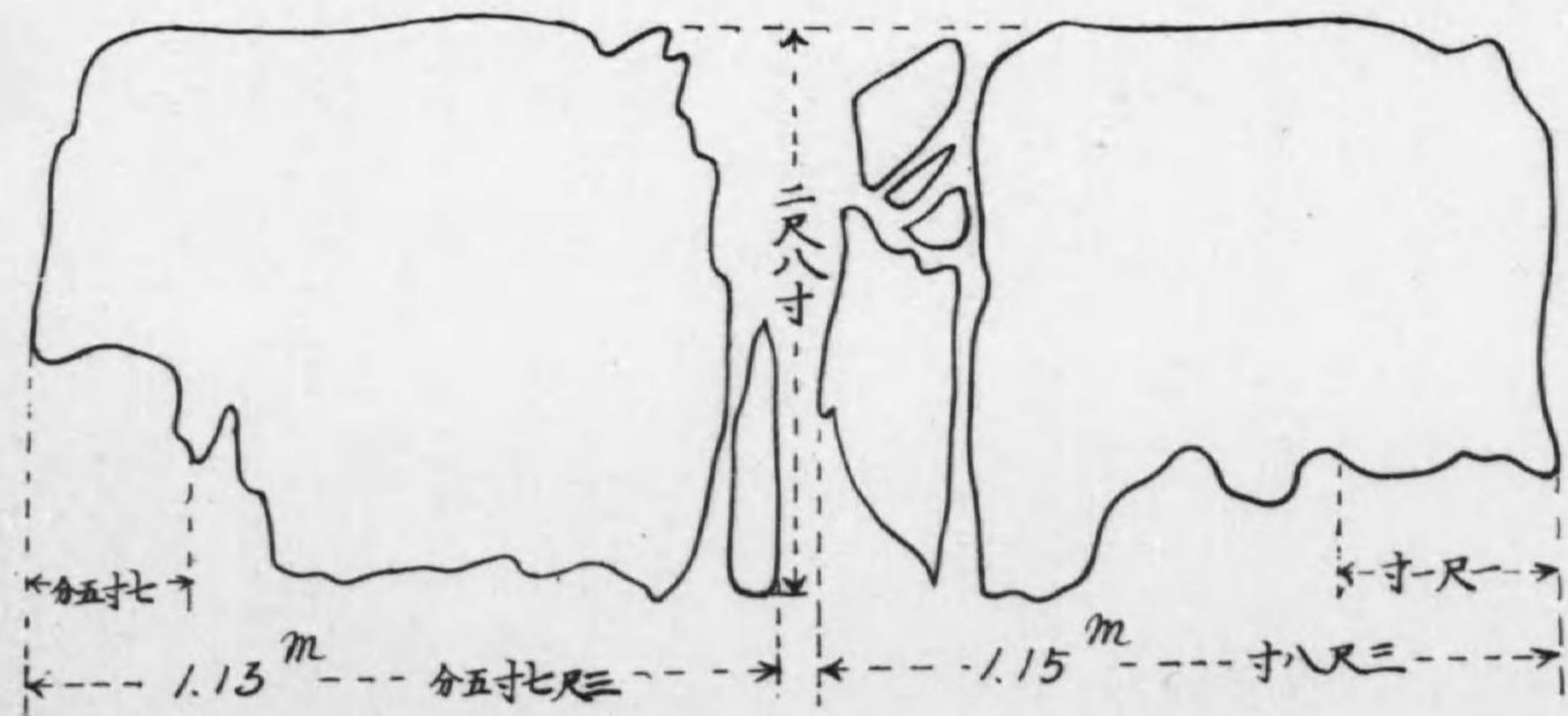
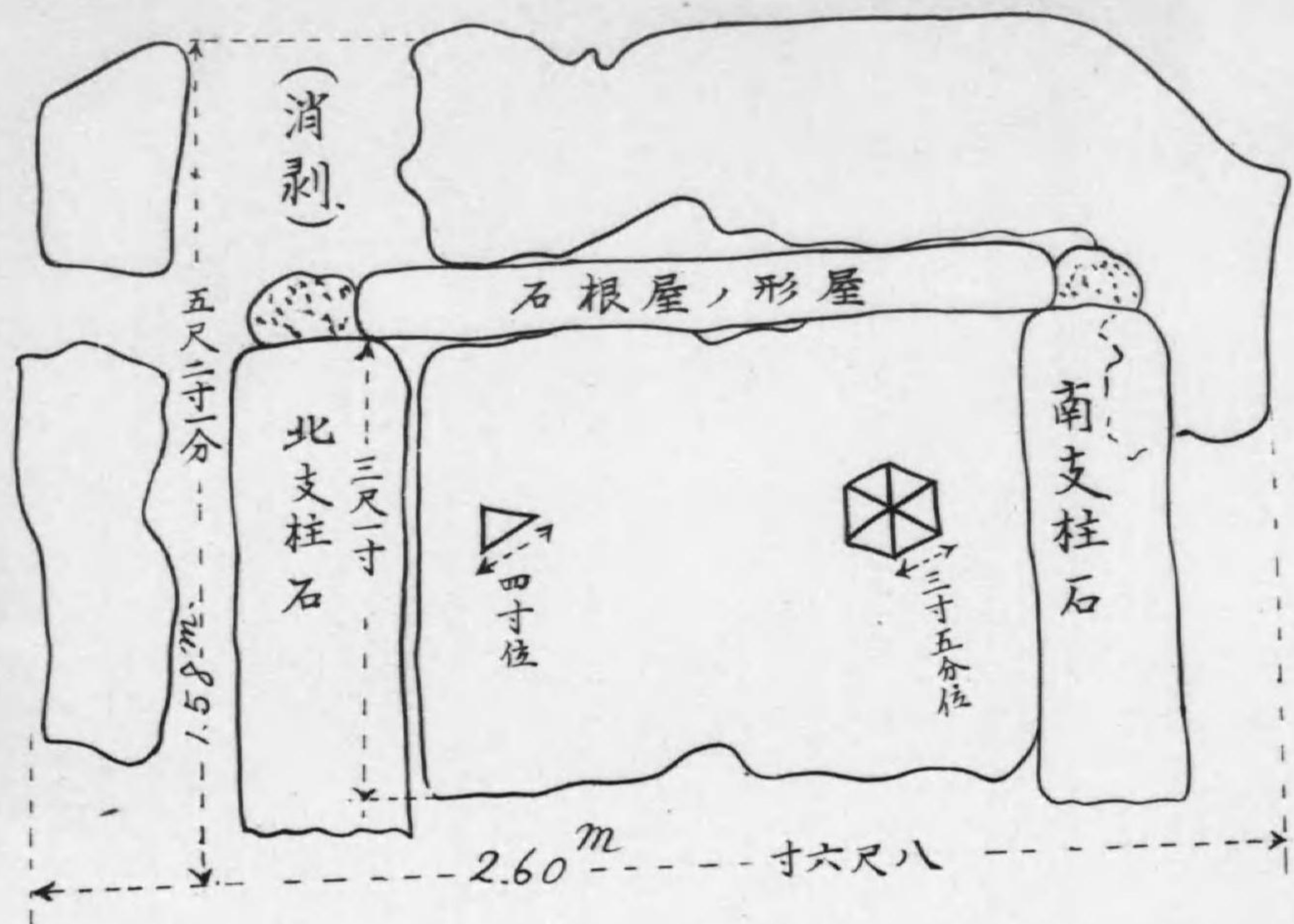
羨室

此邊是石垣壹色十公分

圖版第四

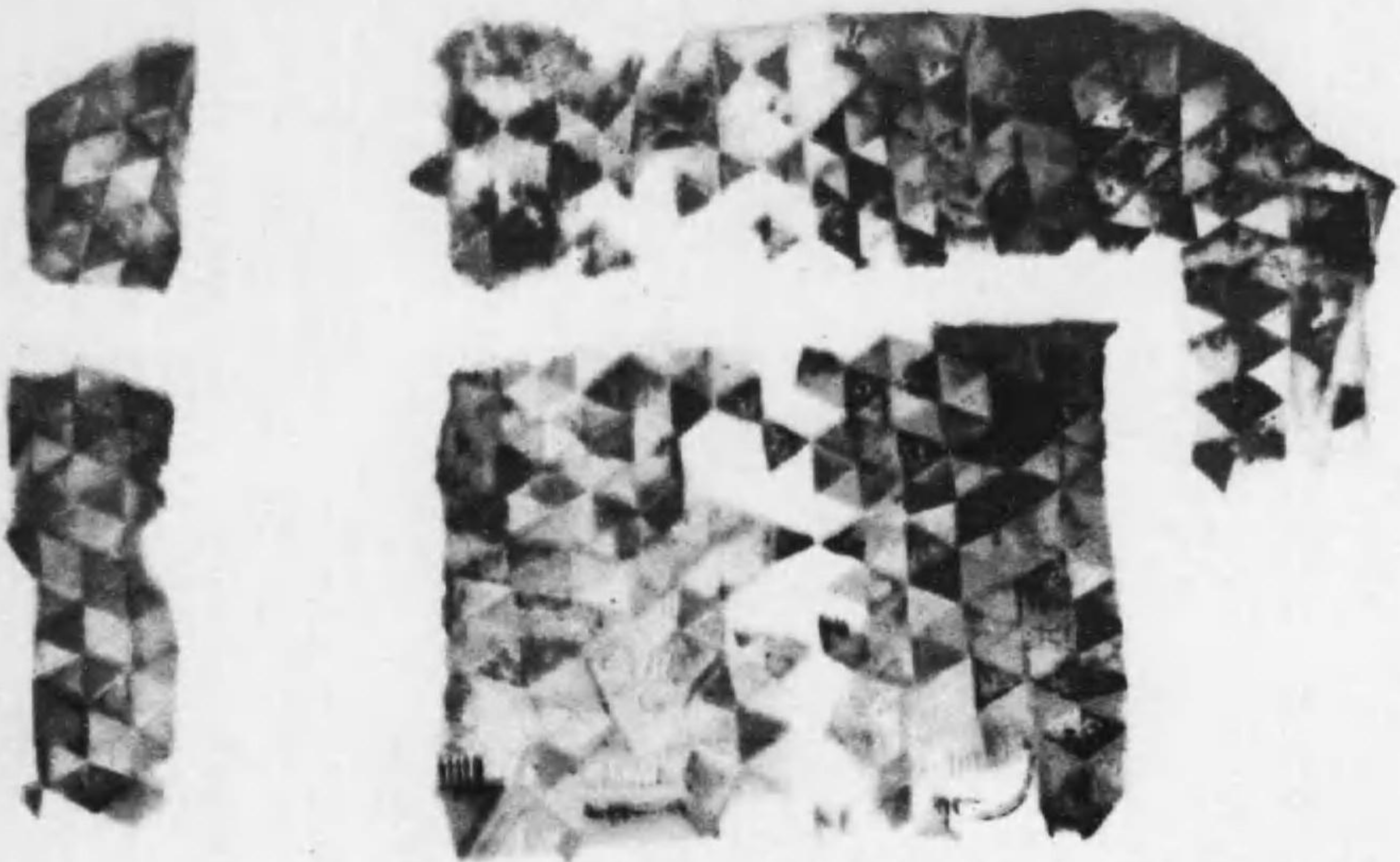
前王塚古墳

發掘報告



筑前王塚古墳

裝飾壁畫



畫々壁奥室女 一四第版圖

二四第版圖

畫々壁石柱支北形屋



三四第版圖

畫々壁石柱支南形屋



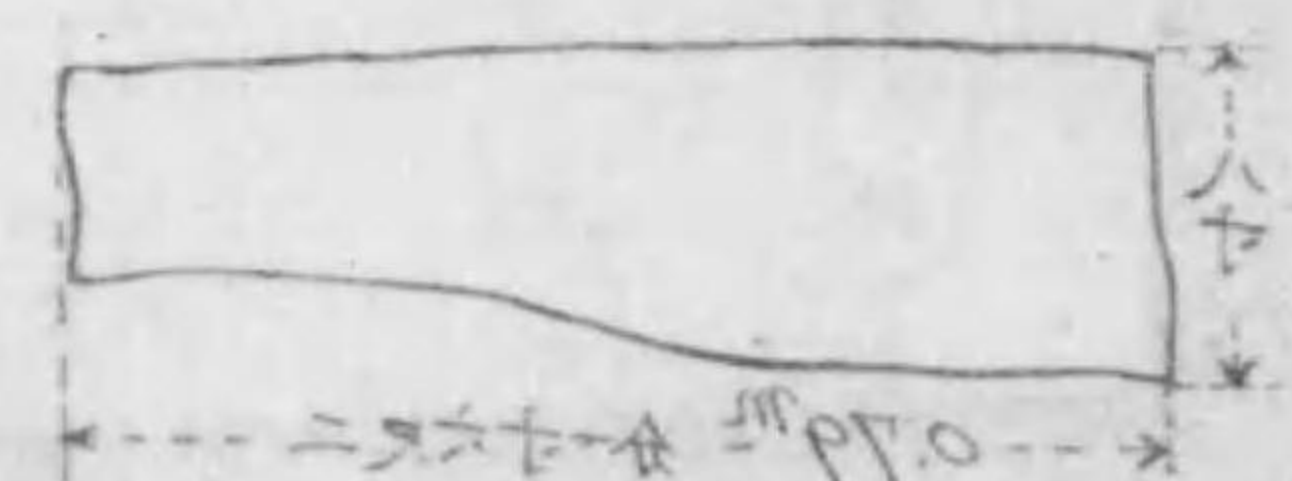
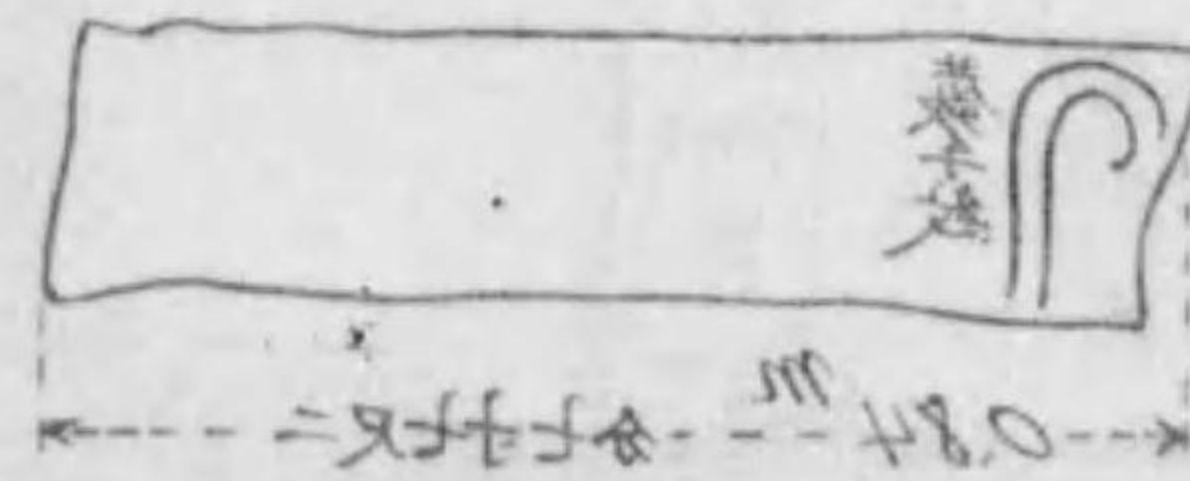
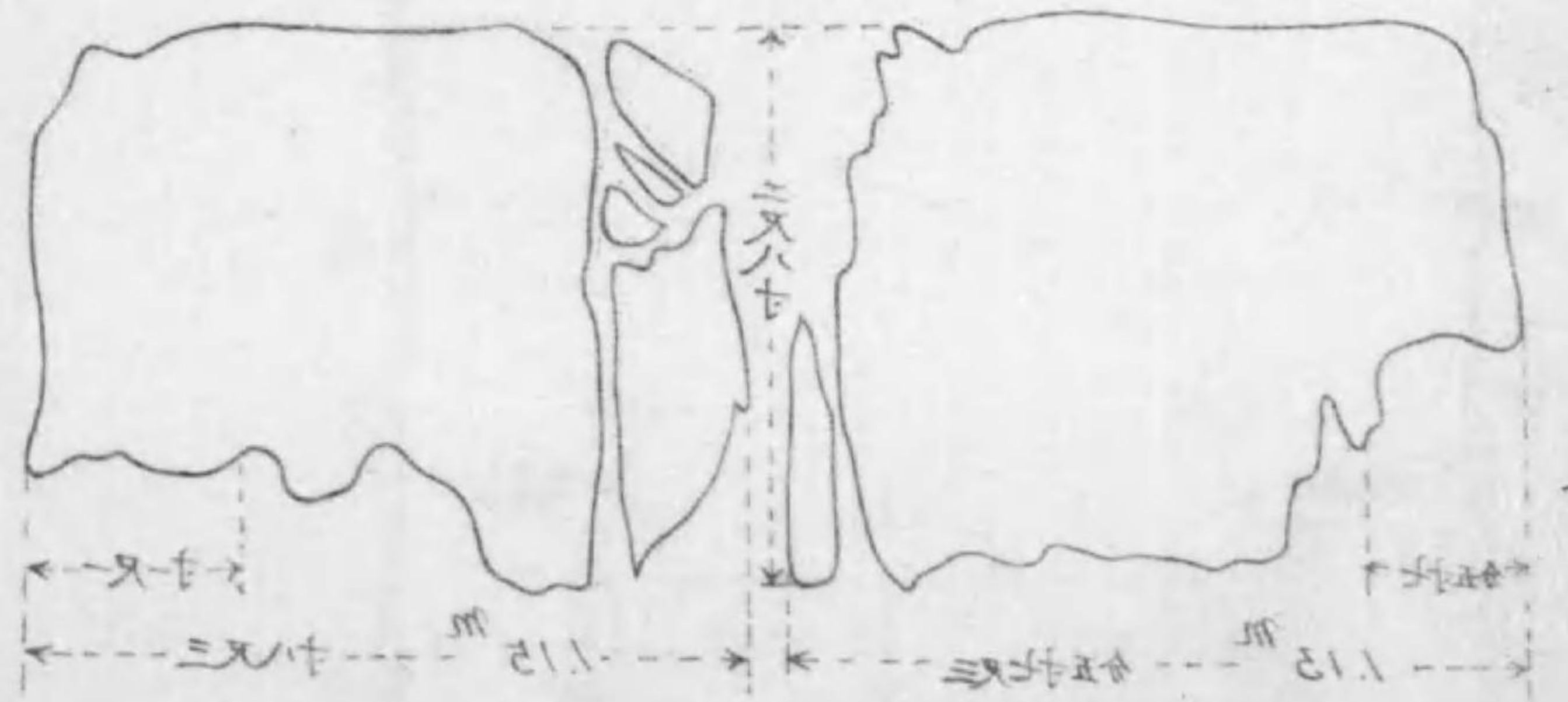
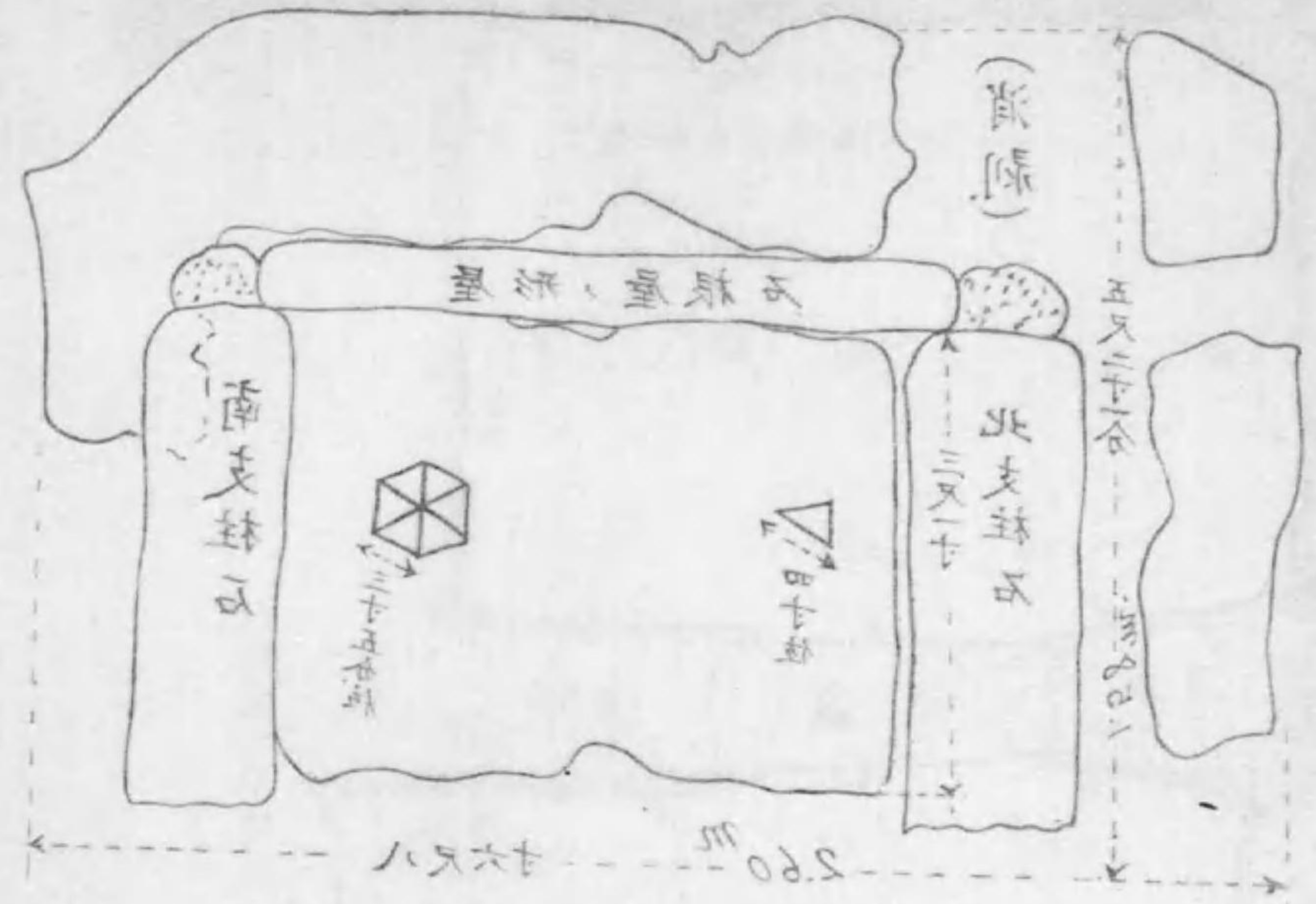
四四第版圖

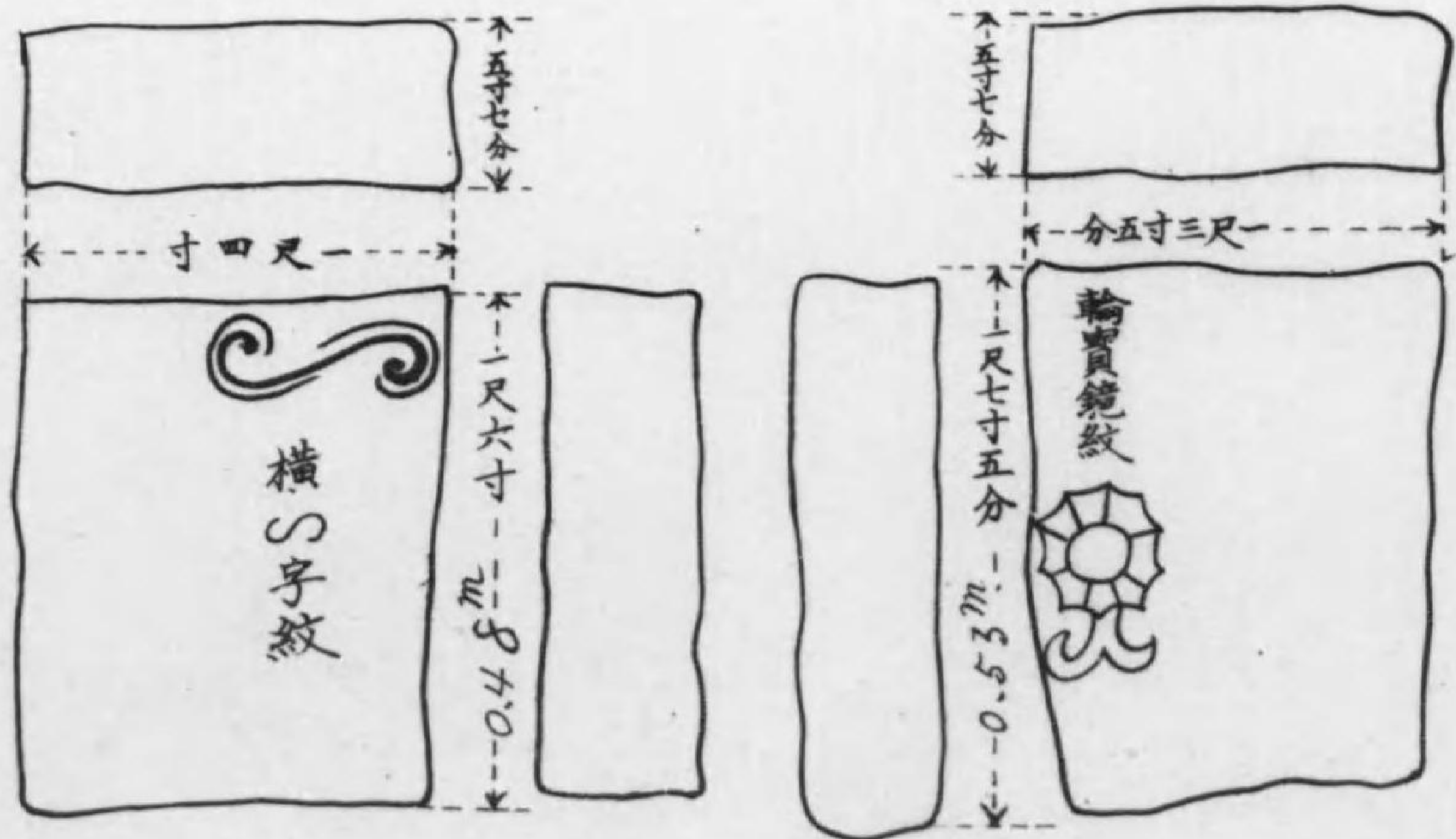
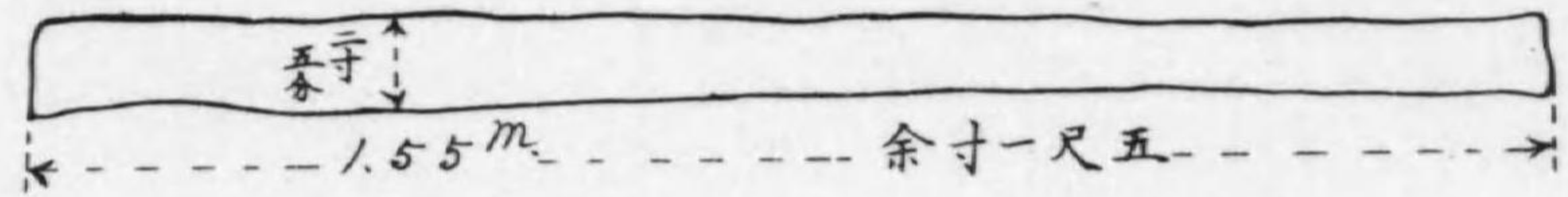
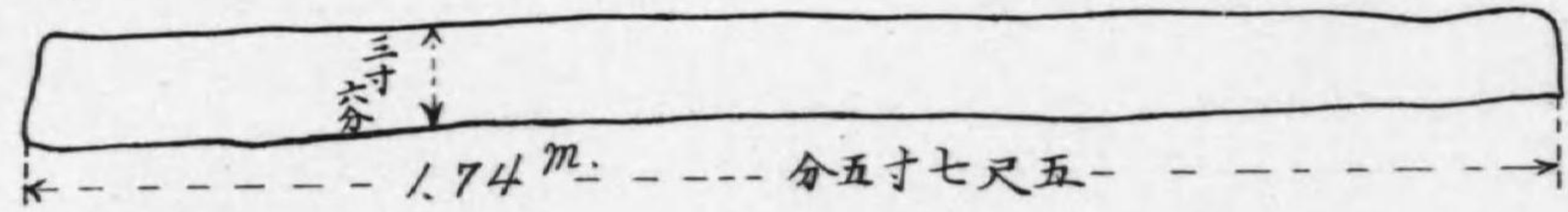
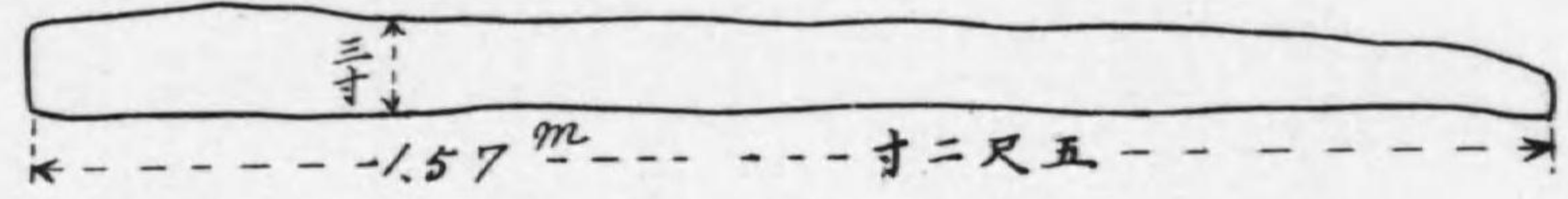
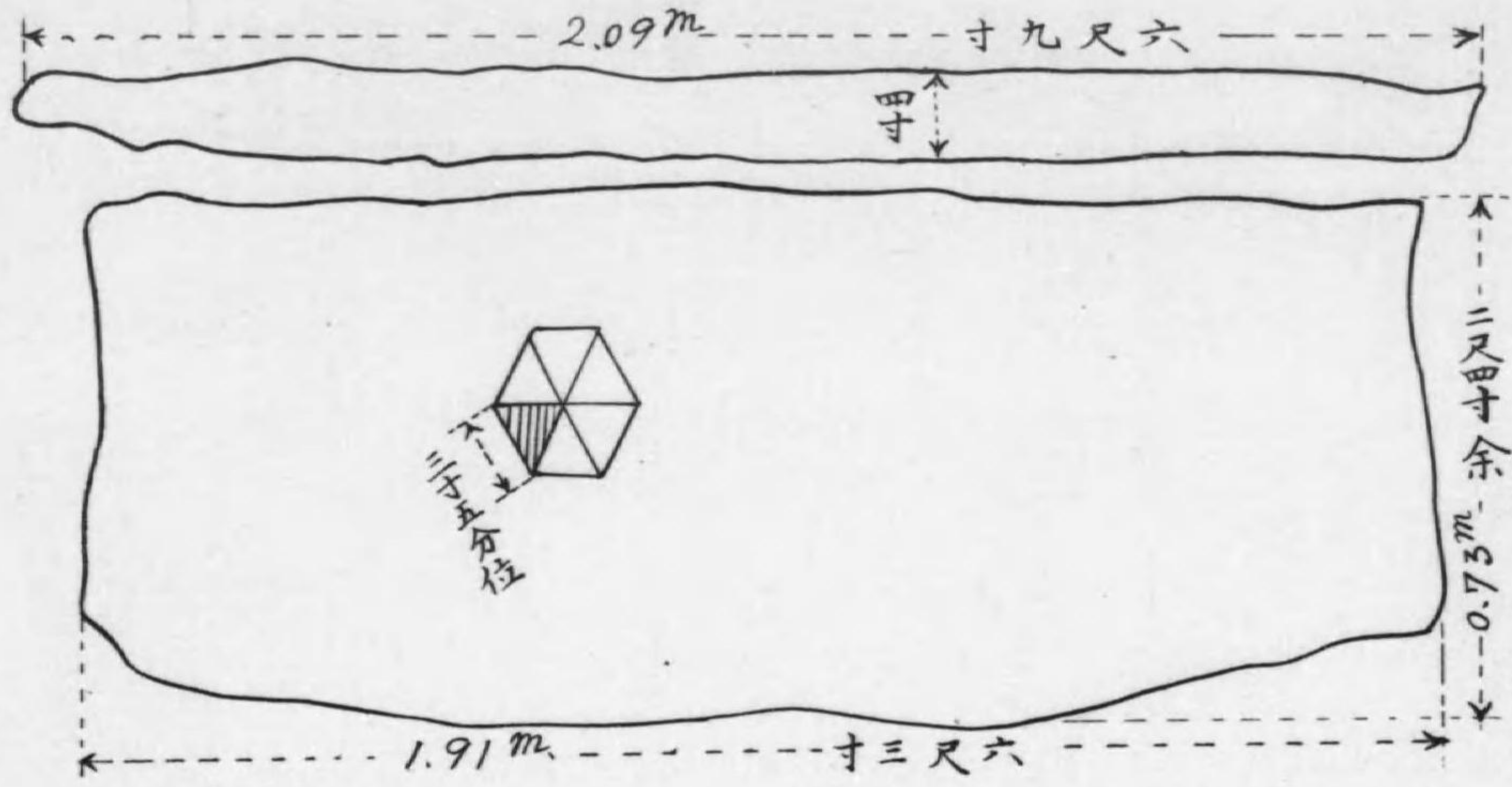
畫面內石風屏枕北

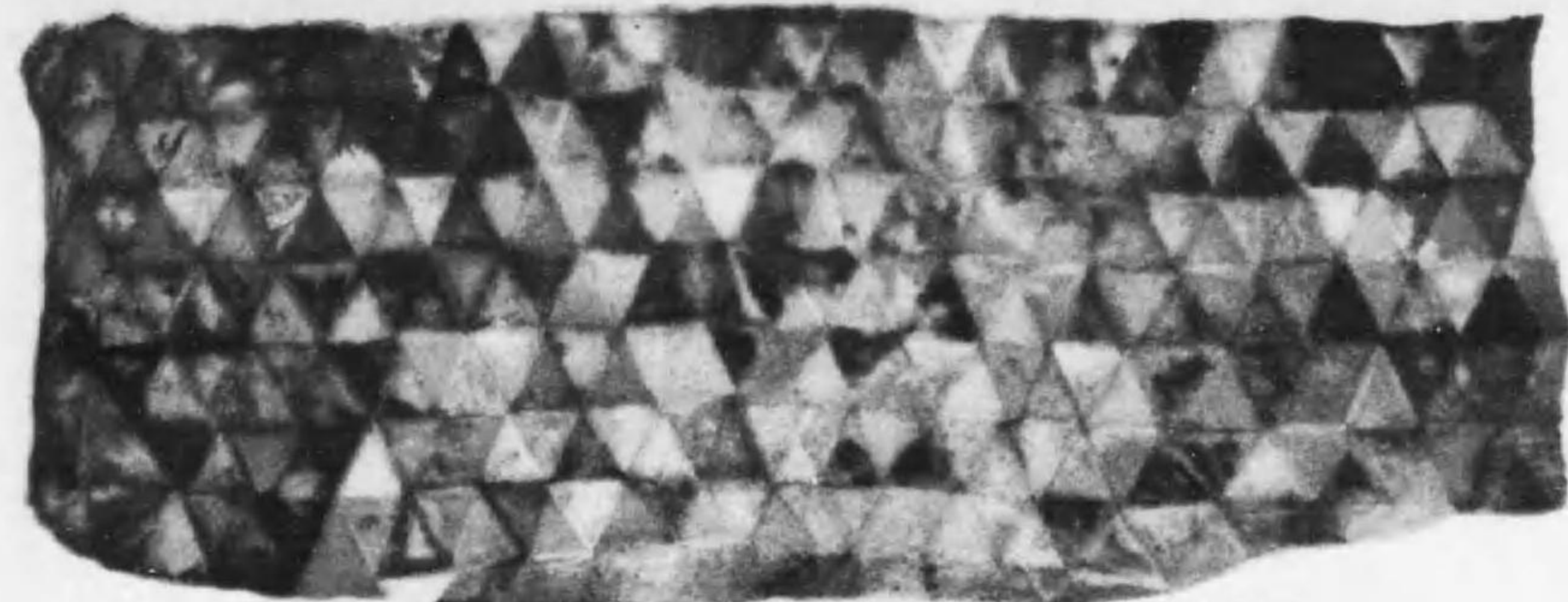


五四第版圖

畫面內石風屏枕南







圖版第四六 屋形屋根石下面及前緣面畫



圖版第四七 床棺仕切面畫



圖版第四八 床棺前方段面畫二



圖版第四九



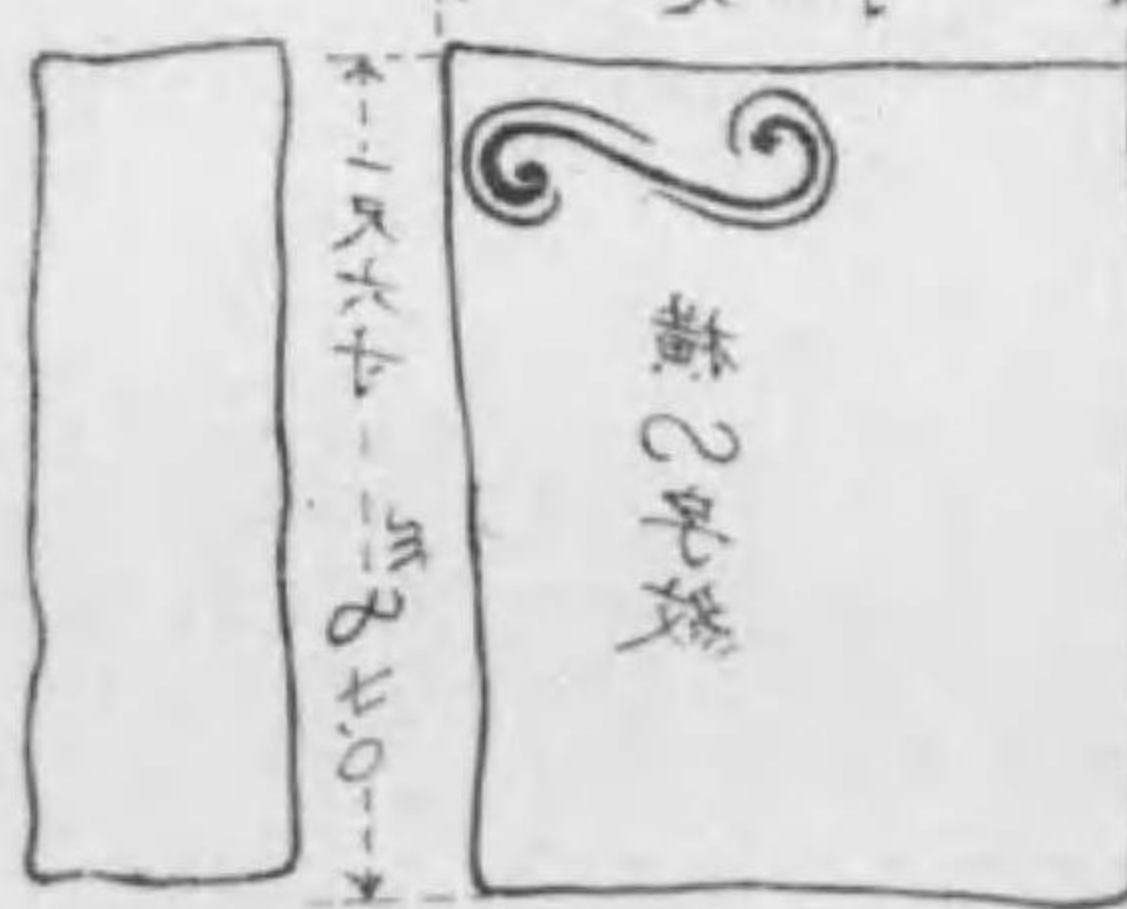
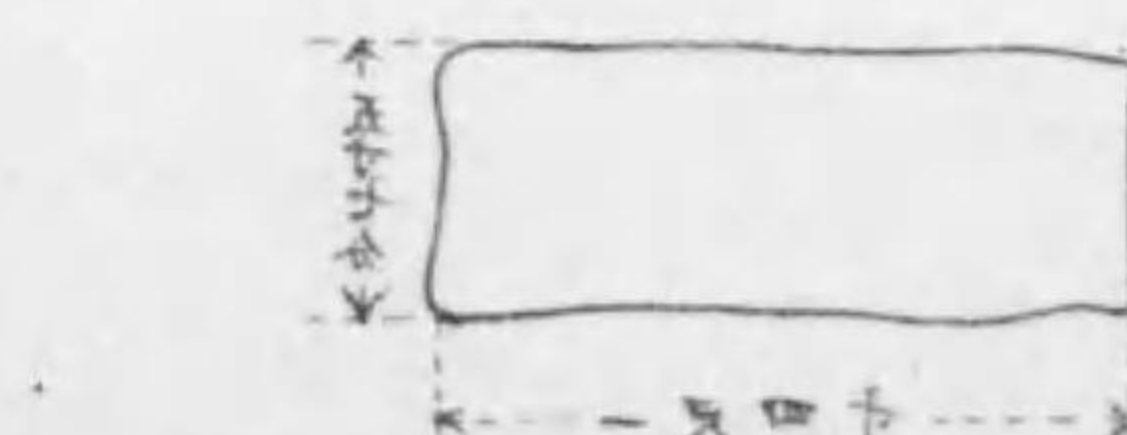
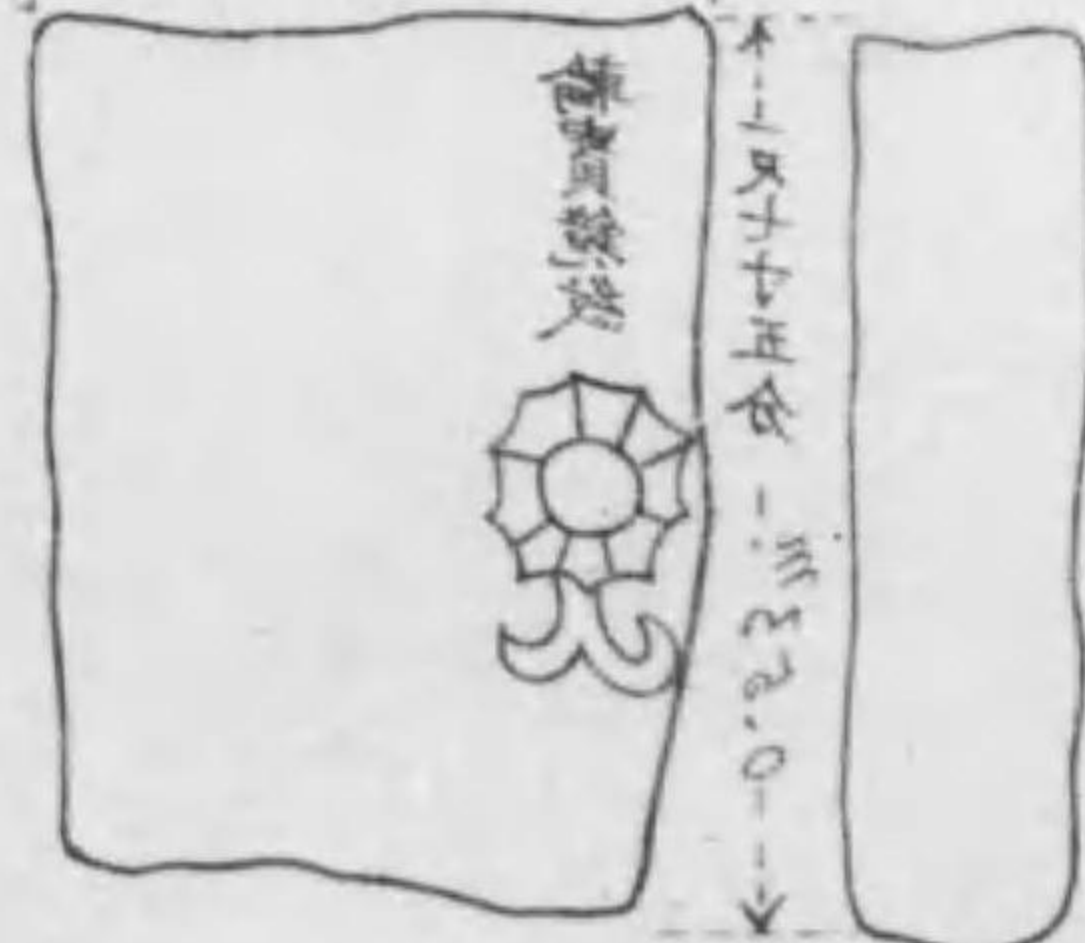
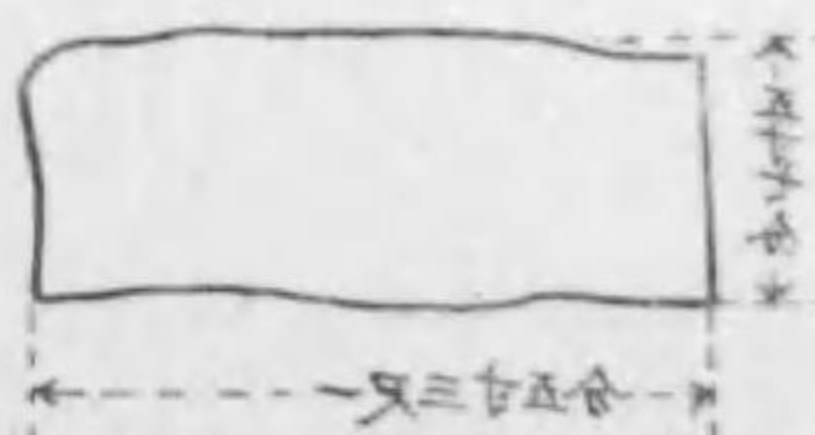
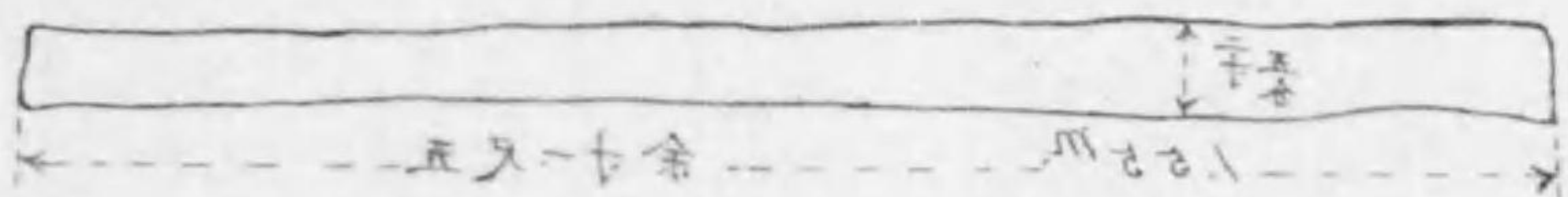
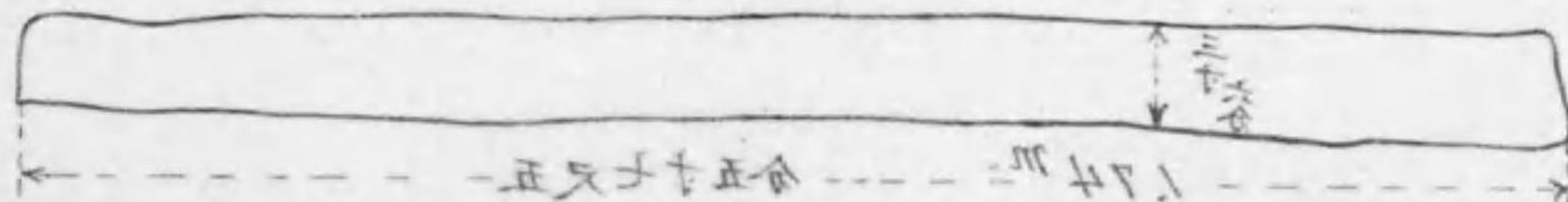
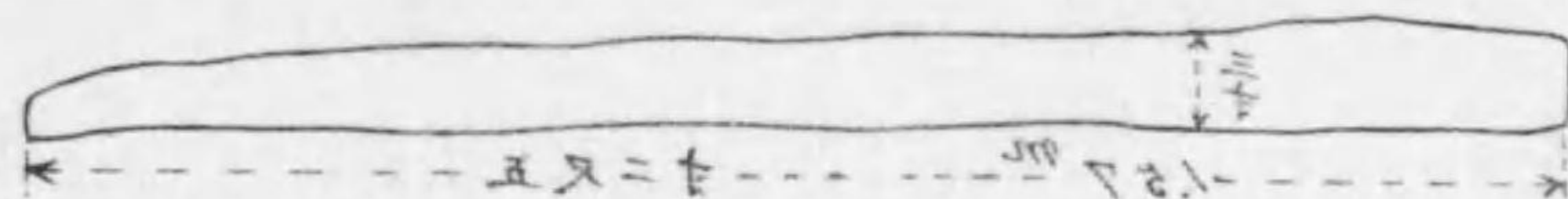
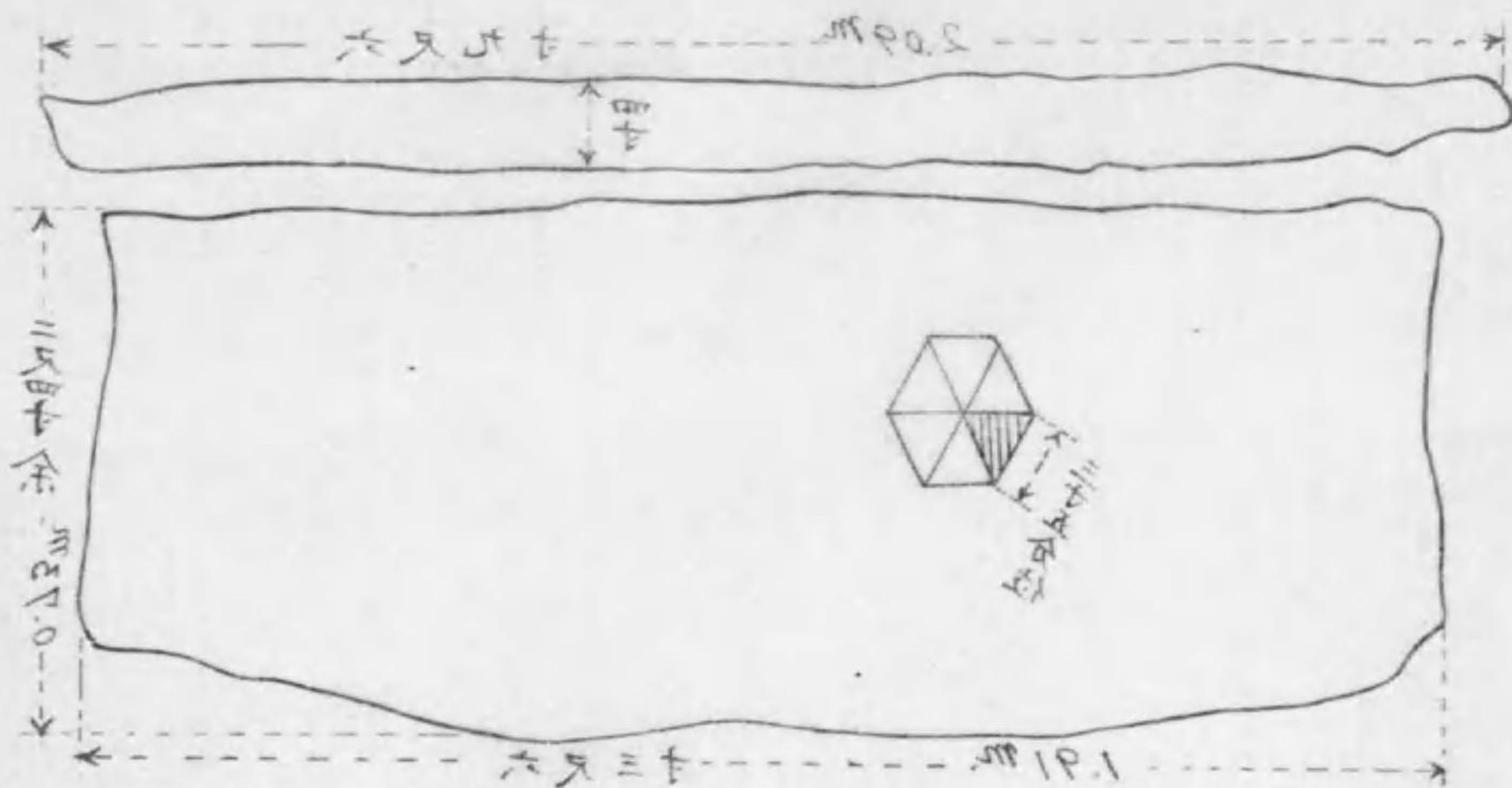
北燈明臺ノ畫

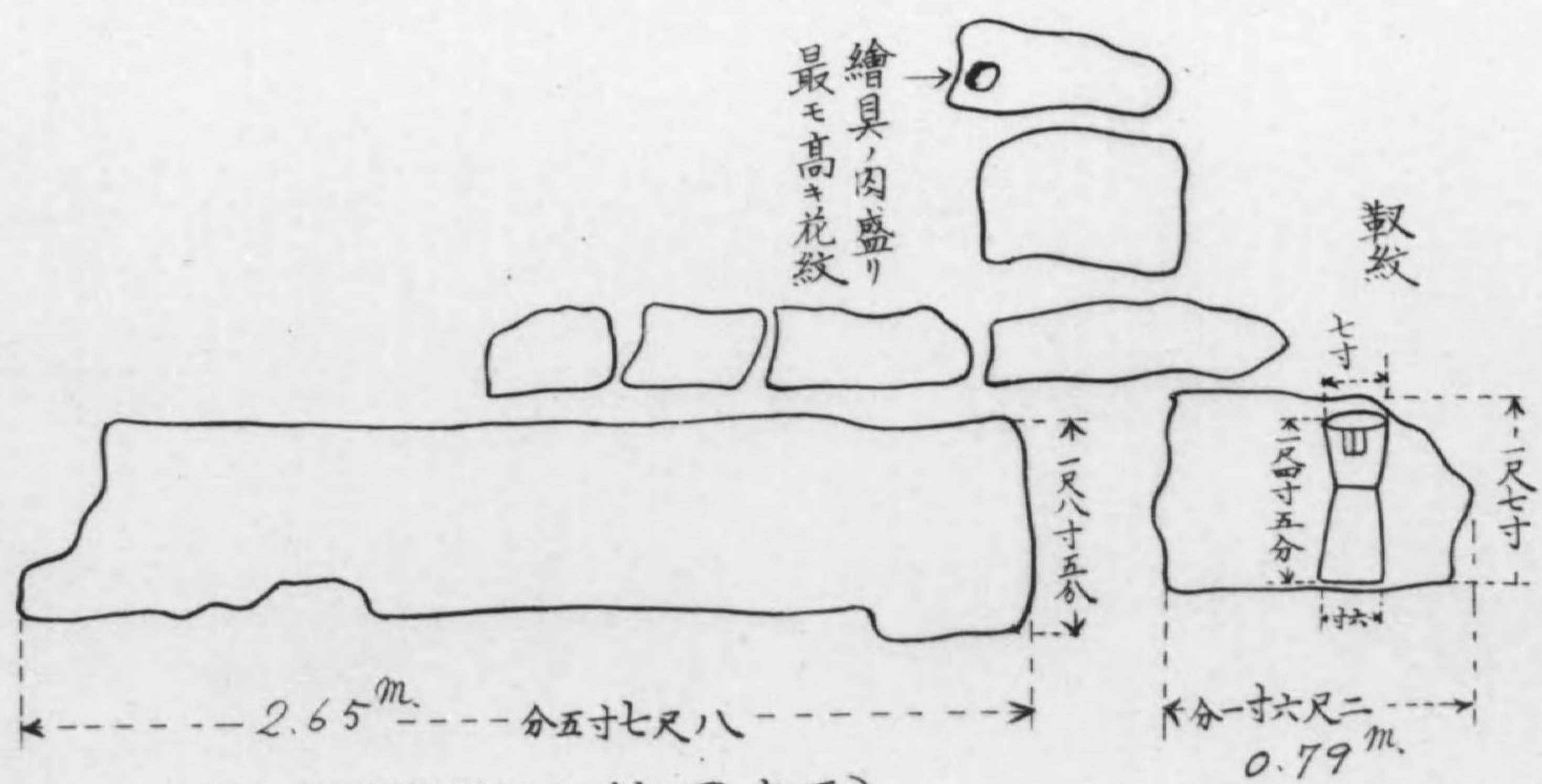
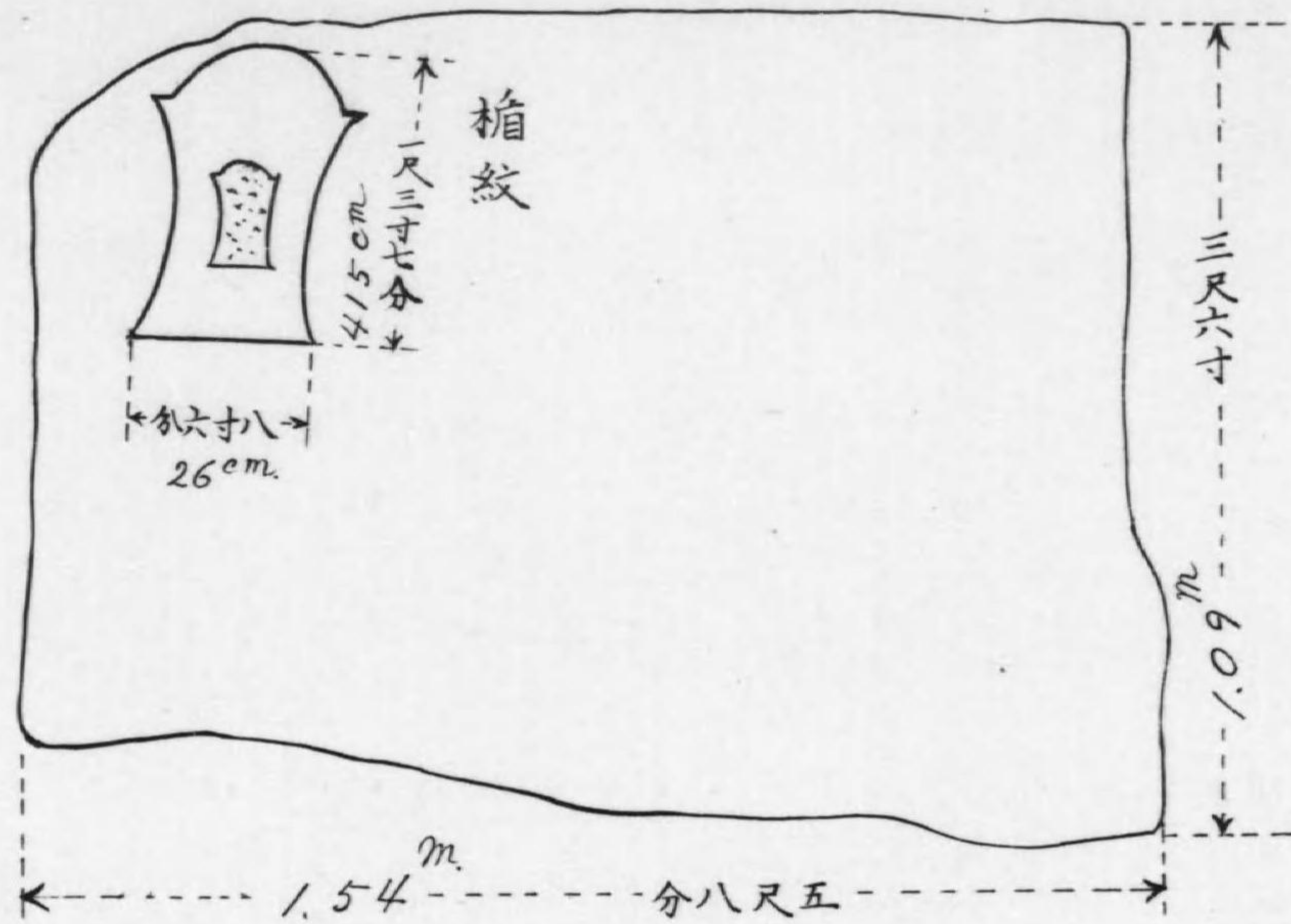


圖版第五〇

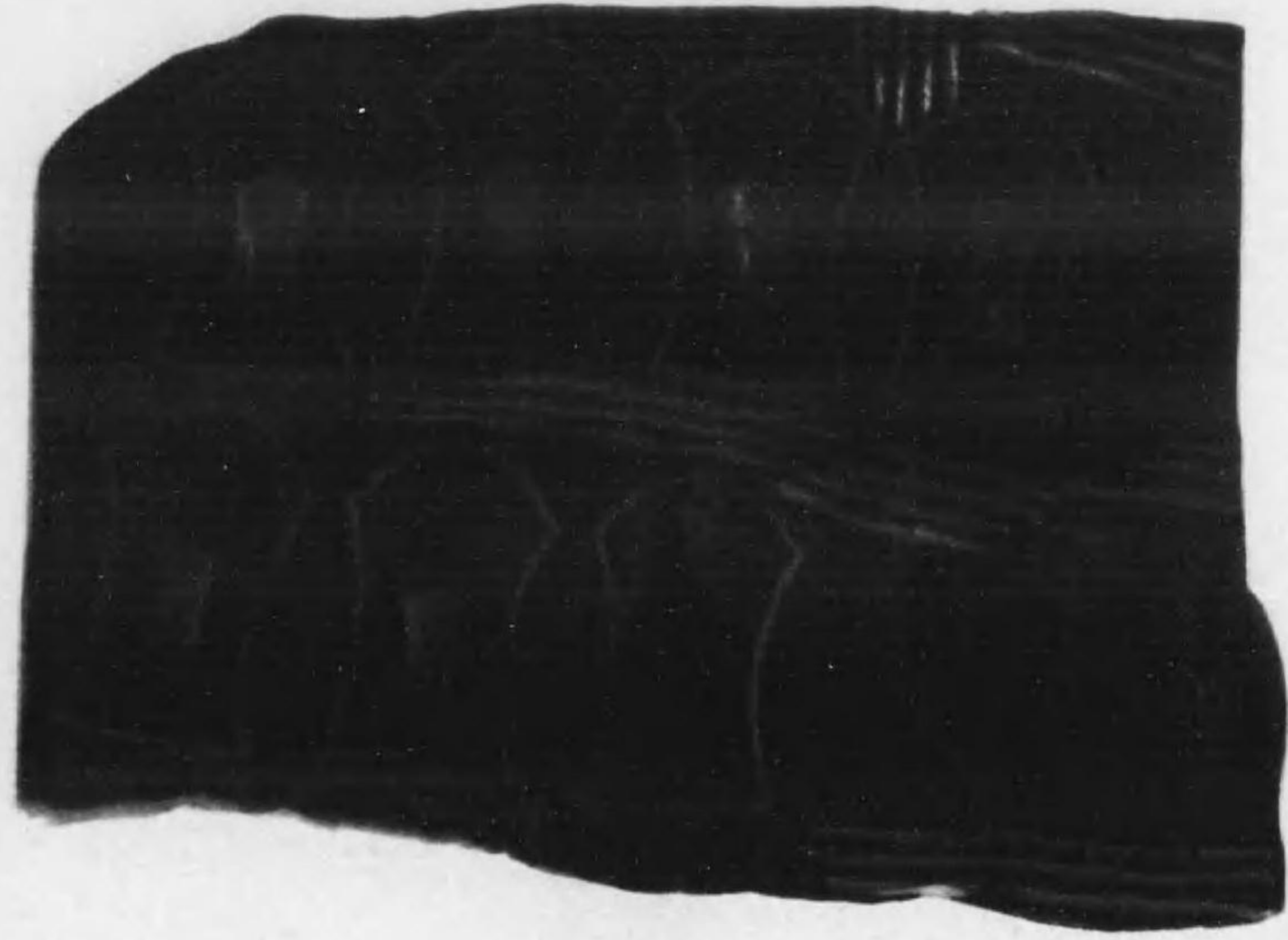


南燈明臺ノ畫



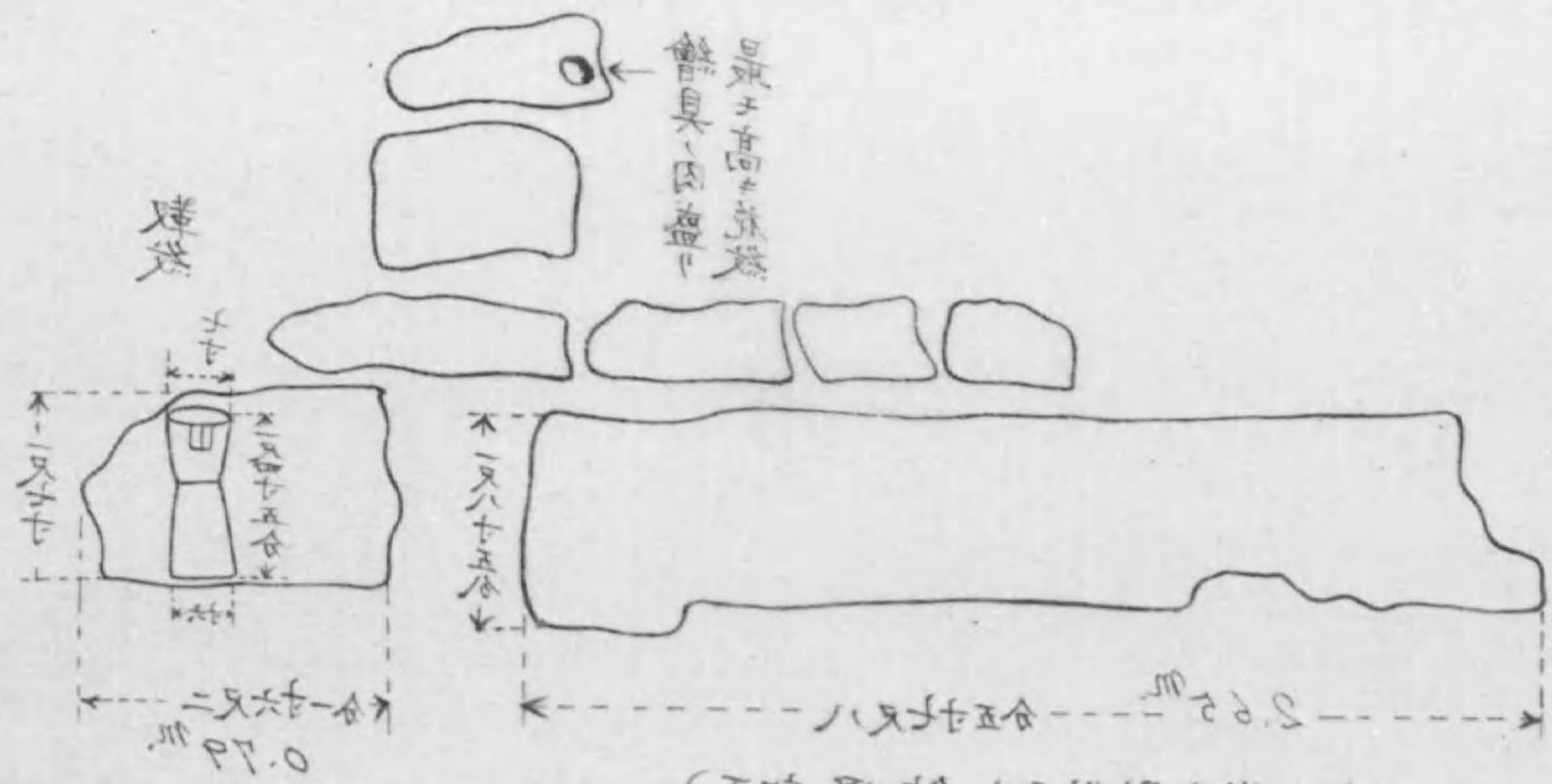
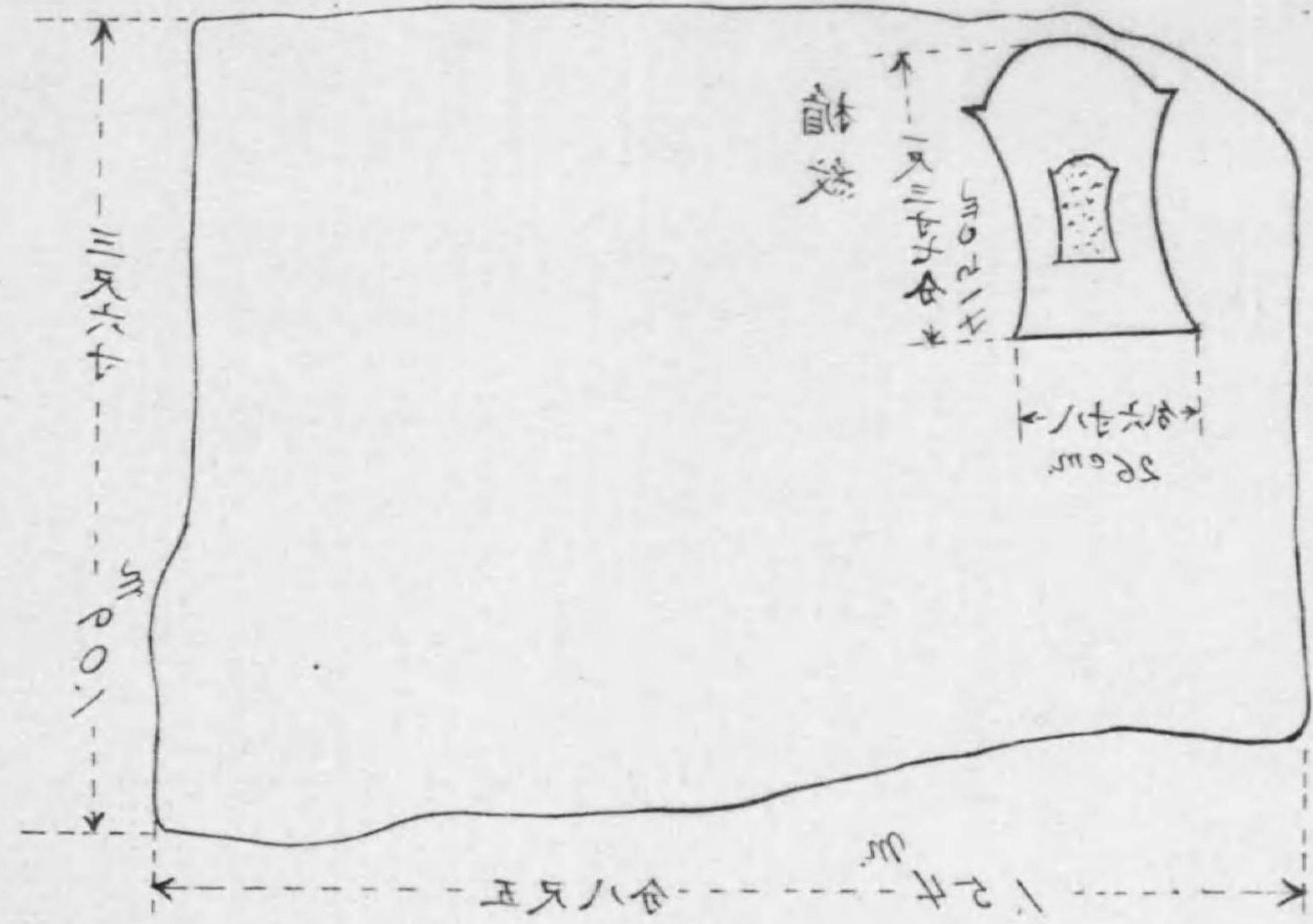
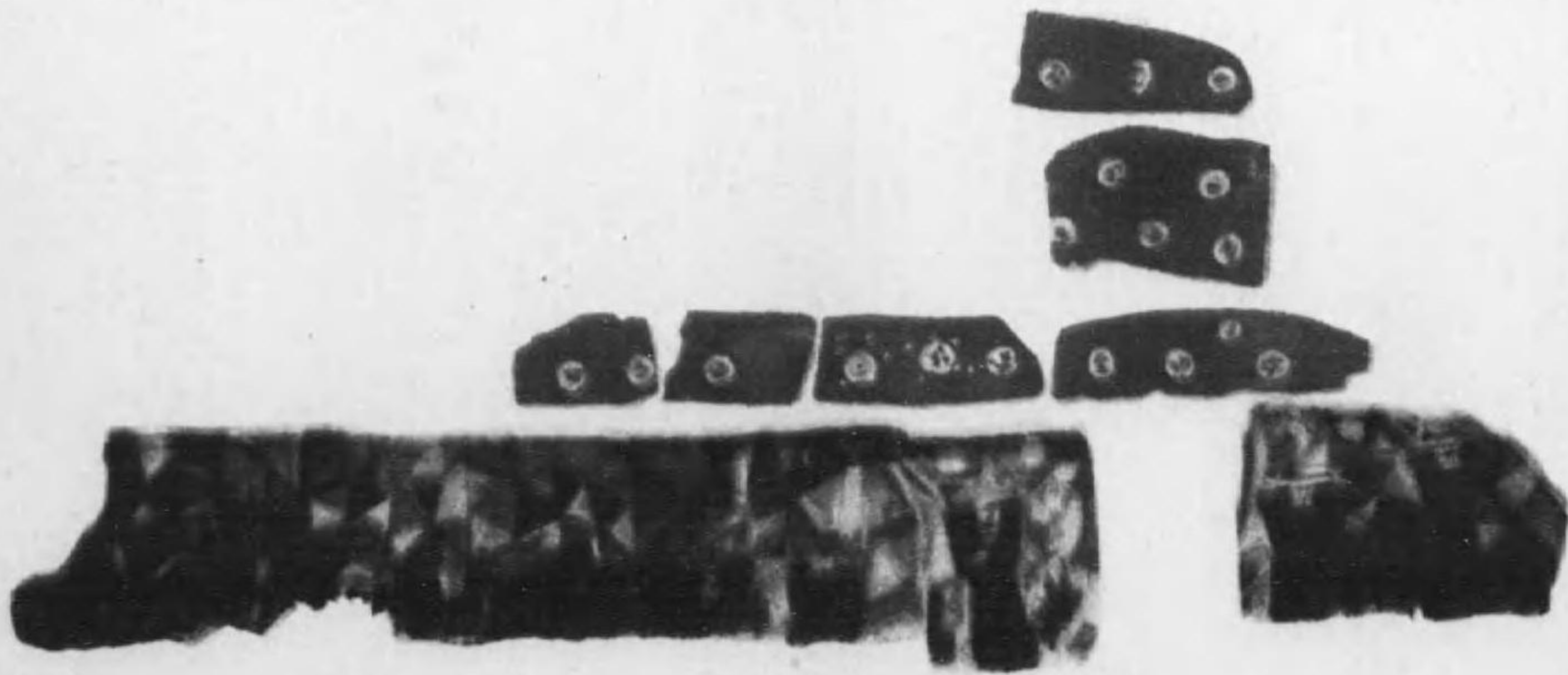


(シ難シ別判テシ蝕黒部下)



圖版第五一 女室北壁畫

圖版第五二 女室南壁畫



(不暗黒繪にて限る壁)

(い) リヨ壁門羨
分五寸六尺一

底面ヨリ七尺

上圖ノ花紋(い)ヲ示ス

分二寸二
67 mm.

↑ 二寸二分 ↓



肉盛り三分 9 mm.
肉盛り二分三厘 7 mm.

肉盛り一分五厘 5 mm.

繪具ノ肉盛り最モ高キ花紋

花紋肉盛り



石垣壁

玄室南壁面ノ花紋様

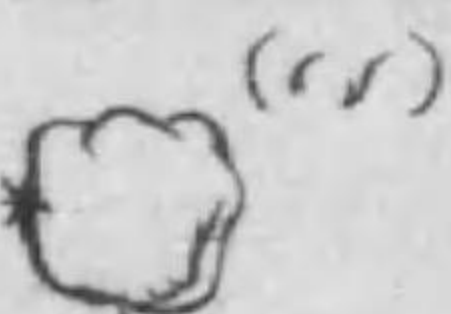
圖版第五三



繪具ノ肉盛り最モ高キ花紋

表門壁EII

一尺六寸五分



透面EIIナク



土圖、赤紫(11)ヲ示ス

二寸二分
mm 7.0



二寸二分

繪具、肉盛り最モ高キ赤紫

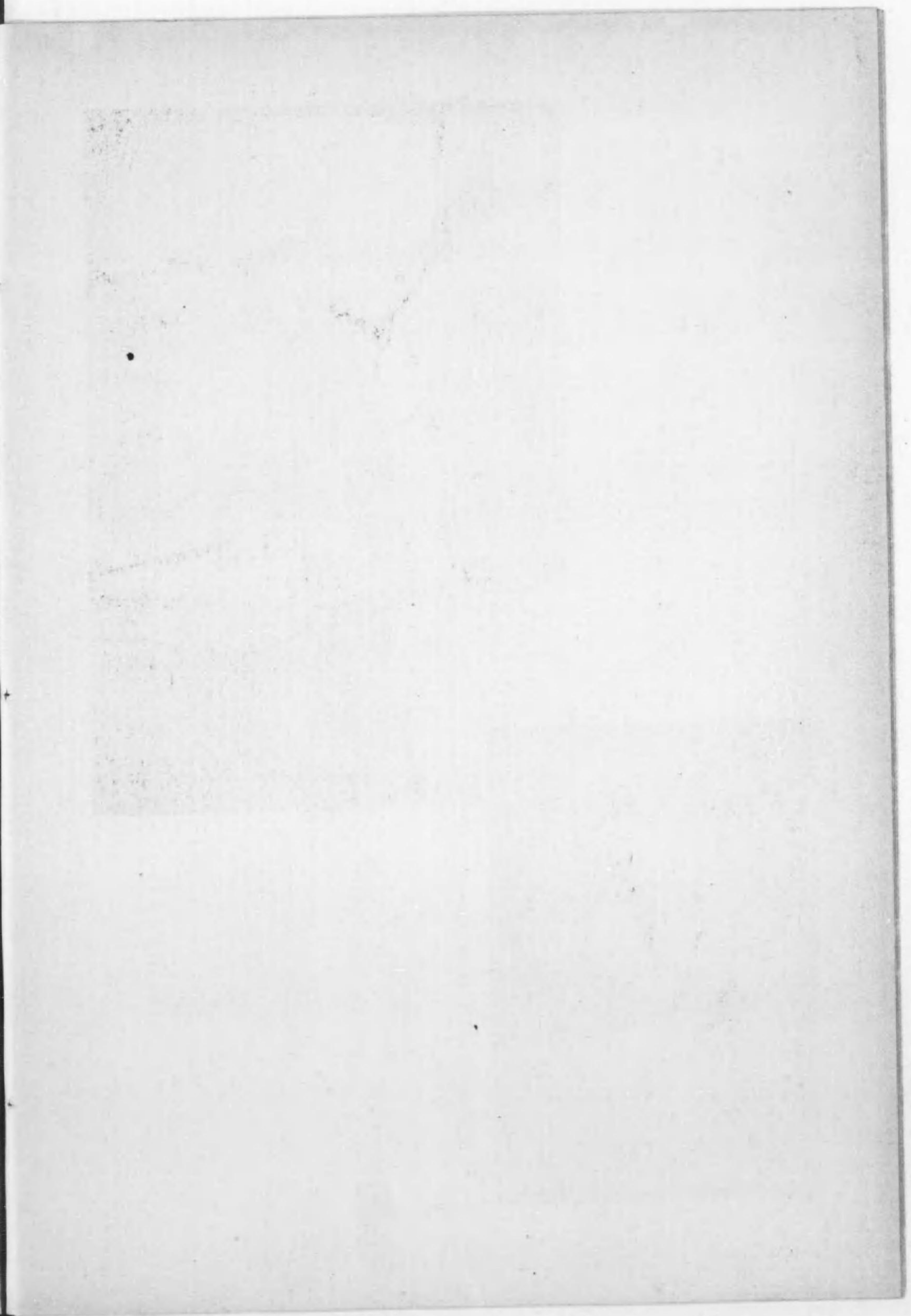
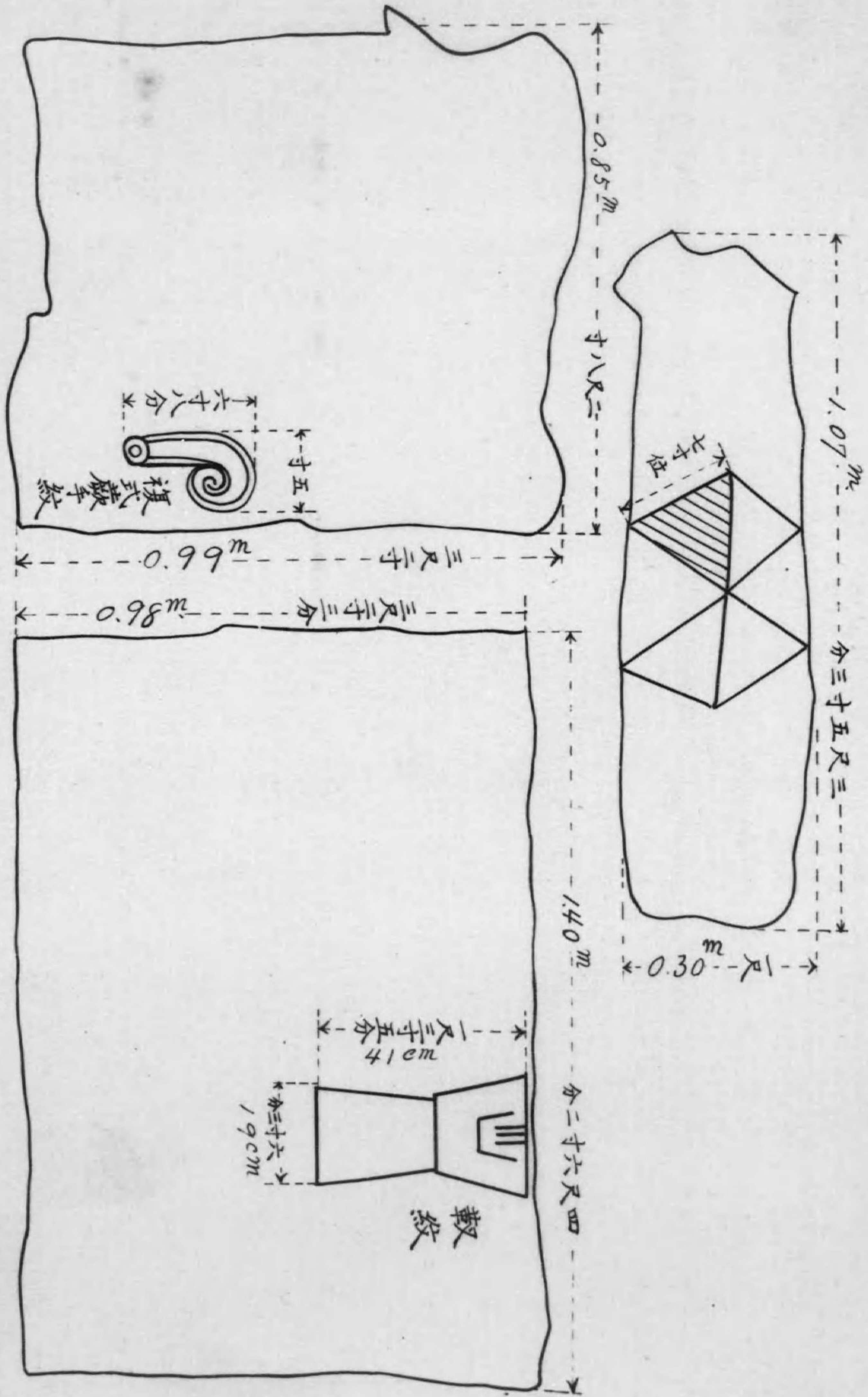
肉盛り一寸五分
mm 15

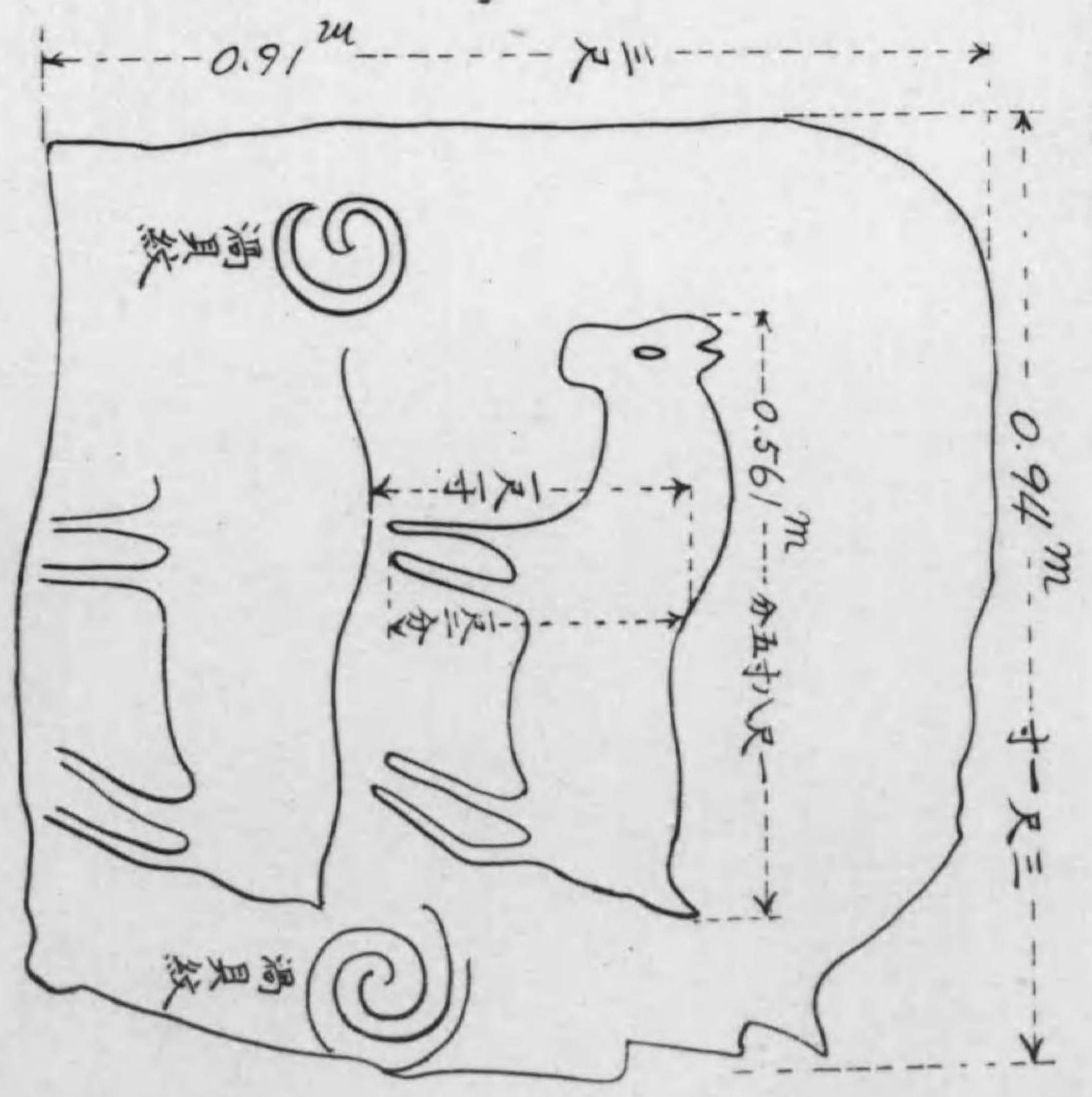
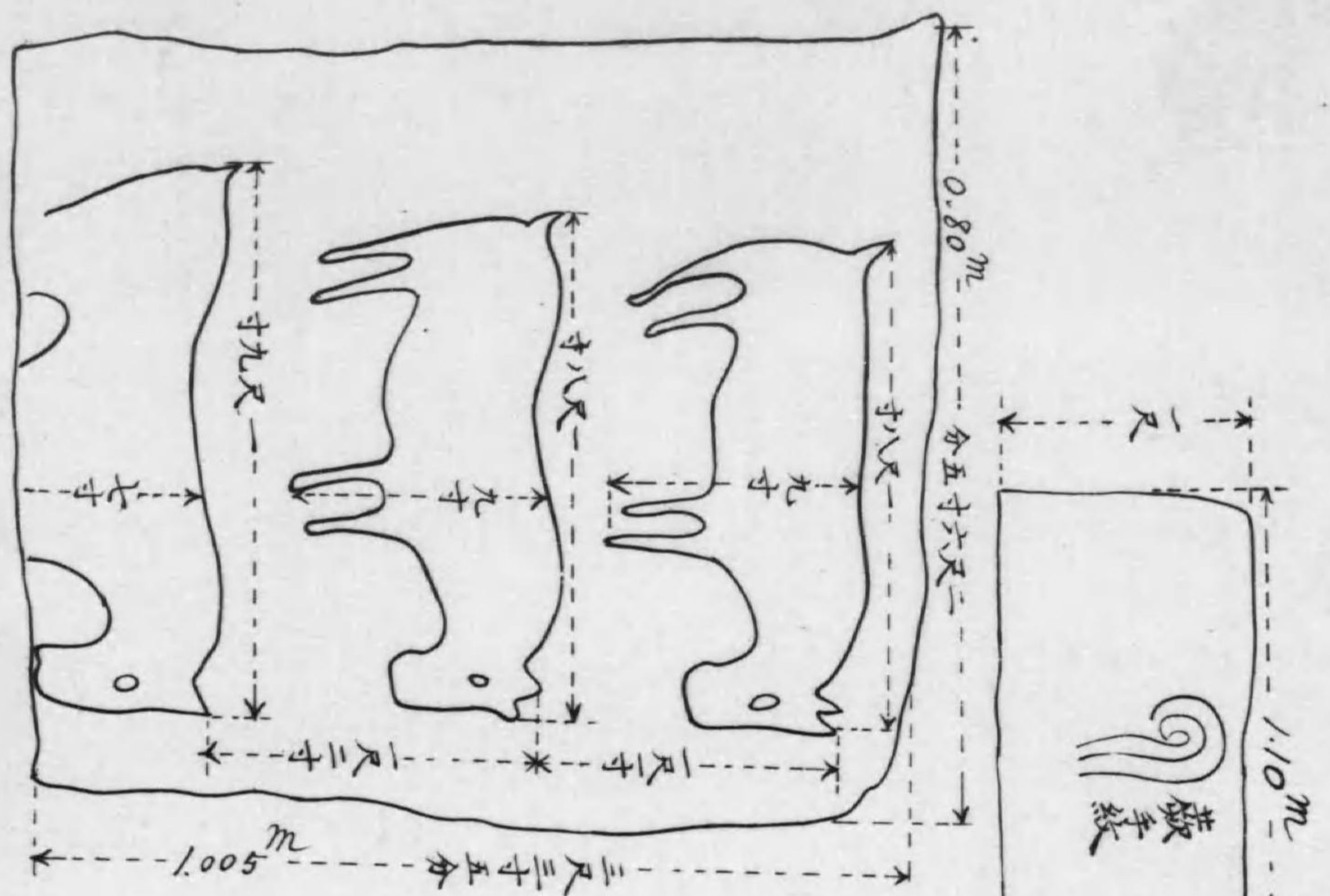
肉盛り二寸三分
mm 23

肉盛り三寸
mm 30



赤紫肉盛り





圖版第五八 美室美門南壁之畫



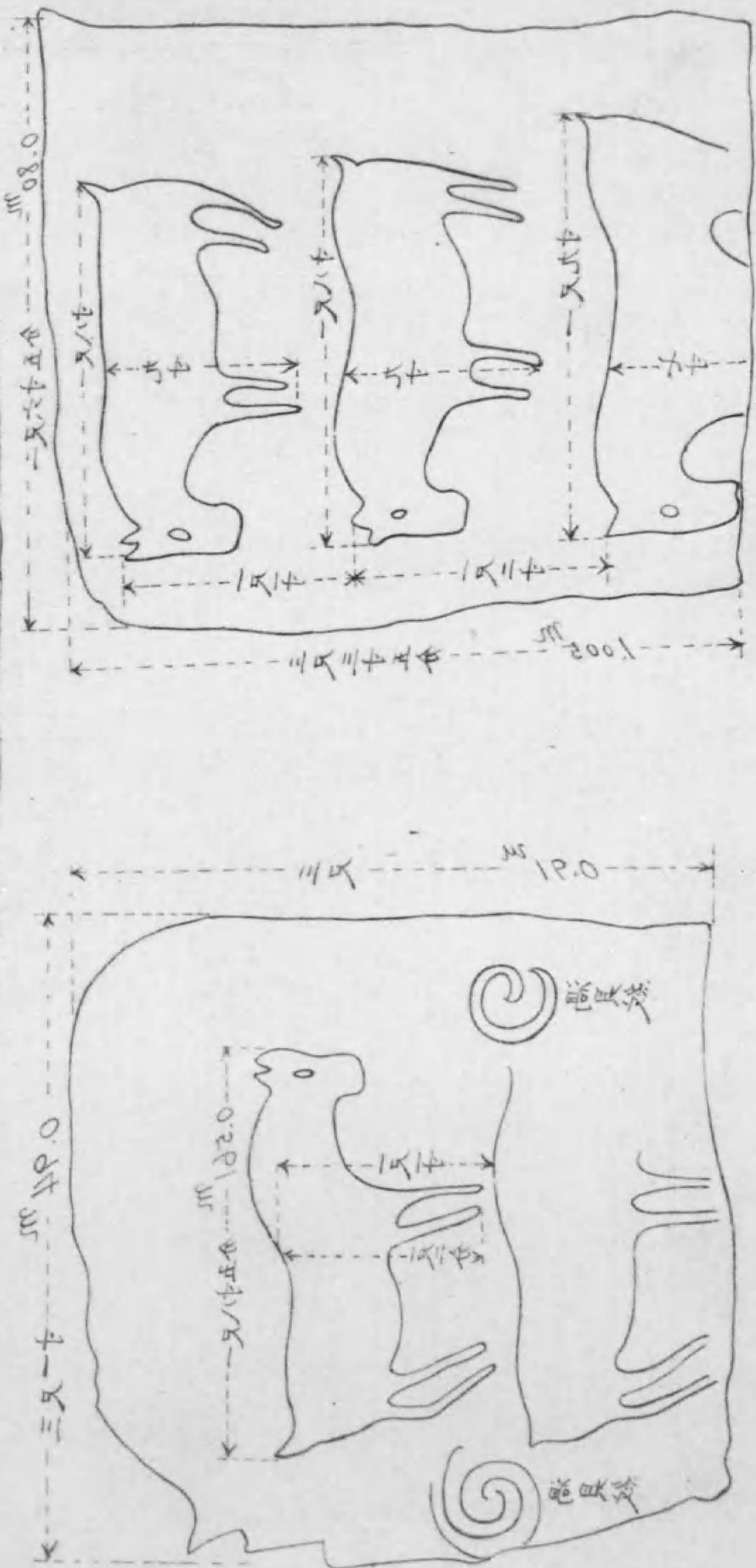
裝飾壁畫

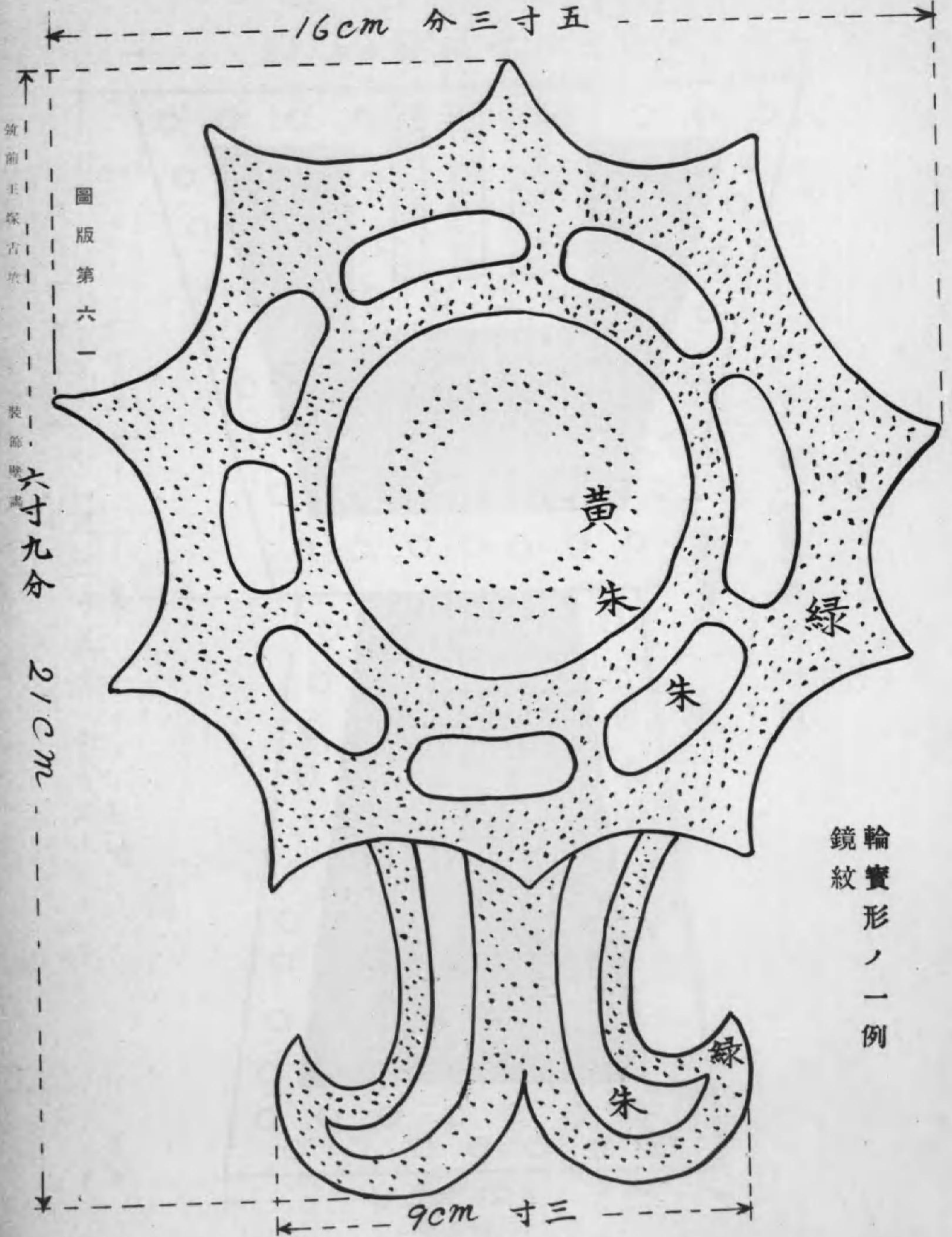
汎前王塚古墳



圖版第六〇 美室美門北壁之畫

美室美門南壁石相壁畫 九五第版圖



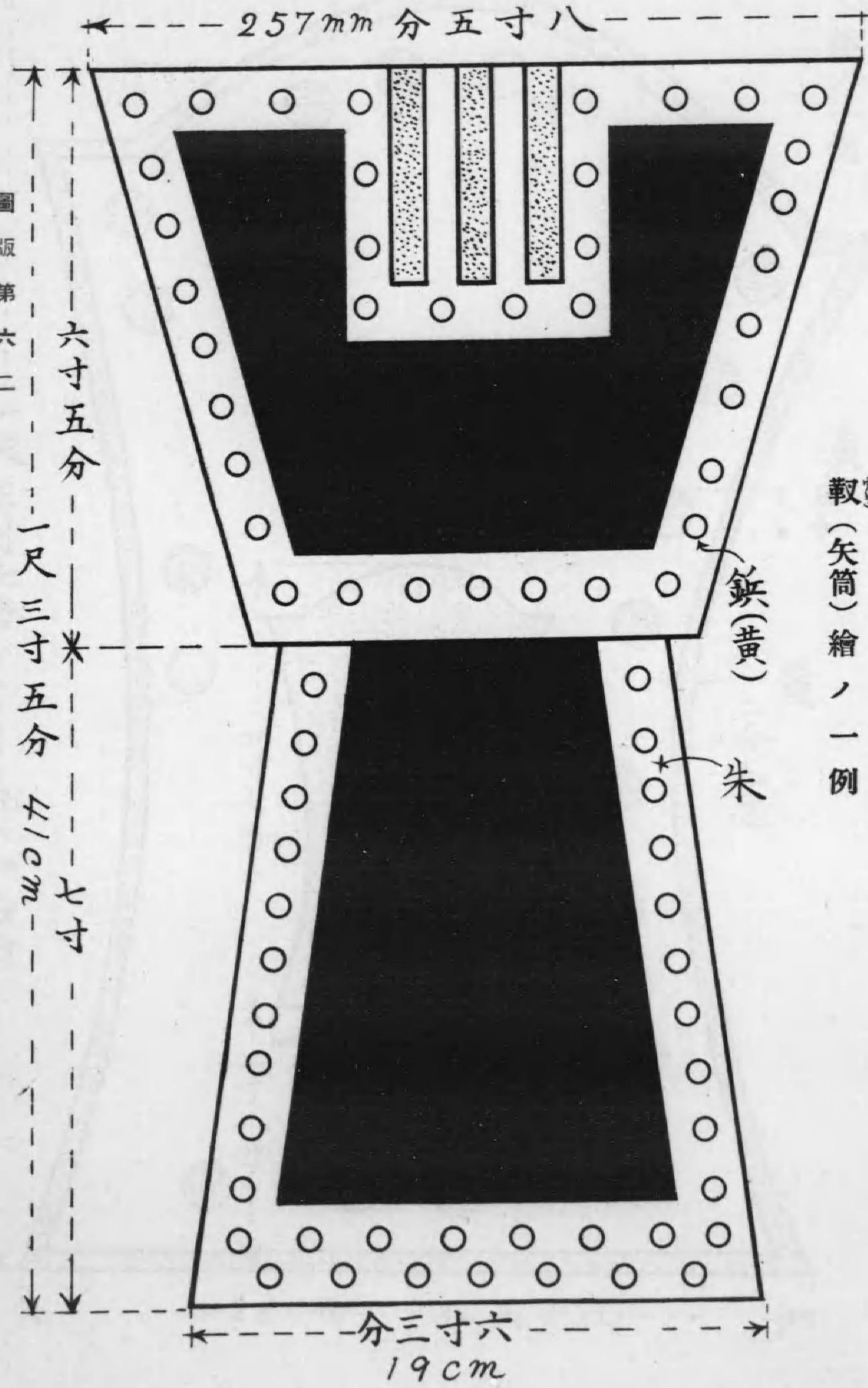


圖版第六一

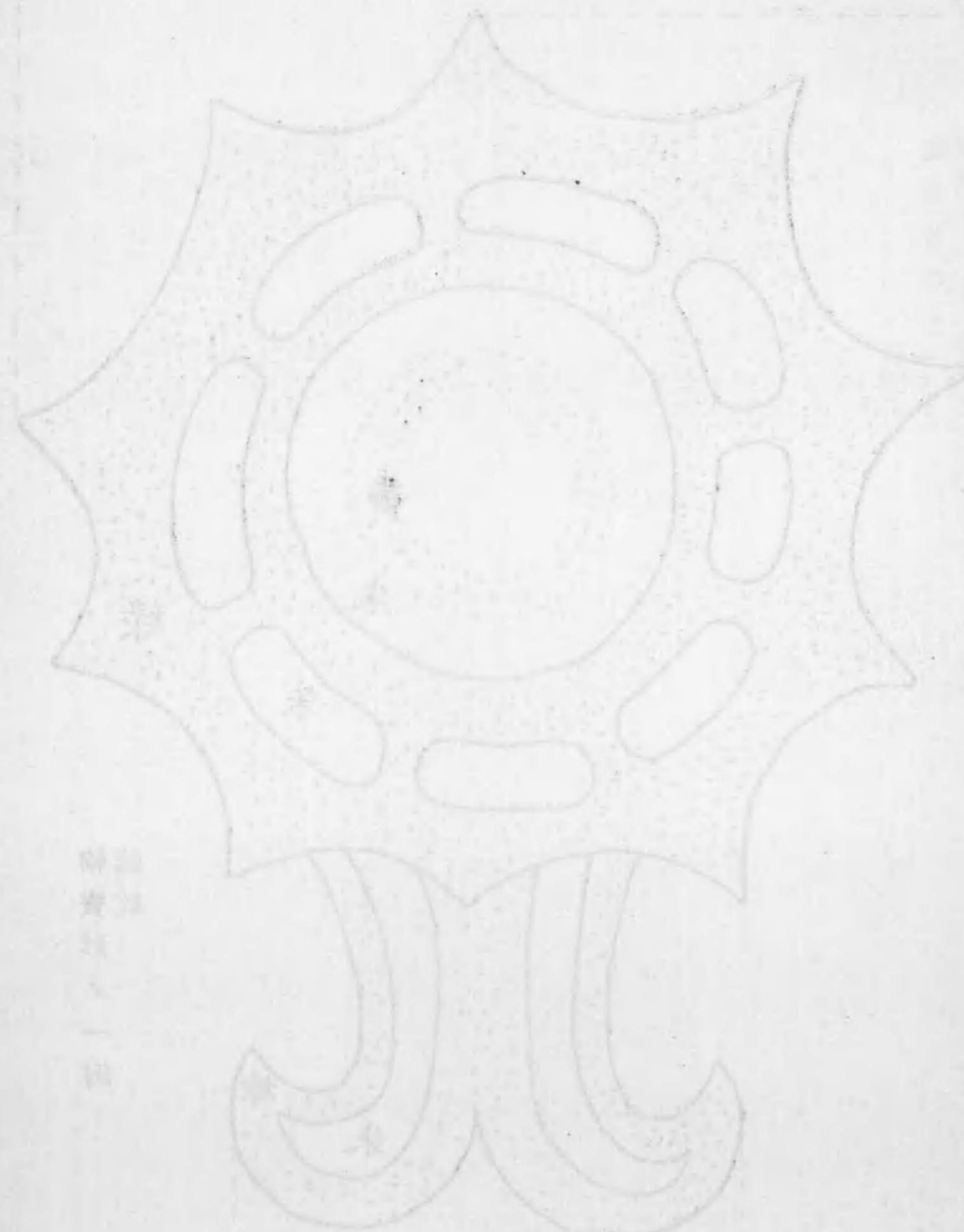
六寸九分 21cm

輪寶形ノ一例
鏡紋

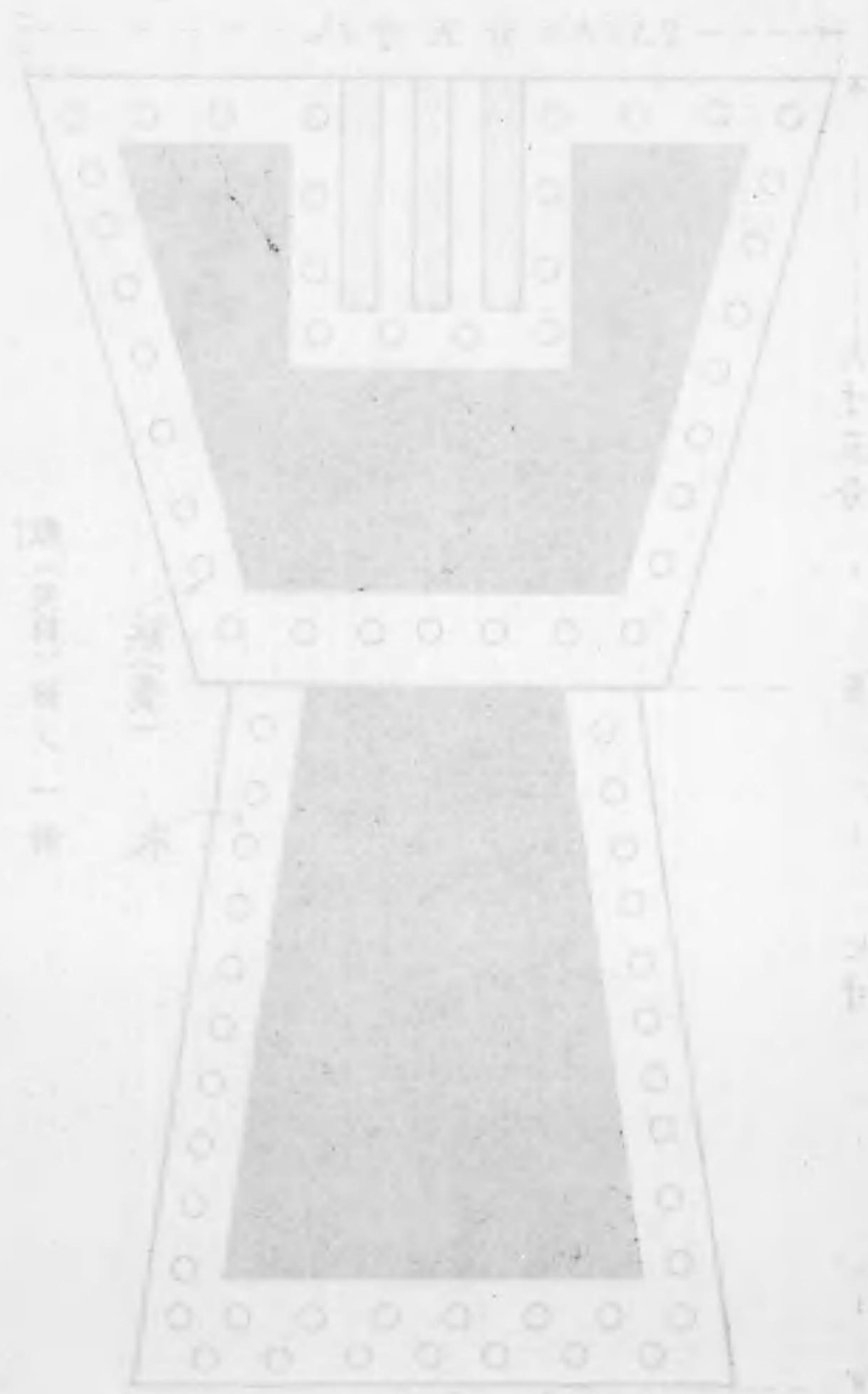
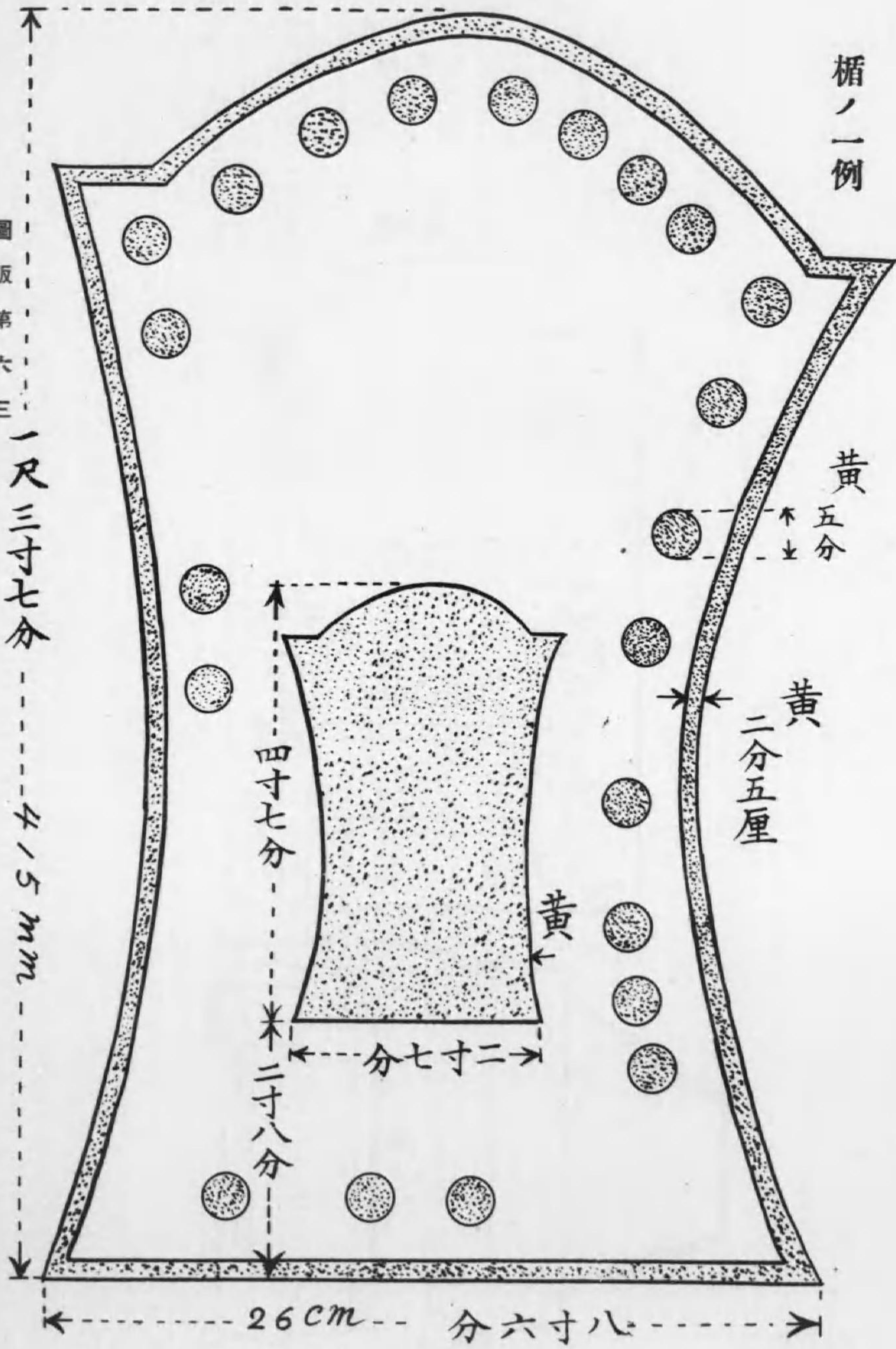
圖版第六二



鈔(黄)繪ノ一例

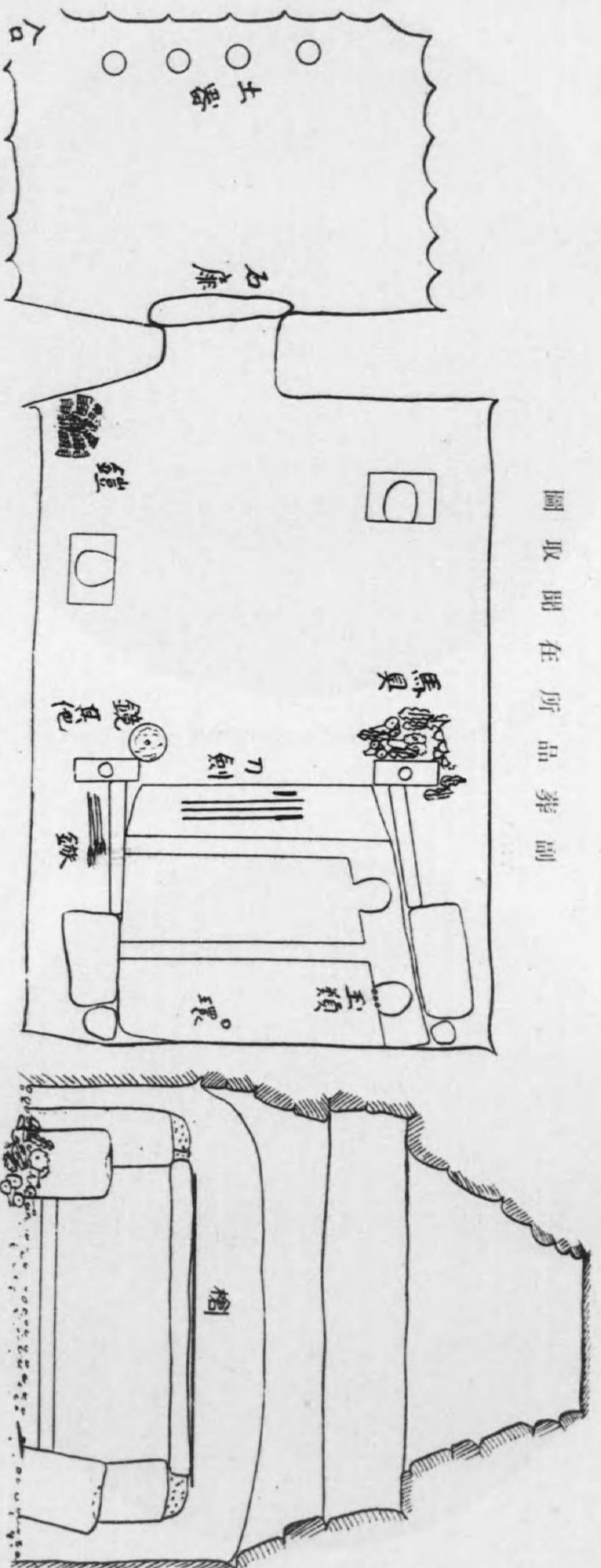


圖版第六三一尺三寸七分 4/5 mm



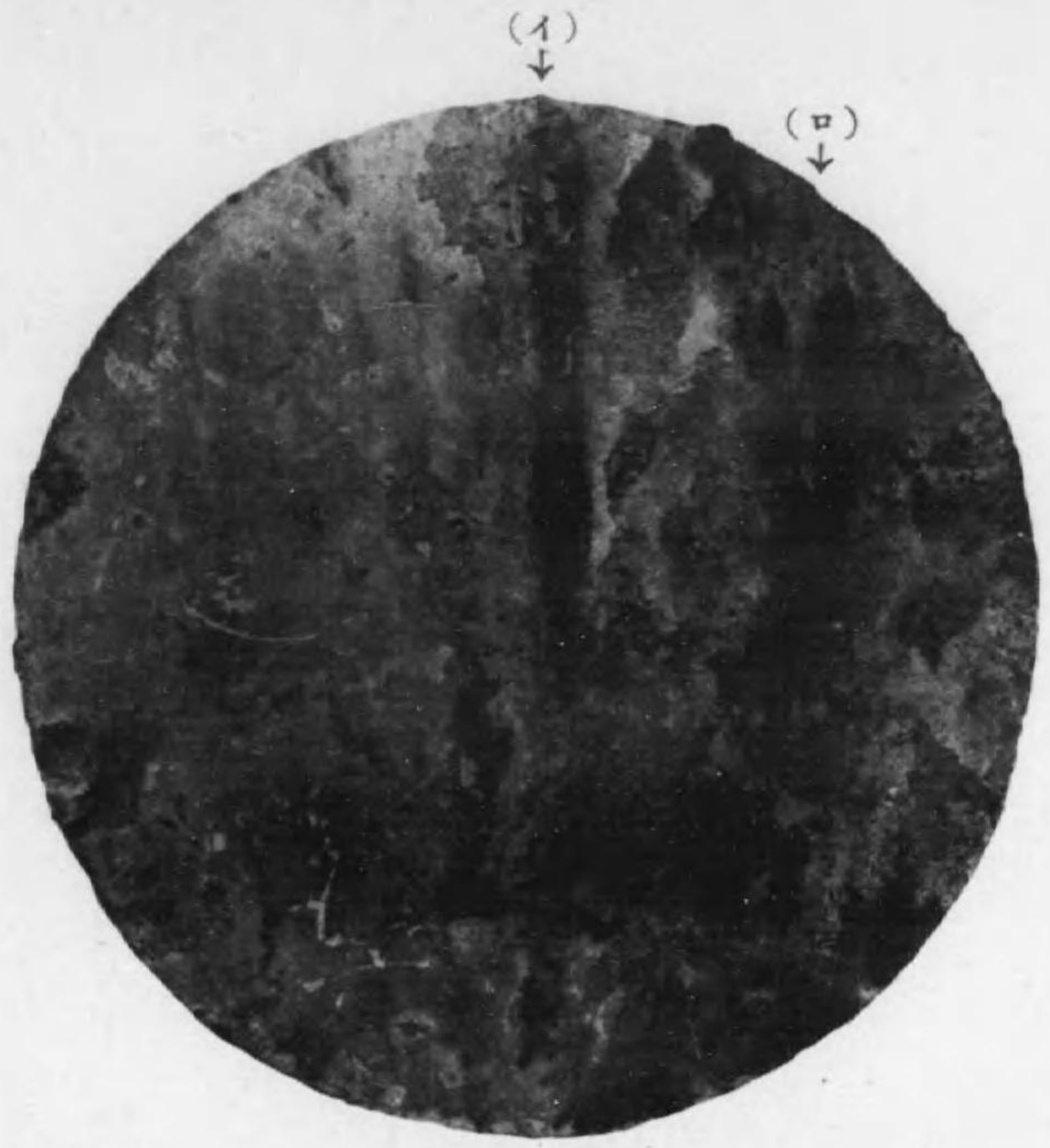


圖取則在所品葬副



圖版第六四

圖版第六五



青銅鏡(仿製)表面

ノモルセ着跡リヨニ用作澁沈解分鏡鉄掲ガ矢鐵鉄ハ(ロ)(イ)

圖版第六六



同上裏面(四神四獸紋様)

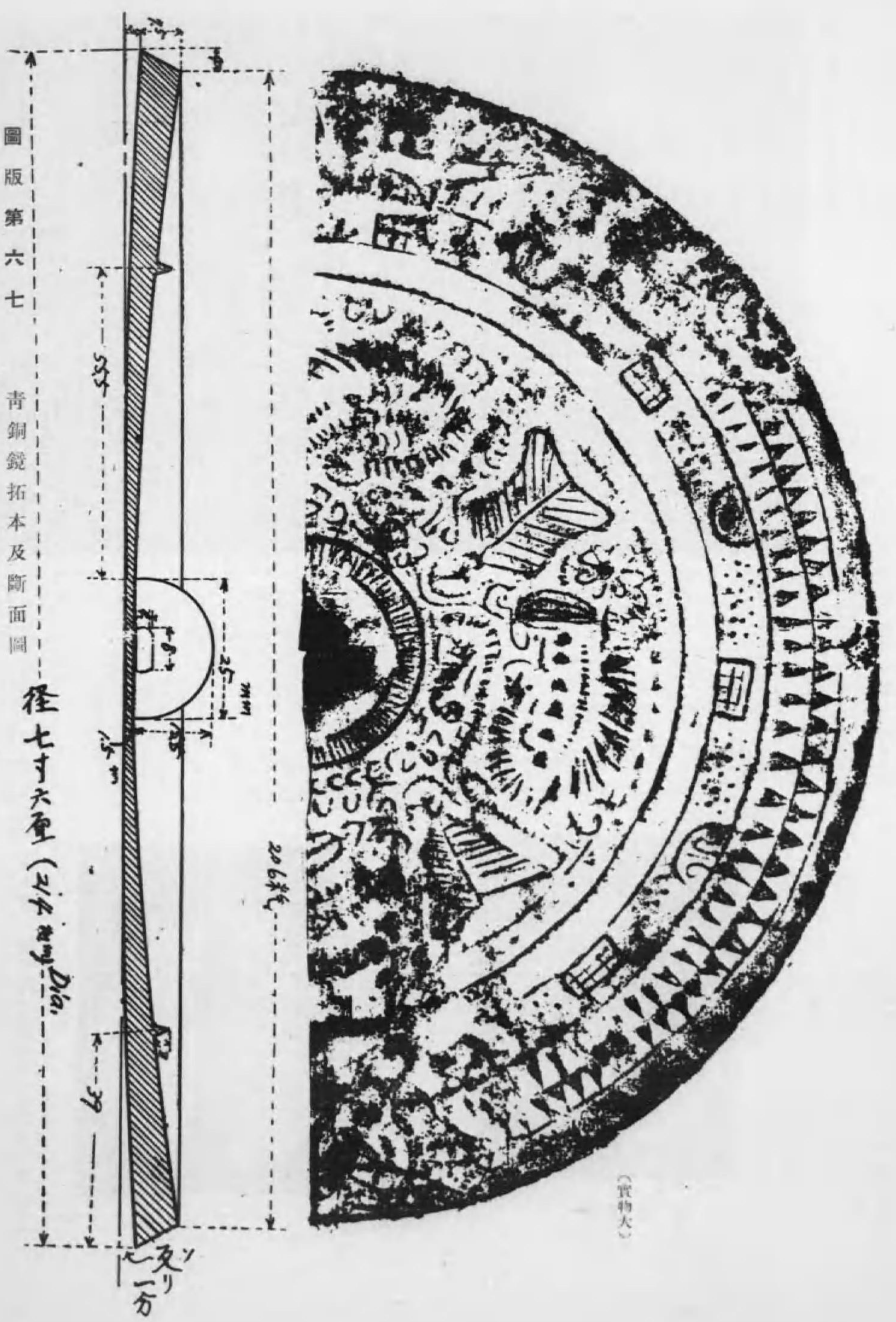
(イ) →

(イ)ハ包布ノ密着セ
ルモノ



圖版第六七 青銅鏡拓本及斷面圖

徑七寸六厘 (7.6寸) Dia.



(實物大)



鏡ノ包布(麻)殘片

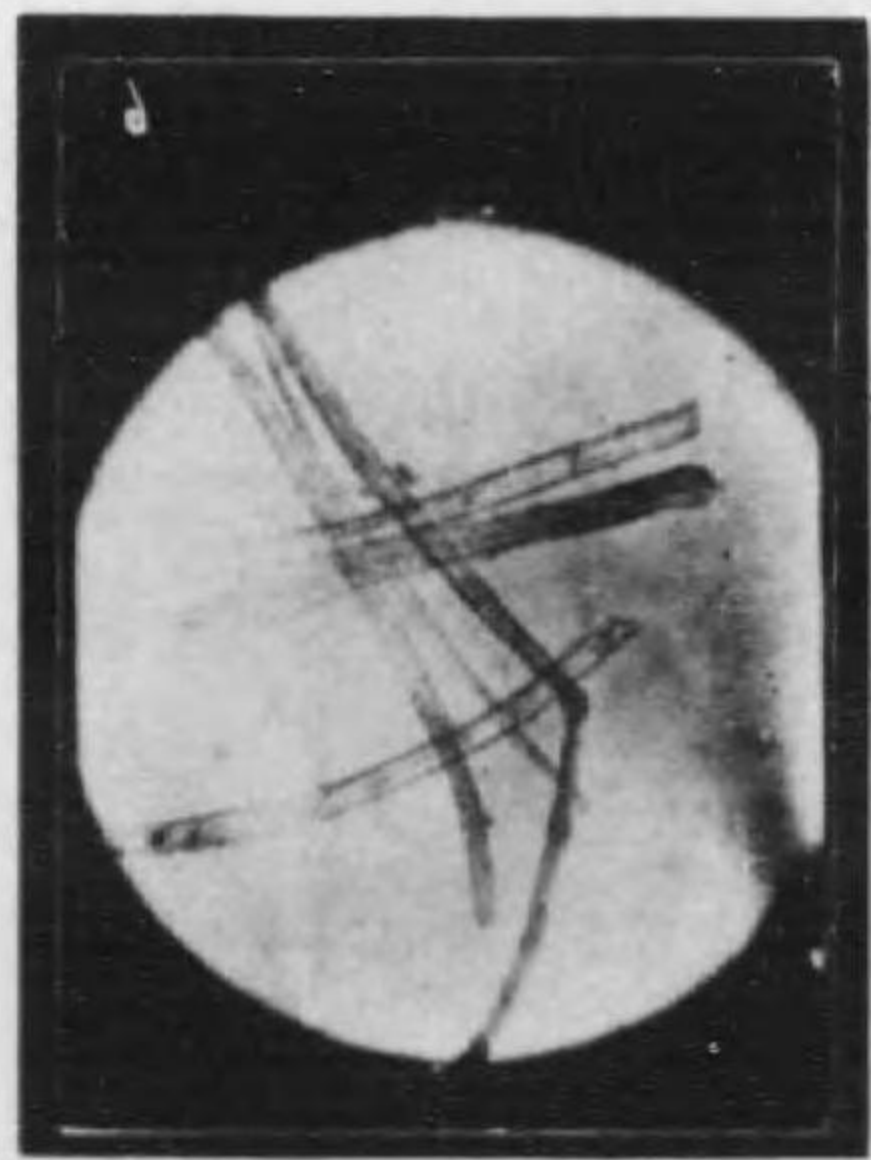
鏡ノ包布ノ顯微鏡寫真

(九州帝國大學農學部植物學教室顯影)



× 13.5
String

燃糸 (一三、五倍)

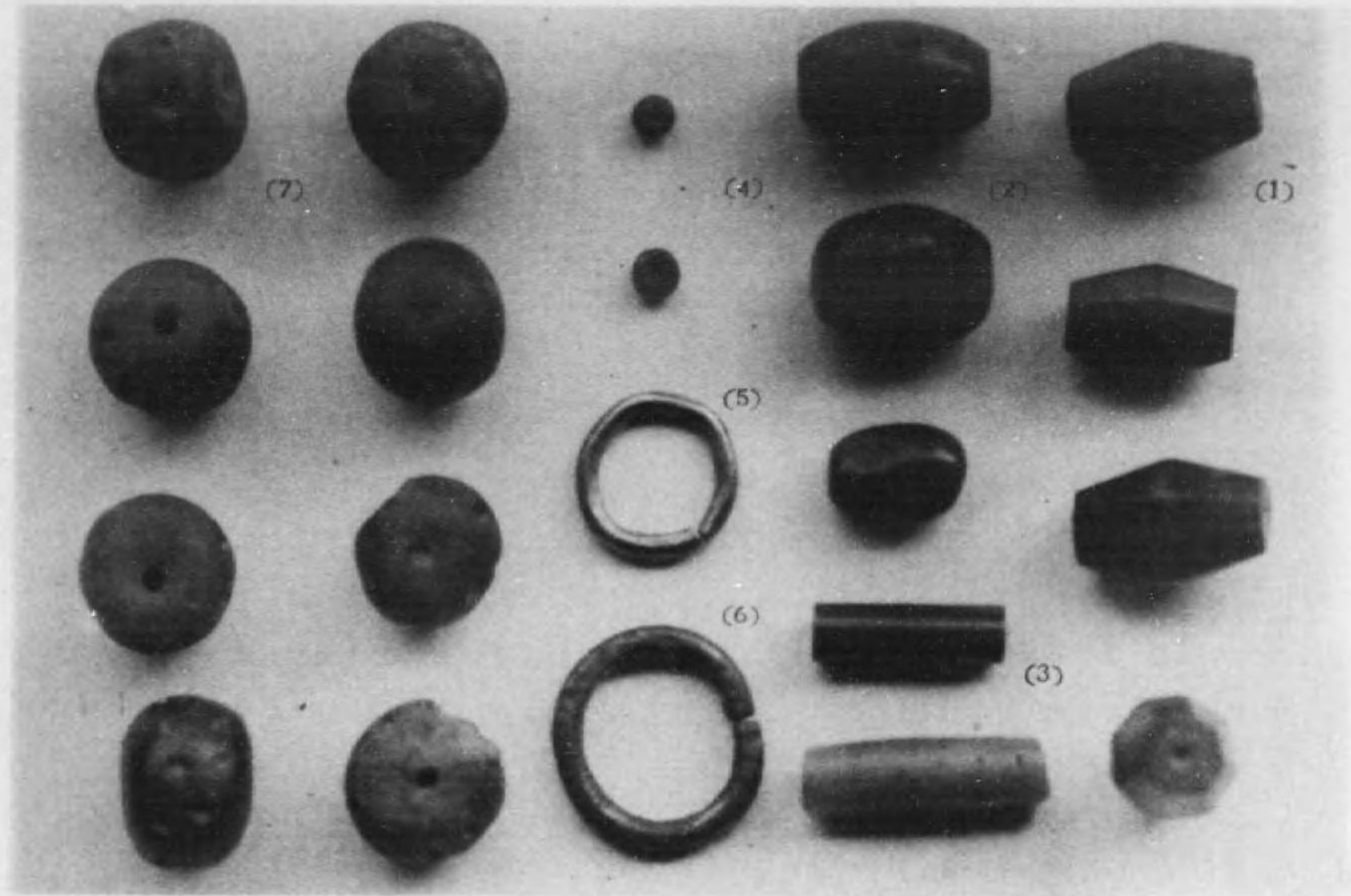


× 60
Fiber

纖維 (六〇倍)



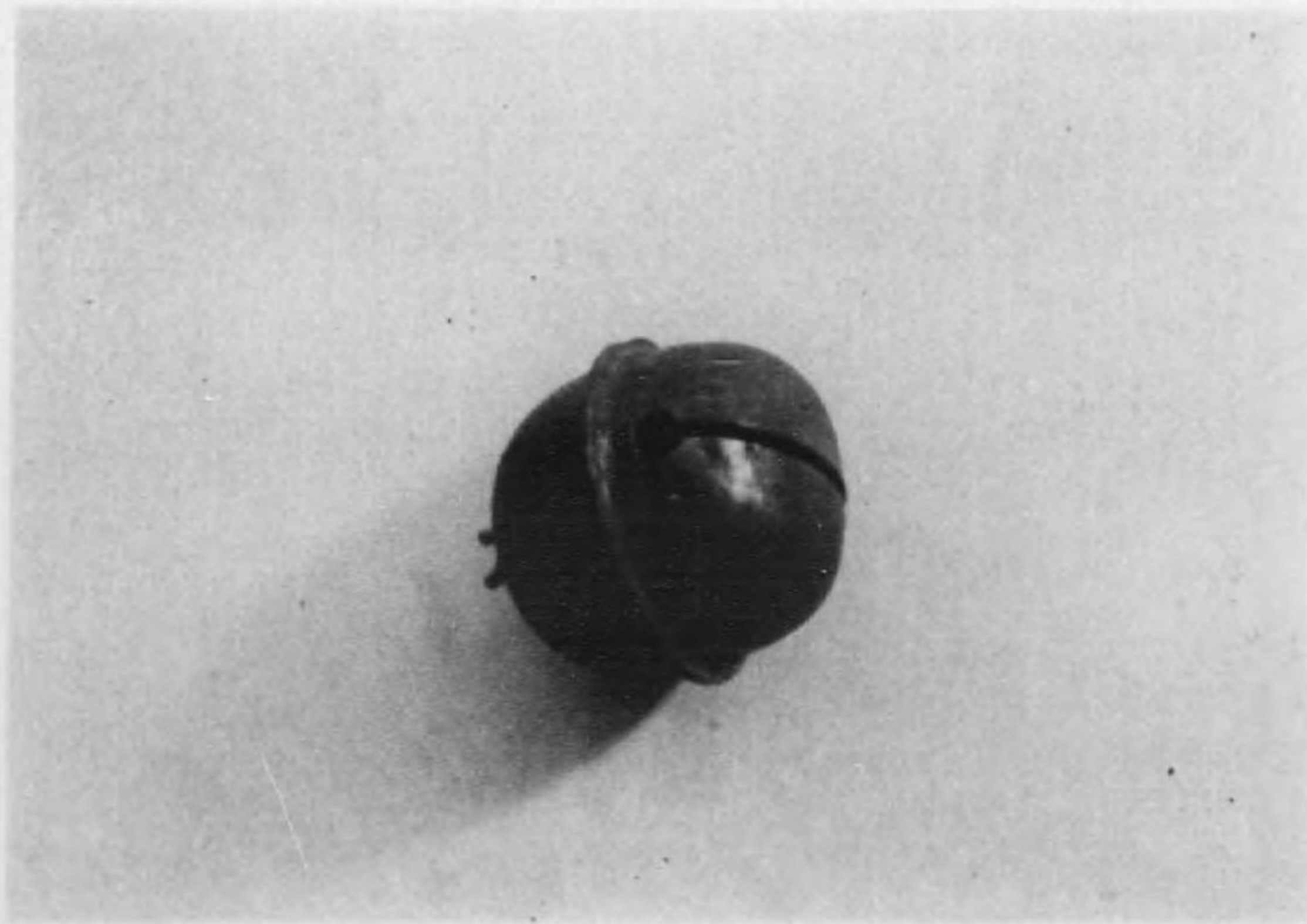
玉類



- (1) 埋木製切子玉
- (2) 琥珀製棗玉
- (3) 青瑪瑙製管玉
- (4) 青石製小玉
- (5) 金環
- (6) 銀環
- (7) 粘土製賽目形丸玉

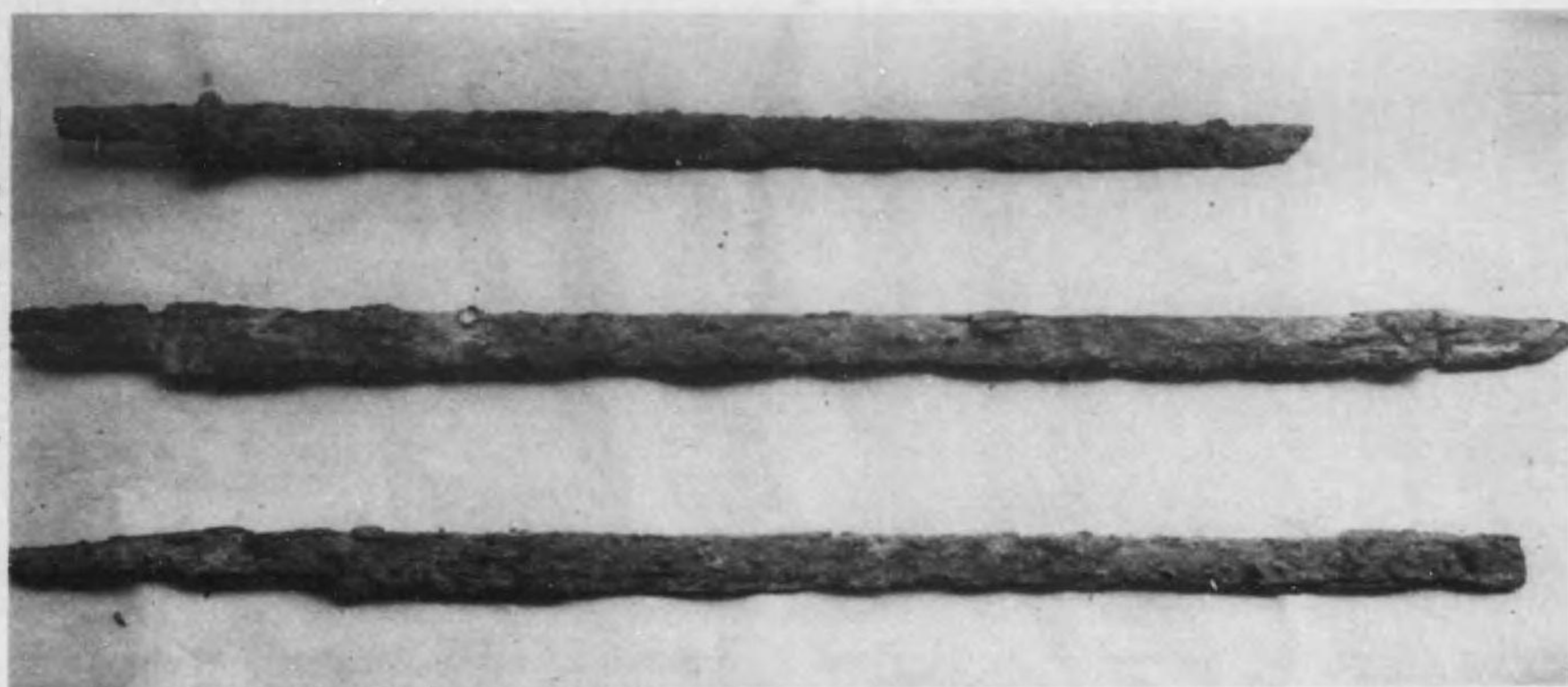
圖版第七〇
筑前王塚古墳
副葬品

銀製小鈴



圖版七一

振 三 刀 直



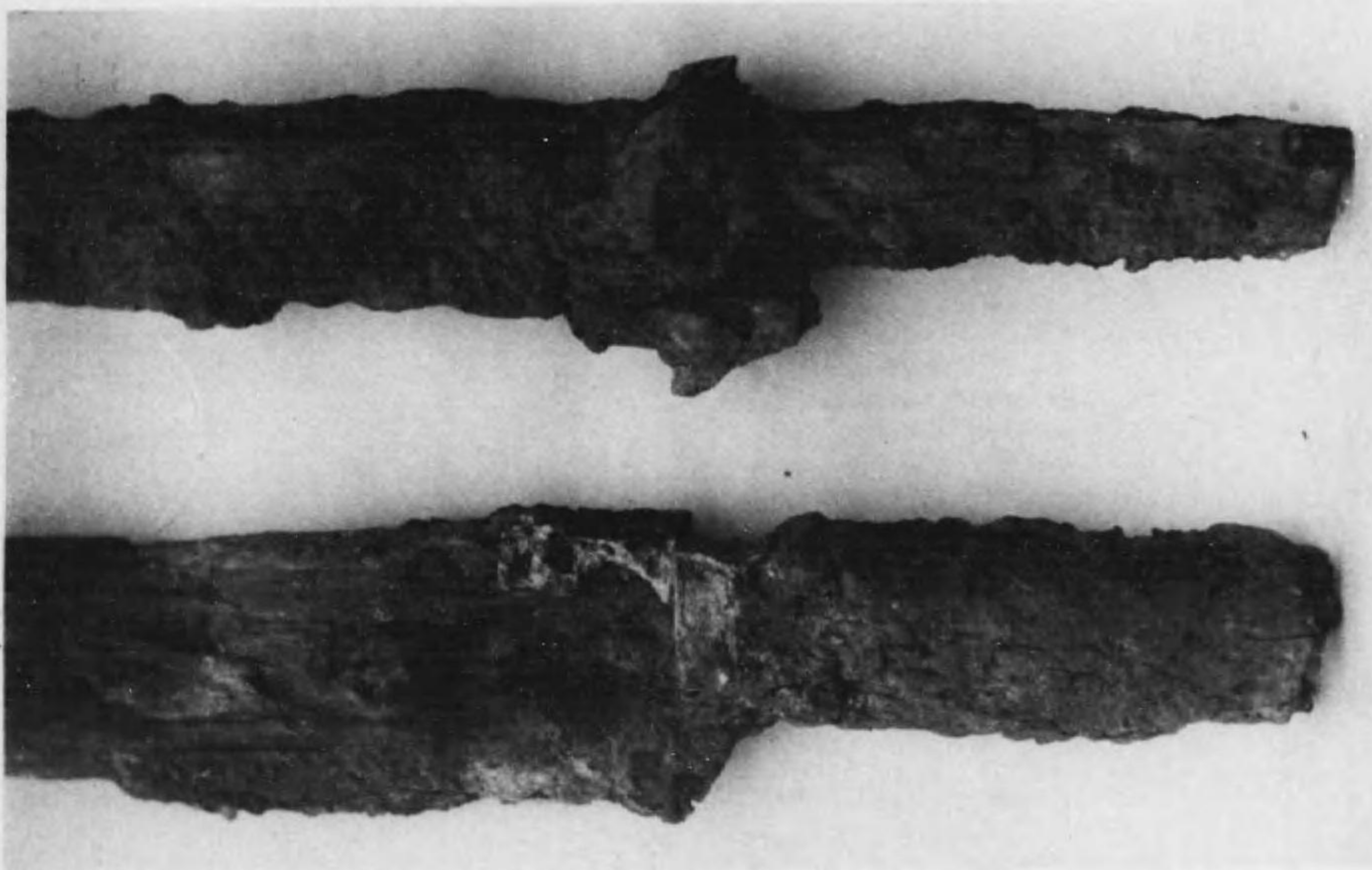
(ウ)

(ろ)

(は)

圖版第七二

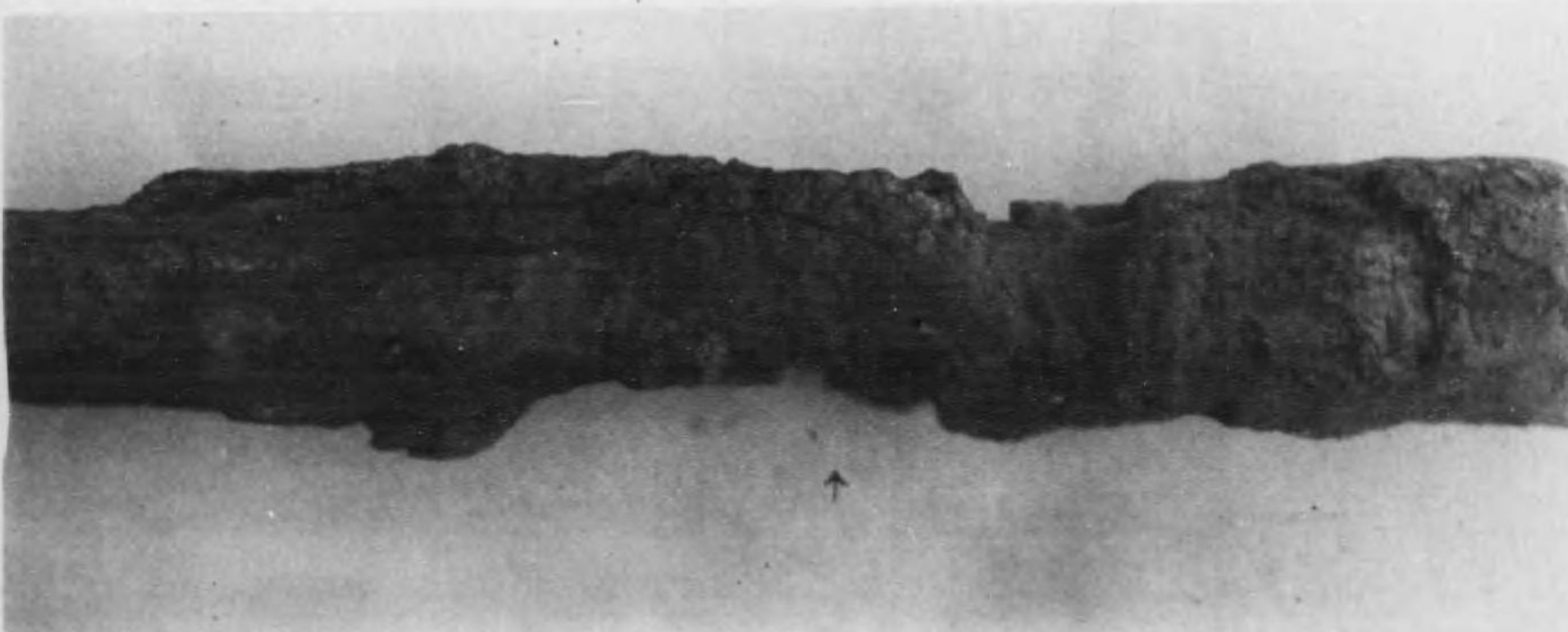
筑前王塚古墳



鹿角製刀装具ノ残影

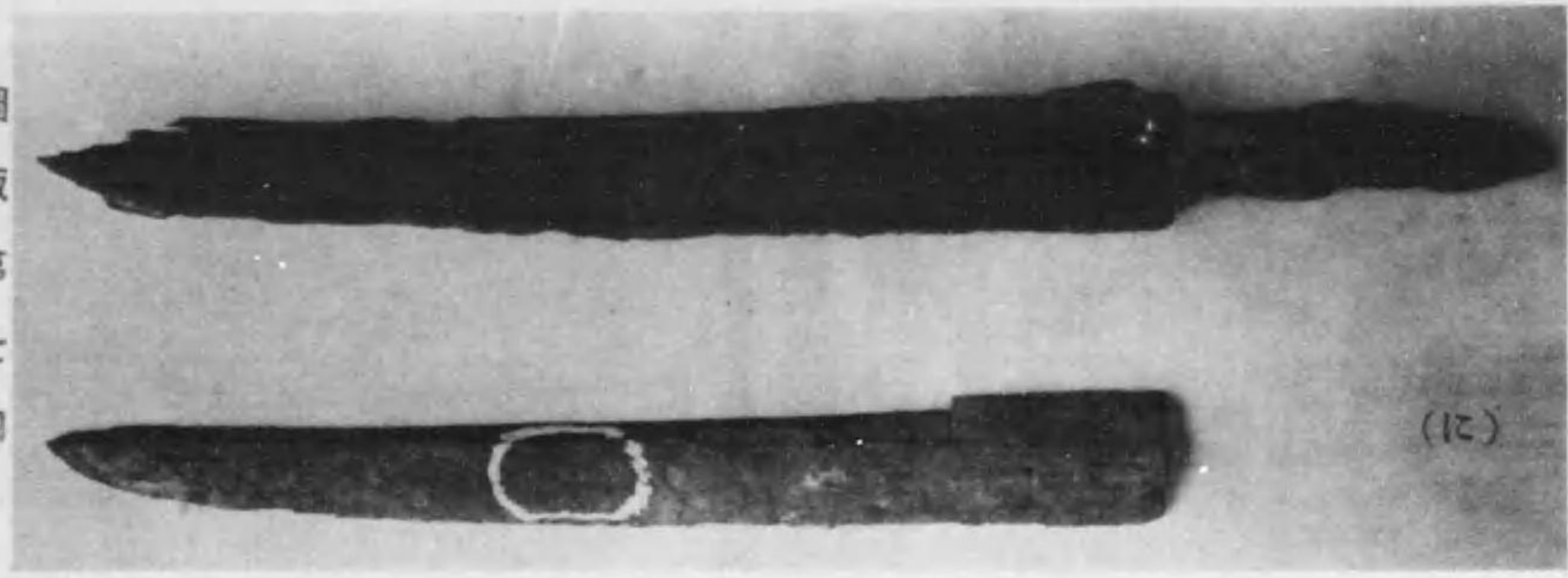
圖版七三

副葬品



直孤紋影

圖版第七四
筑前王塚古墳



刀子
一口

(倍七)眞寫鏡微顯ノ痕毛ルセ着膠ニ鞘子刀

(内線白ノ(12)同上)

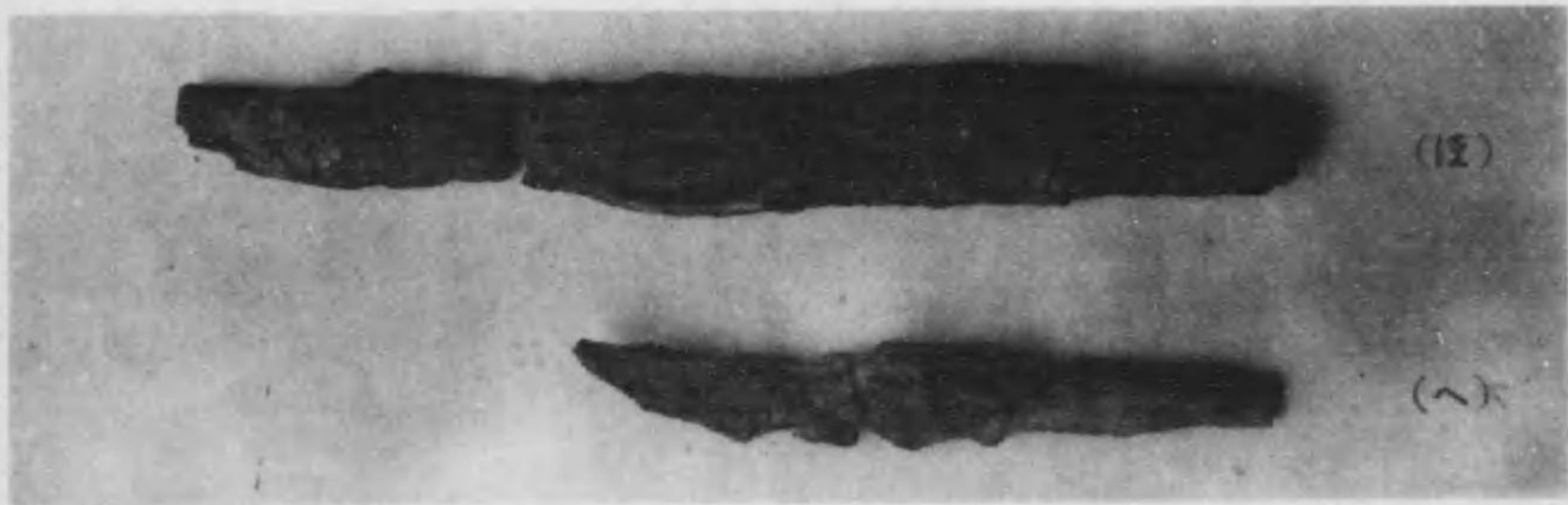
副
品

圖版第七五



(影撮室教學物動部學農學大國帝州九)

圖版第七六



刀子
二口

圖版第七七



(實物大)

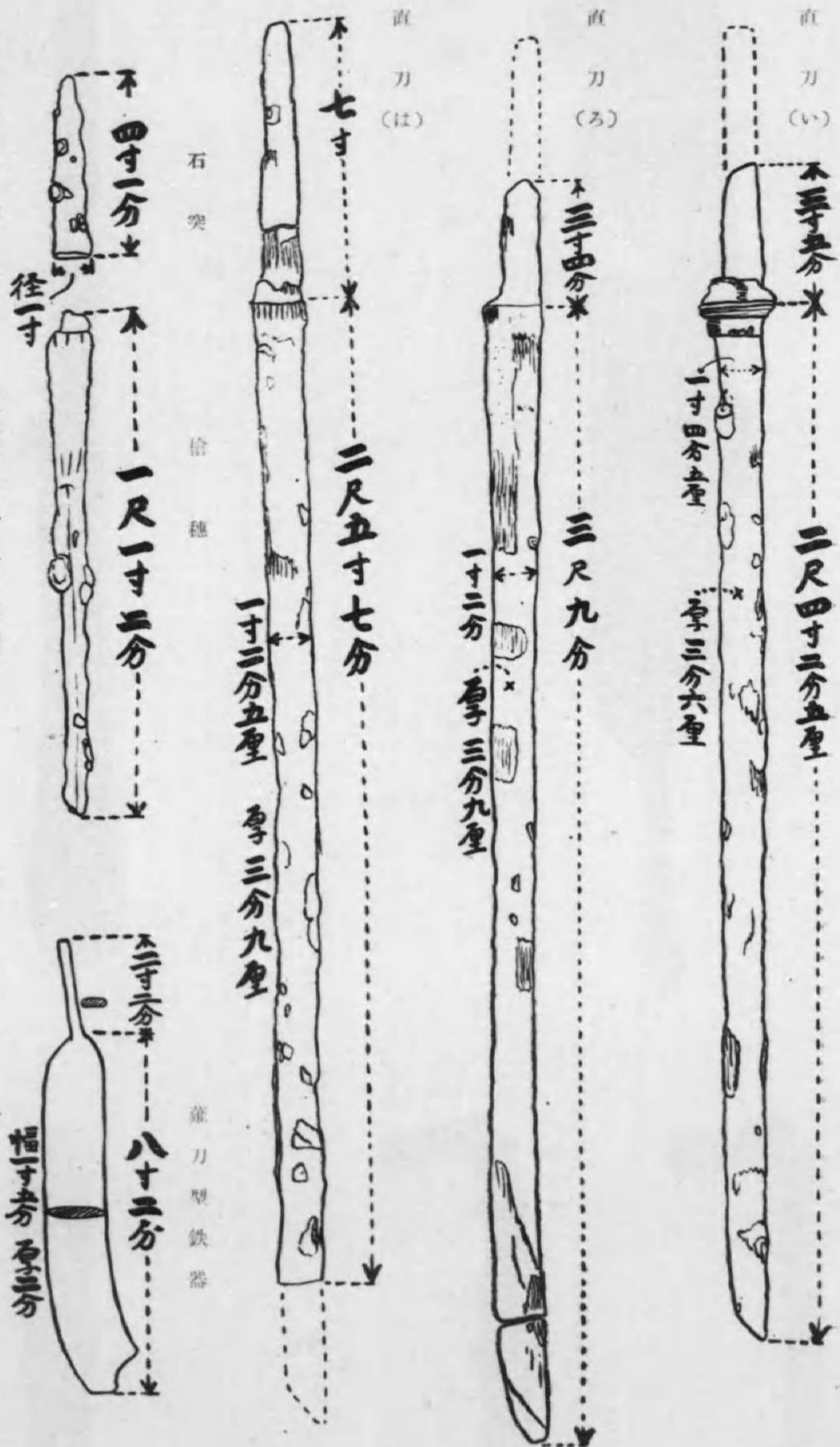


刀子(仁鏡)鞘拓本及寸法



圖版第七八

直刀及槍寸法圖



圖版第七九



槍
穂

圖版第八〇



薙
刀型
鐵
器



石
突

圖版八一



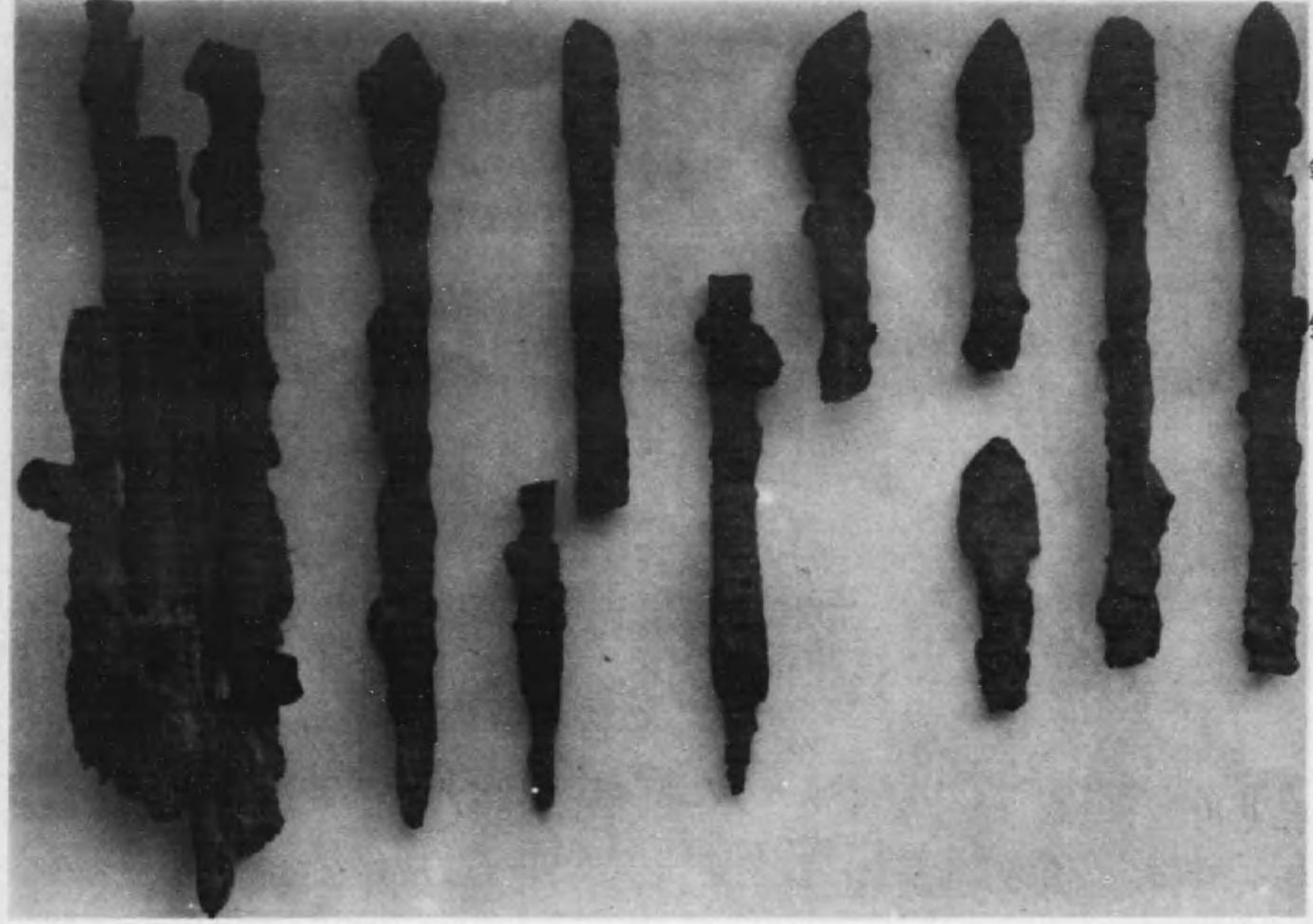
曲
釘
形
金
物



圖版第八二

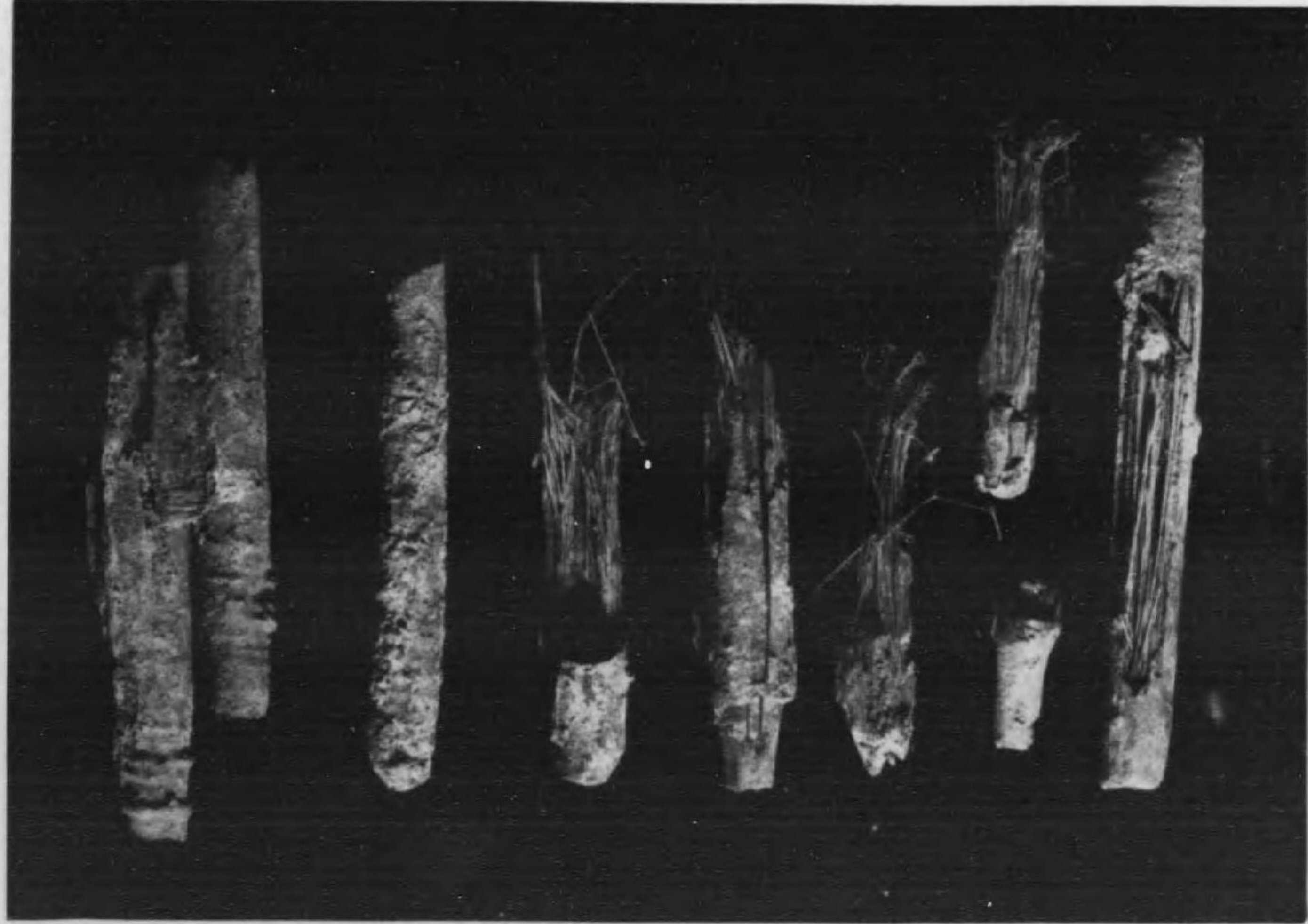
筑前王塚古墳

副葬品



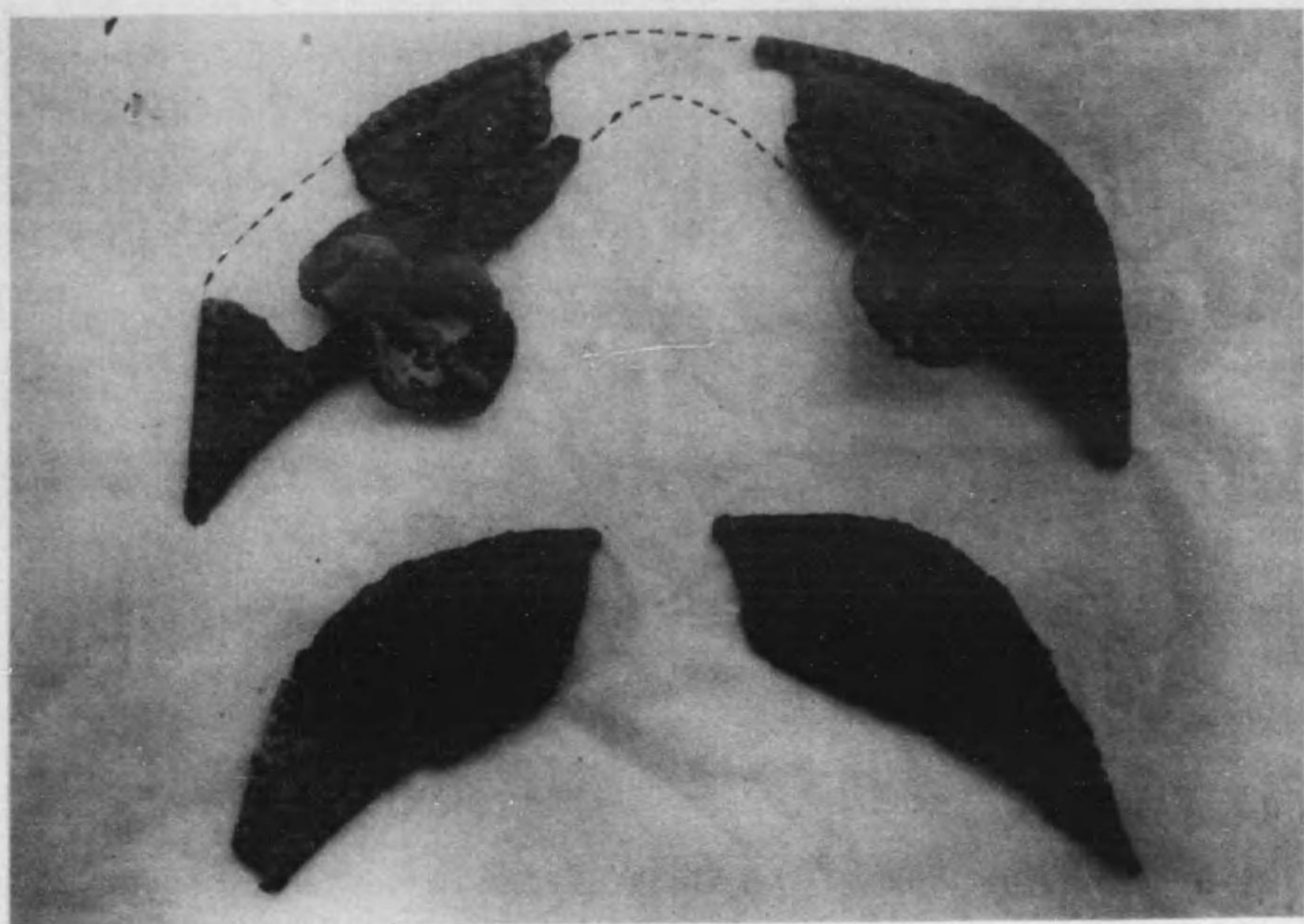
鐵
鐵

圖版第八三

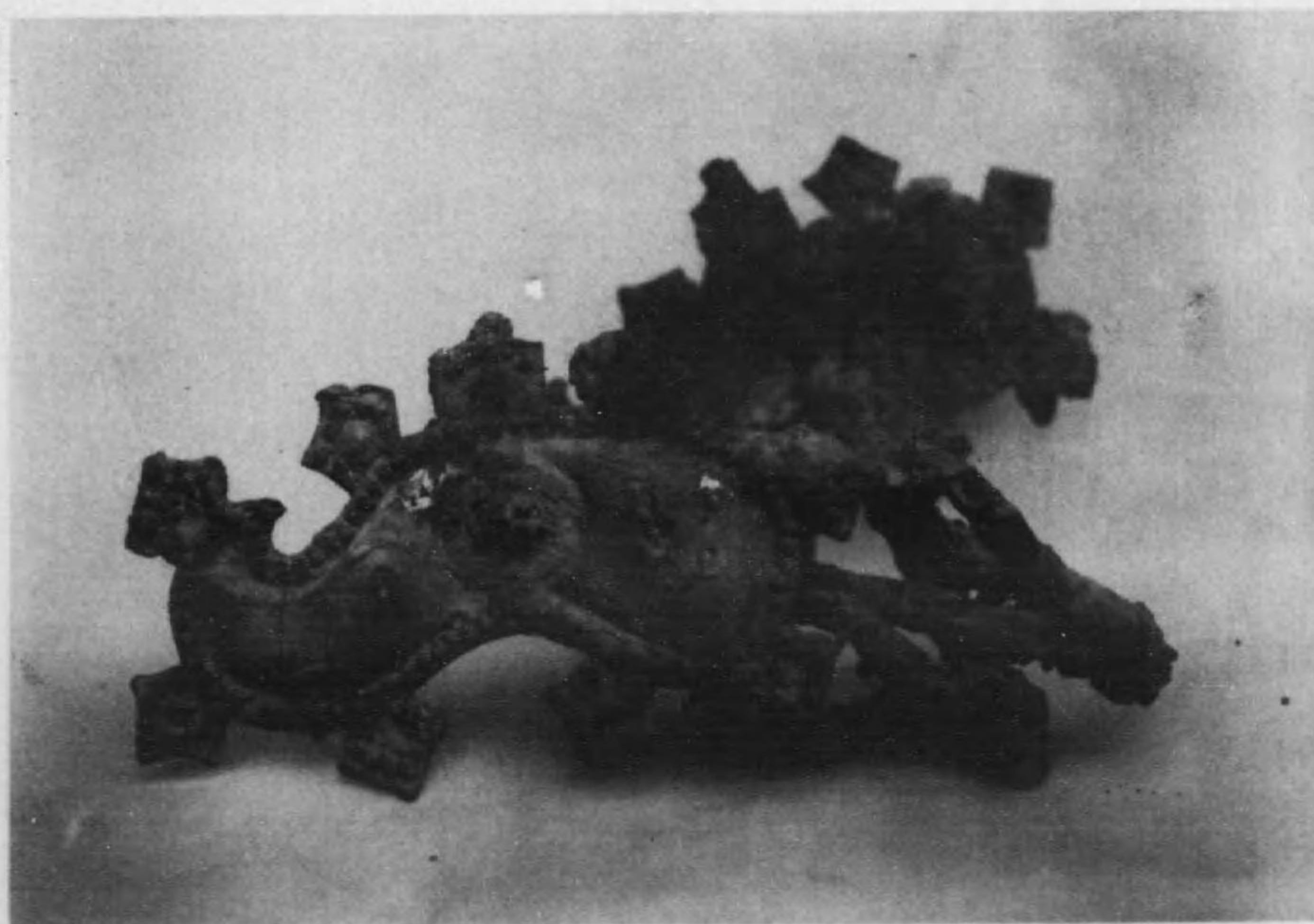


矢ノ纖維(竹)及褐鐵礦ノ沈澱被覆

↑
箭狀積堆覆被ルセ用作澱比解分ノ鐵褐=上皮表ノ矢



鞍橋金具鞍



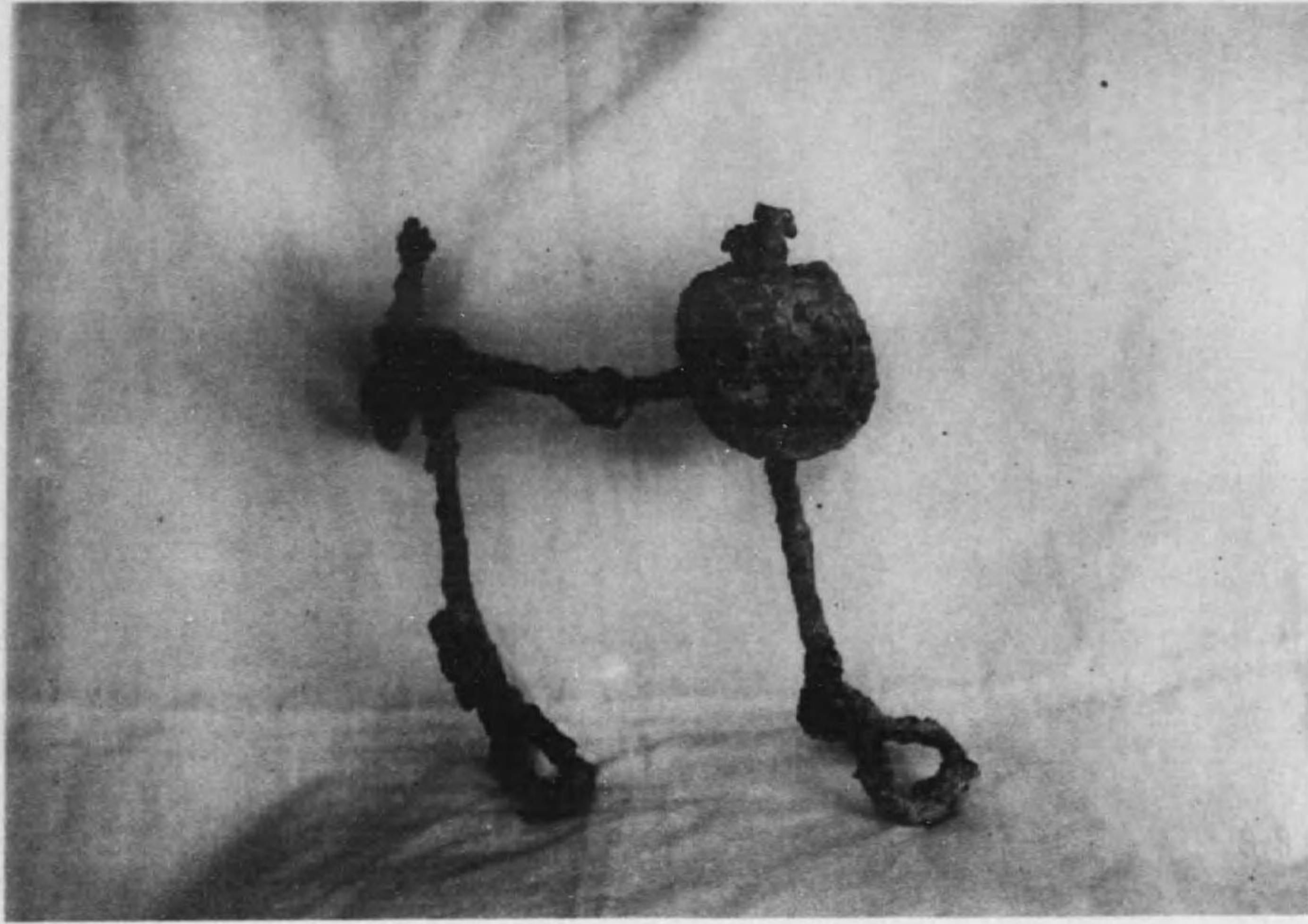
轡
(5) 號

(板鏡型玉曲付銜)

圖版第八六

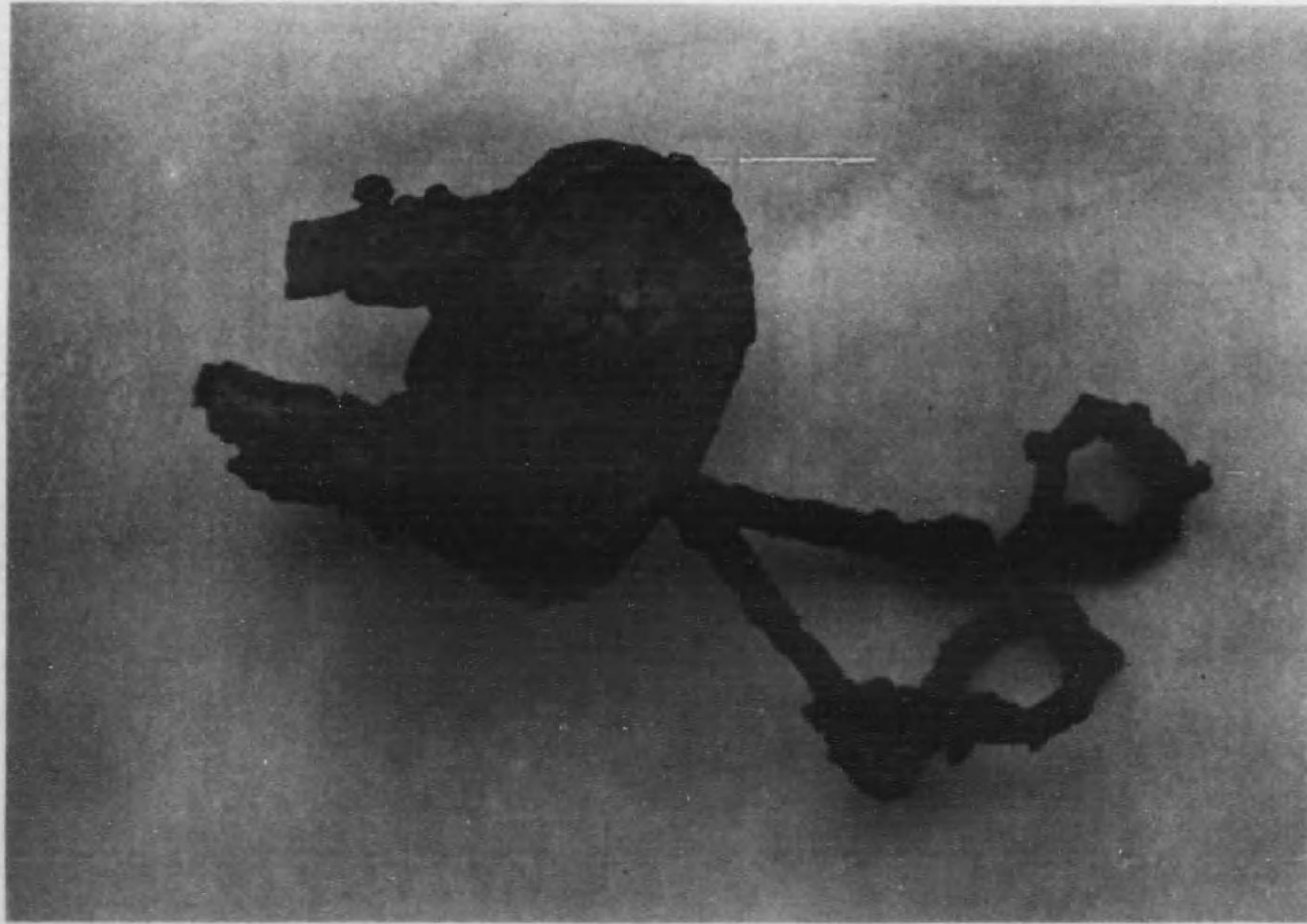
筑前王塚古墳

副葬品



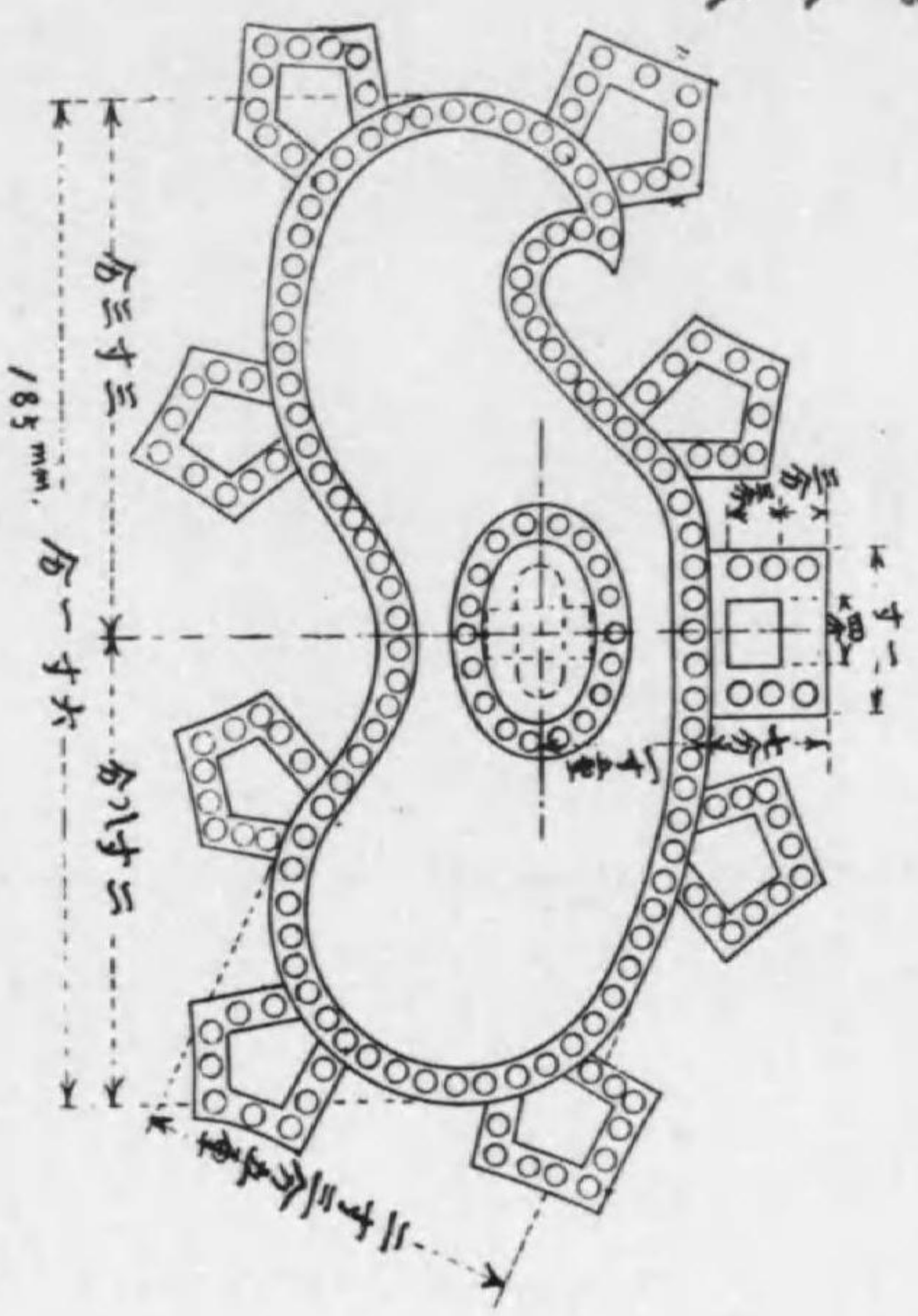
櫛
(ろ) 號

圖版第八七

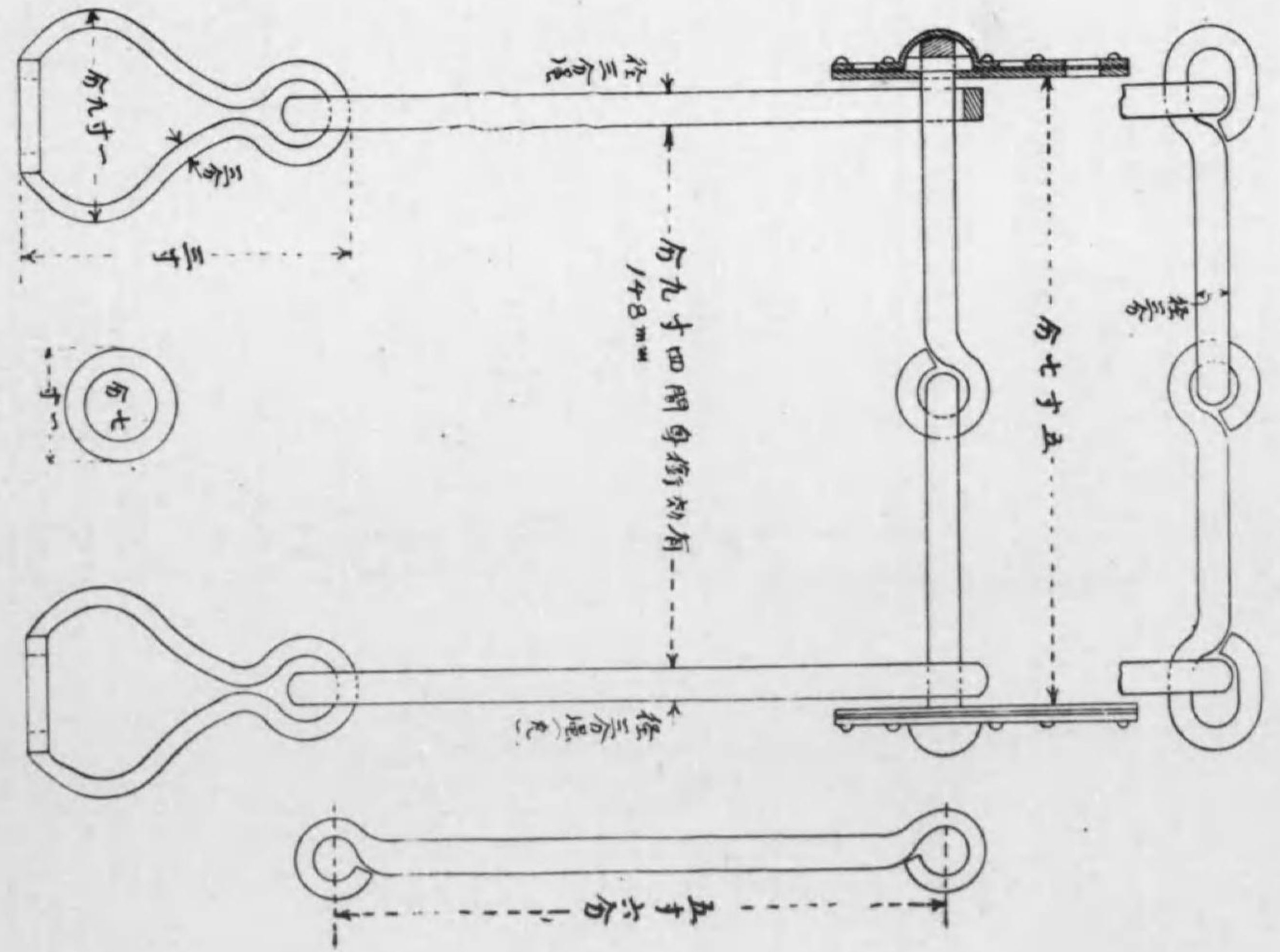


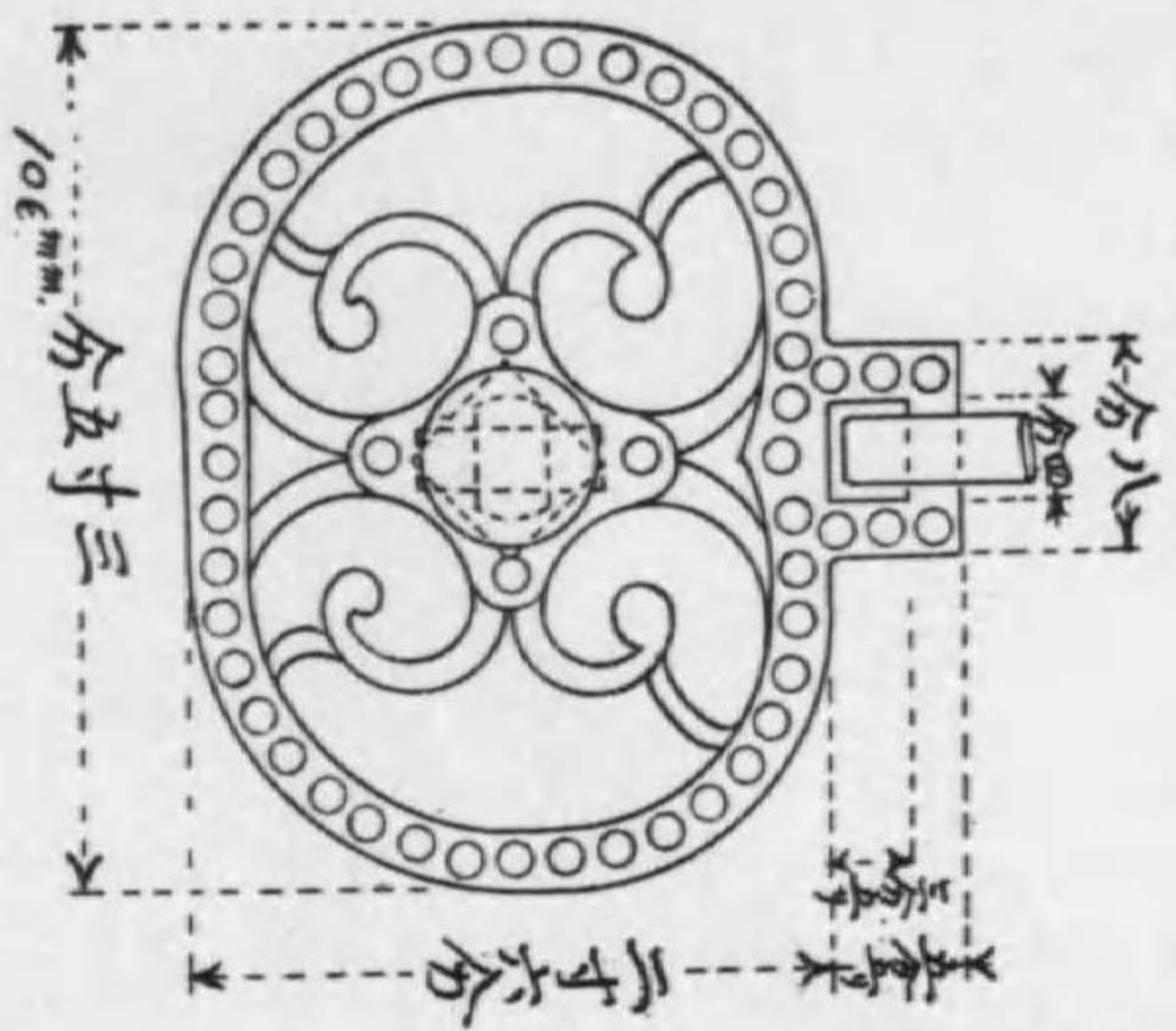
櫛
(は) 號

圖版第八



樽 復原圖(號)
重量四百七匁
鏡板下御身ノ取付方
御身ノ環頭ヲ之ニ對應スル鏡板ノ穴ニ挿入シ之ニ鏡板(幅二分五厘位)ヲ挿入シ、其ノ上ニ竹圓形ノ蓋金物(カバ)ヲ取付ケタリ。

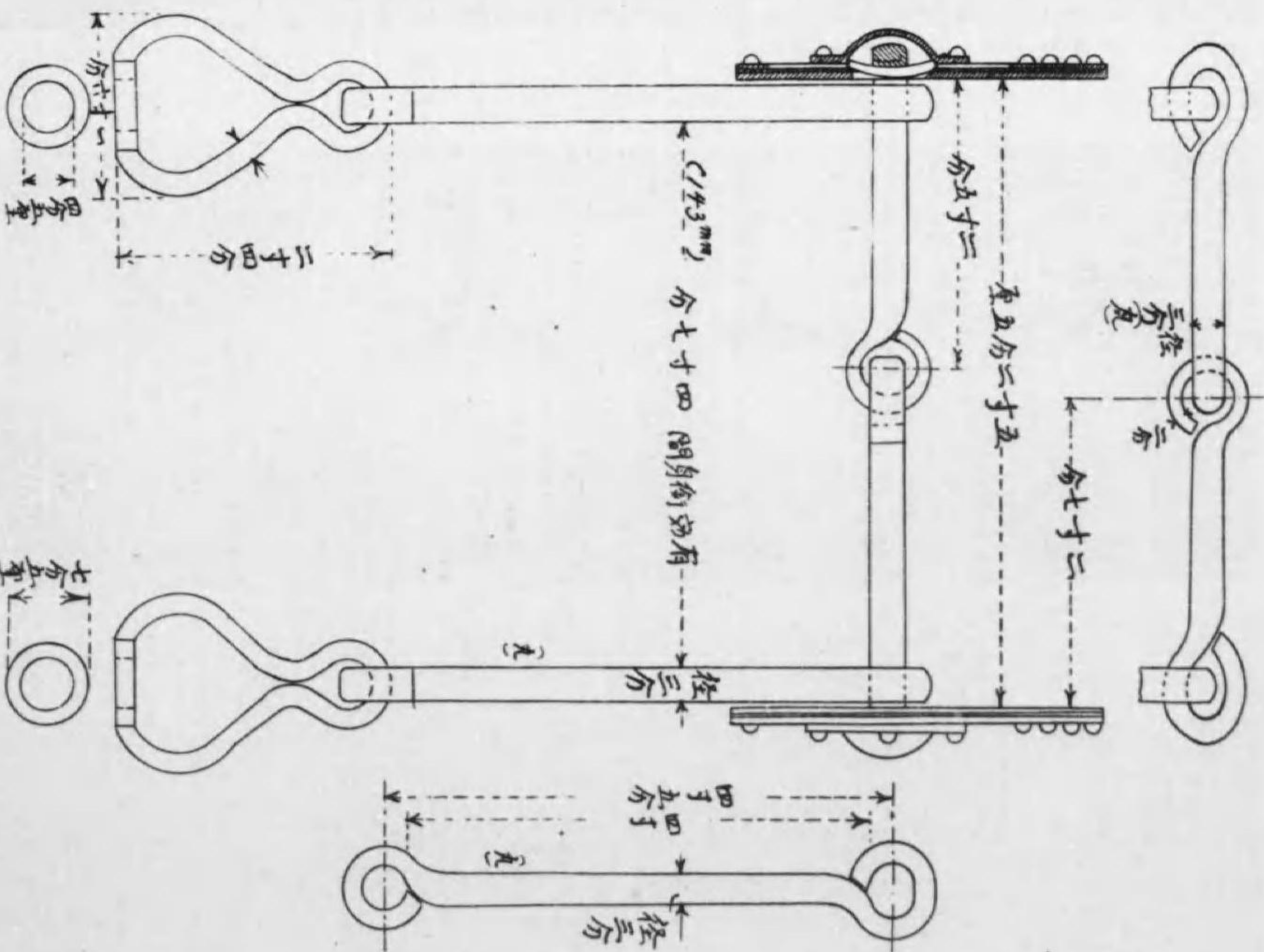




鏡板下衛身ノ取付方
 鏡板ノ軸線ニ對角ニ穿テタル六分角ノ穴
 ニ衛身ノ環頭ヲ挿入シ之ニ鏡板(幅二分
 位)ヲ嵌ルシ其ノ上ニ四ツ手形ノ蓋金物
 (カバシ)ヲ取付ケタリ。

重量百八十八匁

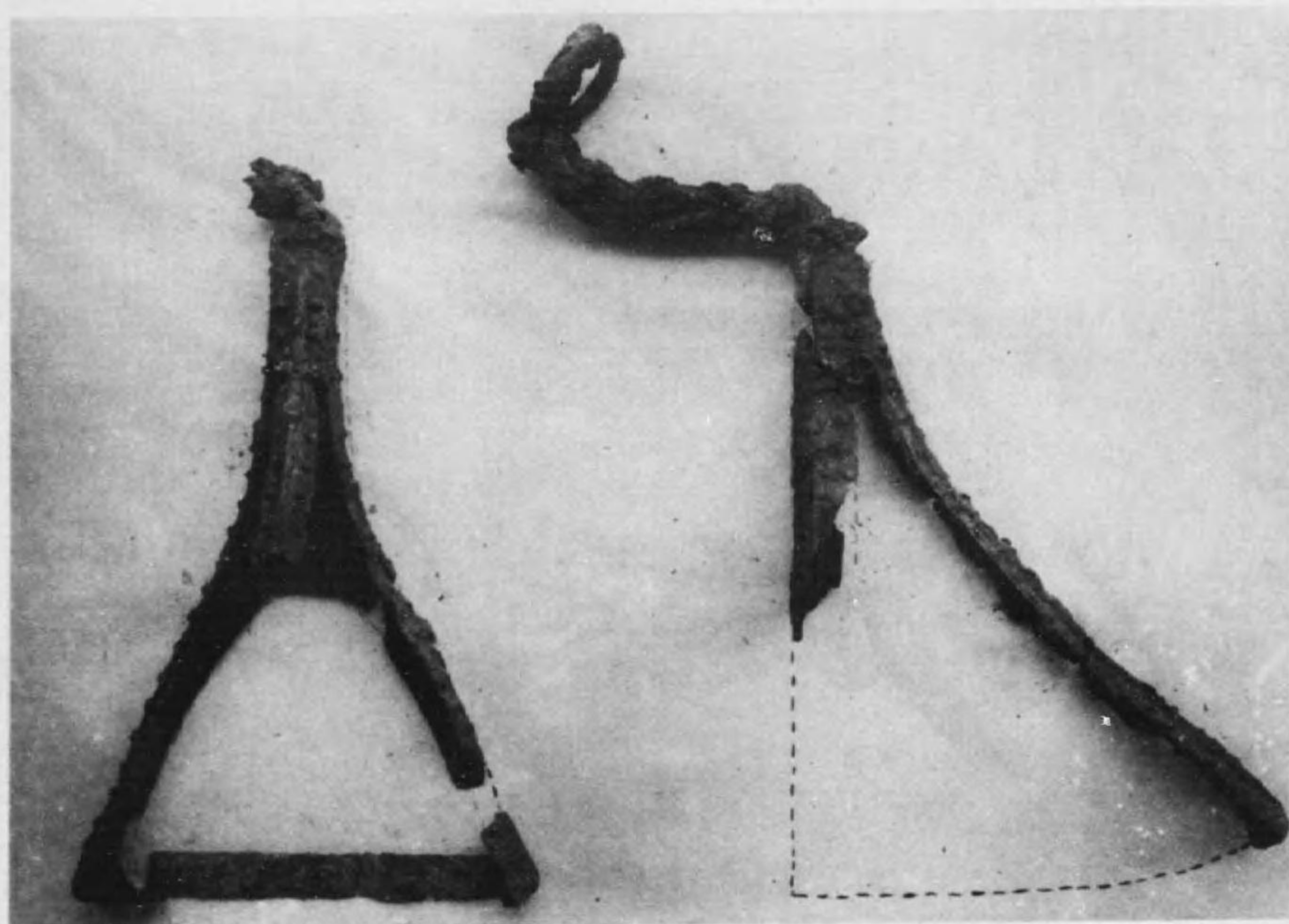
轉 復原圖(名號)



圖版第九〇

筑前王塚古墳

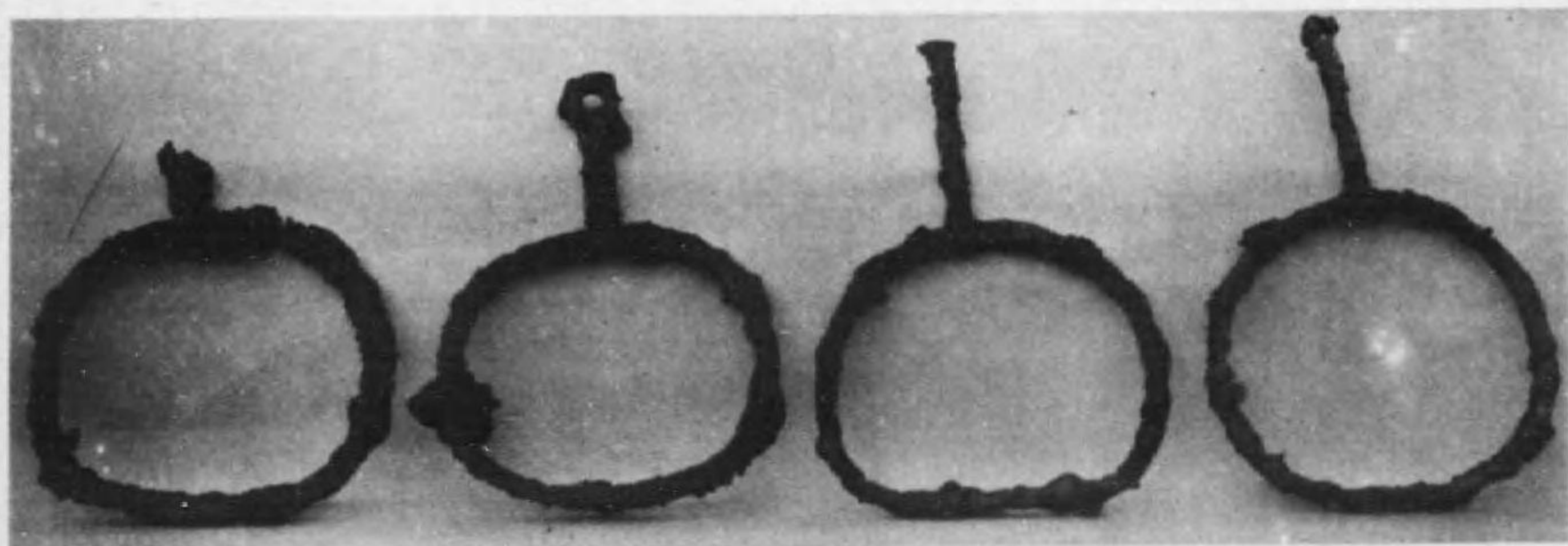
副葬品



壺鈴

一掛

圖版九一



(甲)

(イ)

輪鈴

二掛

